明治三十一年七月五日發兌

女鑑

第百六十號

東京 國光社

女鑑第百六拾號

目録

崇賢門院



上つ代の國史を讀む度每に

殊に、吾人の心にしみて、ゆかしくも尊くもおぼえまつる事は、其の代の人の心情のあはれに美はしき事にして、そが中にも、殊なるは、日本武尊の御妃にわたらせたまへる弟橘媛が、尊の爲めにつくしたまへるまごゝろなり。尊が東夷征伐の艱難を供にせさせられたるより、しかも、身を以て尊が御船の危きをすくひたまへるに至りては、尊を思はるゝ御心のやさしさ、尊の爲めにつくしたまへる御心情のいさましさ、誠にゆかしく尊くいふばかりもあらずかし。

當時、東の國々は、野も山も、惡鬼邪神の住み荒びたる所にて、人も夷とて、けの荒ものの荒きにかはらず、しかも、道路は塵ばかりも開けず、瘴癘毒霧に埋れたる時なり。國の爲めとはいへ、民の爲めとはいへ、當時、尊が東征の御艱難誠にれし

はかられ奉りて、もつたいなきばかりなり。而して、媛には、かよわき御身を以て、よく此の苦しき尊が東征の道にも伴れ立ちたまひて、共にあらがねの岩ねをふみさき、共に露ふかき草の枕をまき給ひて、辛苦の中、艱難の間、終始よく尊にかしづき給ひたる御心のやさしさよ。

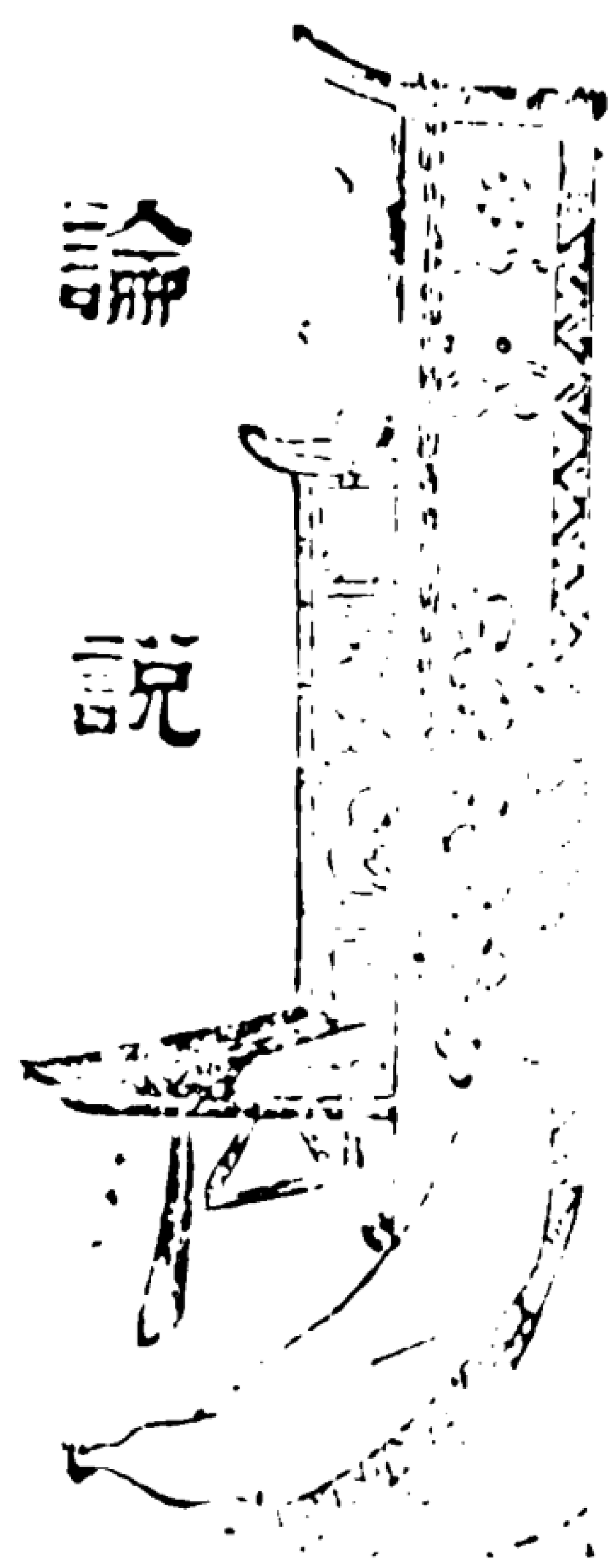
而して、尊が相模よりの御舟路、如何なる海神の心にや、浪風俄にすさまじく猛けり狂ひて、御船をも、一もみにもみくだかんとして、危き事いはむかたなし、媛はこれを見て、こは海神の尊にたゝりての業なめり。されば妾が身を以てかはりまゐらせんとのたまひて、やがて海中に沈みたまへば、海上はいつしかしづまりて、尊の御船は恙なくてやみぬ。あはれ、媛よ、橘媛よ、人々のをしきならひなる命をも露ばかりをしとも思ひたまはで、尊の御命にかはらせたまへる御心のやさしさよ。誠に上もなく尊くかなしくればゞら奉るにこそ。

さねさしさがむのを野にもゆる火の
火中に立ちてとひし君はも

とは、其の時、媛がさすがに尊に別れたてまつるををしみたまひて、よみたまへる御歌なりとかや、敵にあざむかれ燒き立てられたまへる野火の中にも、共に伴れ立ちたまひて、さばかりの艱難辛苦の間にも、つゆばかり離れ給はざりしかなしきいとはしき我が君よ、あはれ我が最愛の君よ、別れんとして、いとはしさに、よびたまへる御歌なり。誠に限りもあらぬやさしき御心のこもりて、かなしさいふばかりなし。よの女子これをよみて泣かざるものは、女子にあらずともいふべし。

然るに、良人は國家の爲めに万里の荒き波路を行きめぐるに、妻女はのどかなる、床に起臥して、しかも、歌舞の遊びをのみ、我が業とし、或は、良人が公務に家業に忙はしくいそしみ勵む時を、妻は徒らに遊びめぐり樂み暮らし、甚しきに至りては、良人の不運に陷るに至るや、其の艱難を共にせず、其の辛苦を分つの心なく、あさましくも良人をすてて仕へざる者などあるは、今の世に、まゝ見も聞きもする事にて、誠になげかはしき今樣の女子の風俗、これを思へば、いよ〳〵ゆかしく尊くおもひまつるは、橘媛の御事になも。

かけていはむも、かしこきことながら、媛こそは、誠に妻女たる者の鏡なれ手本なれ。あはれ、世の女子たちよ、此の媛が深き御心にならひて、深く汝が良人を愛せよ。この媛がやさしき御心にならひて、やさしく汝が良人に仕へよ。この媛がやさしくいさましき御心にならひて、汝が良人と、いかならむ艱難辛苦をも共にせよ。すべて、此のかぐはしき橘媛が御心にならひて、かぐはしき女子となれや。



論説

時弊矯正に對する婦人の覺悟

鹿山

或は吾人の眼を掠め、或は吾人の耳に觸れ、或は吾人の意志感覺を刺戟する社會の事物を撿するに、一として利害相伴はざるものなきに似たり。故に、利害の事物と相伴ふ間は、之を視、之を聽き、若くは之を考ふる人は、力の及ぶ限り其弊を矯め其利を擧ぐる

の責任を擔ふものたらざるべからず。人の爲せる惡事を神の救護に依賴するは、是れ一部宗教社會の說なりと雖も、人の爲せる惡事は人自ら之を矯正するを至當とすべし。自ら爲せる惡事、自ら感ぜる惡意、自己の力を以て之を矯正し得べからずと解するは、是れ誤解のみ。個人に於て且つ然り。更に之を社會に推すも亦理に於て異る所を見ず。社會の弊害、國家の禍亂、人類の弱點の如き、之を除き之を補ひ之を革む、豈夫れ神の力に依るべけんや。外國の保護を求むべけんや。一部の宗教家が人の爲せる惡事を以て直に神の救護に托するは何事ぞ。是れ過度の苦勞を神に捧ぐるものなり。而して人類の能力を度外に蔑視するものなり。人の爲せる惡事は人唯之を矯正すべく、國民の弊害は其の國民自ら之を匡救すべきのみ。

自己の惡事を擧げて神の匡濟に托するの愚なるは、恰も自國の內亂を戡定するに外國の軍隊を借るが如し。是れ迷信なり、誤解なり、而して斯る誤解は主として宗教上の迷信より起る。是れ素より宗教の目的に非ず、之を信奉する者の頑愚に基くものなりと雖も、暗弱なる宗教信者に至ては、神を過信するの餘却て人類自主の精神を傷ひ、無益の依賴心を長じ、活氣なく、精力なく、進取自修の精神を欠ぐもの尠からず。殊に婦人女子に於て其の甚だしきを見る。時弊矯正の點よりして吾人は大に斯の種の迷信者、無氣力者

を筆誅せざるを得ず。抑、善事は退て之を守るも可なり、然れども、惡事は進て之を擊たざれば不可なり。故に、苟も時弊の存在することを知り、時弊の匡濟せざるべからざるを知り、而かも之を匡濟するに方り、自ら進取改善するの必要なるを知らんか、須らく一世に先んじて、回救矯正の衝に當る決心あるべきなり。此の點に至ては、少年と雖も、老人を憚るの要なく、女子と雖も決して男子に讓るべからず。時弊矯正に對する女子の事業は、其方面種類に於て男子と多少の差異あらん。然れども、社會に對し、國家に對し、世界人類に對する矯弊上の任務に至て彼此敢て徑庭あるを見ず。

更に之を今當の社會に見るに、其の一隅に一種の狡者あり、動もすれば、時勢、輿論、社會の制裁、敎育の普及、法律の完備等を以て辭柄と爲し、社會の汚濁、一國の弊害は、社會の進步するに從て自然消滅する如く思ひ、若くは其の國民全般の弱點として罪を尨然たる大團體に嫁し、徒に自ら潔とし、以て獨愼自修の精神を放棄するものあり。此の間には猾にして敏なるもの、亦怯にして懶なるものあり。紛々として日本國裡に飛散するを見る、是れ實に甚だしき謬見に非ずや。本論は專ら女子の責任を論ずるに限るが故に、男子の事は暫く之を省くと雖も、社會の弊害は決して單純なるものに非ずして、其の因果の及ぶ所頗る複雜なるが故に、之を矯め之を革むるには、男女相協力し、長幼共に同

必して勵行せざるべからず。　請ふ更に女子の時弊に對する覺悟を畧述せん。
温和、靜淑、柔順等の諸徳は、是れ女子の特性にして其の天禀に成る、女子の女子たる特性を保護し發展するには、必ず此の諸徳を具へざるべからず。然れども、所謂、温和、靜淑、柔順なるものは、決して自巳の過失を掩ふの謂に非ず、自己の愚鈍を守るの謂に非ず、家庭の弊害を包むの謂に非ず、社會の腐敗を默視するの謂に非ず、國家の禍亂を忘却するの謂に非ず。故に苟も、女子の能力を以て矯正し得べき社會の弊害は、進て之を矯正するの責任を盡すべし。國民の殆ど半數を占むる帝國の女子たる者、國家の弊害に對して豈亦徒に之を傍觀すべけんや。余が茲に時弊と稱するは、專ら、女子各個、家庭、社會の三部に屬する現今の弊風惡習を指すに過ぎずと雖も、少しく眼界を擴めて之を觀れば、百鬼到處に出沒して國家社會の事亦頗る慨するに堪へたり。蓋し按ずるに、國家の弊害を制するは、專ら法律に在り、社會の弊害を矯むるは、專ら敎育に在り、而して家庭の改善進步は實に婦人の盡力に俟たずんばあらず、家庭に婦人なくんば、國家構成の一大要素は爲めに破壞せんのみ。
夫れ幼年男女の、氣質、言語、嗜好、服裝、風儀、運動、飲食の如き、賢良の婦人ありて之を陶冶するに非ずんは、夫れ何人か之を訓育せん、今や時弊の浸潤する所甚だ廣く且

つ深し、婦人にして鋭意矯弊の衝に當る覺悟なくんば、積弊の及ぶ所終に測るべからざるものあらんとす。豈慷して慨せさるを得んや。試に左に掲ぐる歐洲諸國人と本邦人との身長及び體量の比較に看よ

身長

歐洲人	男五尺五寸四分	女五尺二寸一分
日本人	男五尺二寸五分	女四尺八寸四分

體量

歐洲人	男十七貫三百目	女十五貫六百目
日本人	男十五貫目	女十三貫

是れ彼我人種の天然に異なるあり、人力を以て容易に矯正し得べからざる所多し、且つ單に身幹の長短、體量の輕重のみを以て人種の優劣を論ずるは確説に非ずとするも、而かも堂々たる日東の大男子を以て、其の身長體量歐洲の婦女子と殆ど相伍するが如きは、毫も快事に非ず。吾人を以て之を見るに、這般矮身少量の弊因は其の家庭に發するもの蓋し二三あり、乃ち運動、飲食、座臥の缺乏、不規則、屈壓等を以て其の主因と爲す。然れども、吾人の切望する女子の矯弊は、本論以外に於て緊要なるもの極めて多し。茲に

唯其の一斑を示すのみ。

女德のしをり（九）

三輪田眞佐子

第五懇篤　おのれの玆にものする懇篤とは、いと廣き意味なり。すなはち、人に對しては親切を盡し、物に接しては綿密に行ひ、將た我に就きては、輕忽とならざる心の德を言ふなり。實にこの德は、女子に最も肝要なり。如何となれば、若し女子にこの德なからんか、耳も聞えず、目も見えぬ舅姑、あるは、病みこやす家族を養ひ得ざるべし。又この德なくて、いかでか、東西をもわかぬ赤子を育て、將た、繁く忙はしき家政を整へ能はん。されど、懇篤は、女子の天職を全うする根本にこそ。

然るに、今日は、道心廢れ、人心薄くなり行くにつれて、親戚朋友すら、行路の人のごとき觀あるに、などか、一般の人々に親切を盡すものの多からん。なほ、事を執るにも、目前の私利に汲々として、姑息の行をなすもの少からず、從ひて、綿密の德なきは怪むに足らず。既に、風潮斯くなれば、我が身の品格をも輕ろんじ、粗野の弊に陷るものあるこそ勢なれ、嗚呼。

要するに、女子たるもの、懇篤の徳を修めんには、言は人心を得、行は事理に適ふべきものを、世の智育のみを受けし女子を見るに、ます〳〵懇篤の態度なきは、うたてき限りなり。故に、目下、女子教育にて、懇篤の風采を養ふをつとめざるべからず。

第六寛大　裕々として迫らざる美徳を寛大となんいふ。莊子曰く、至徳の世は、その行くこと坦々たり、その視ること坦々たり。と、そは、人々自然のまゝなるを言ひけん。元來彼の理想は、極端の空論多けれども、兎に角、大德の人は、數々然たらざるや明なり。なべて女子は、その天性優美なるべきを以て、心も亦寛大ならざるべからん。然るに、女子は、その心小量なるを以てにか、往々人を容れ事を恕せざる傾きあり。勿論、我が身を嚴格に修むるは、好みすべけれど、知人に交り、婢僕を御するなどは、寛大にせざるべからず。加賀の千代女の句に、(手打らるゝ人にかをるや梅の花)とあり。そは、仇に報ゆるに恩を以てする心なりけり。

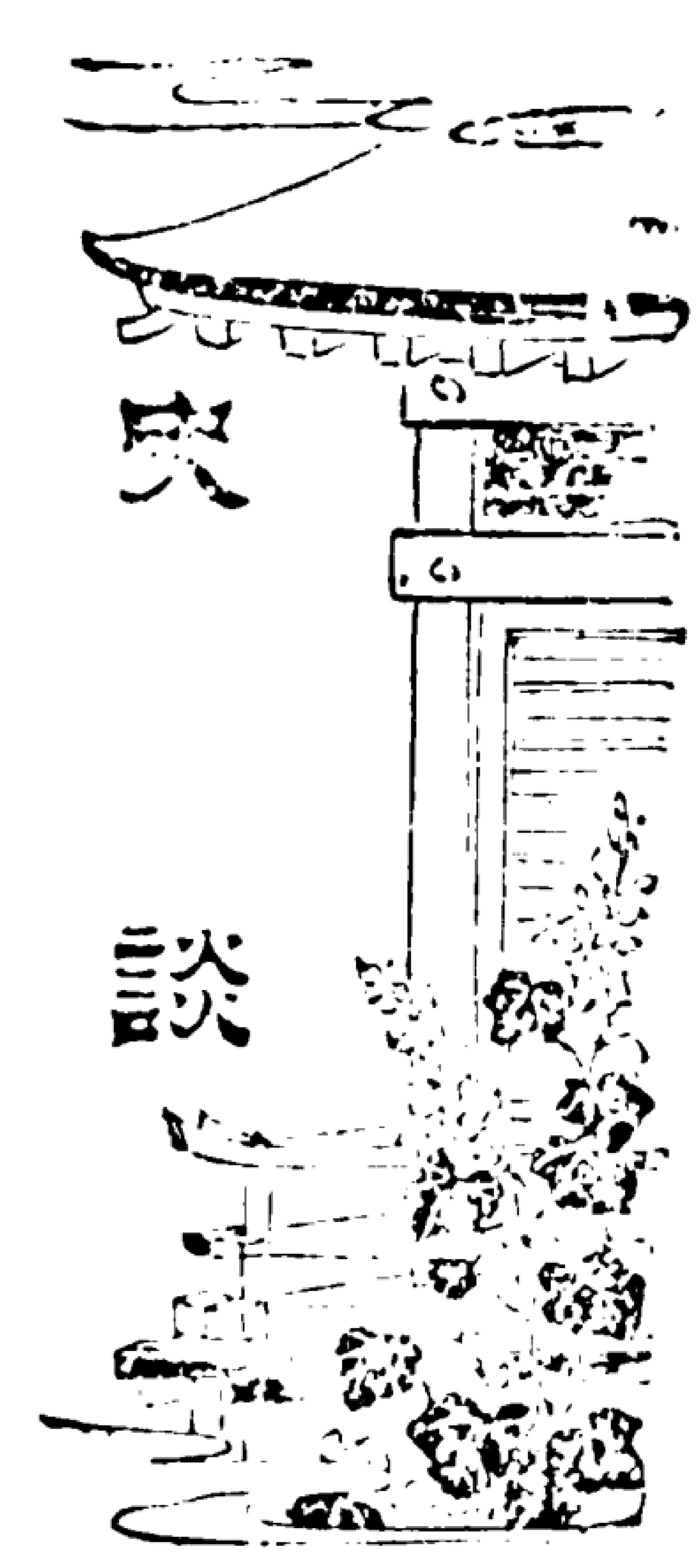
蓋、寛大とは、決して、怠慢、あるは規律なき意にあらざれど、そのけぢめをも辨へざるべからず。見よ、末事を咎めて大事を傷ひ、小怨を含みて大謀を破るものは、寛大の德なき婦人に多し。

されど、女子は輭弱なるを以て、寛大に流るゝときは、反りて侮らるべし。書經に、寛

而慄とあり。信にかゝる風采を守りて、露ばかりも、寛大のため身の禍な求めそ。こは、全く實行上の困難なれば、殊に注意すべきなり。

第七忍耐　凡そ成業の難きは、天に登らんが如く、覆墜の易きは毛を焼かんが如し。そも〱人事の覆墜する緒は、をさ〱忍耐の足らざるに基かざるはなし。果して忍耐あるものは、必ず成業の端を開くを得ん。徳川家康は、三百年に渡る泰平の根底を作りたる賢智の人なるが、その箴言を見るに、堪忍は無事長久の基、怒は敵とおもへの語あり、以てその成業せし所以の偶然にあらざるを知るべし。

わきて、女子は、一家の主婦となりて、家庭團欒の樂を作るべき責任あるを以て、自ら苦を嘗め、怒を抑へざるときは、一家に風波の絶ゑざるべし。むかし張公藝なる人、九世の間、子孫睦じく同居しければ、高宗帝その宅に行幸して、その族を睦しくする道を問ひけるに、公藝紙筆を請ひて、忍の字百餘をかきて進めけり。蓋し家族の睦しからざる原因は、衣食の均しからず、禮節の備はらざる等にあれば、主婦たるものの一人忍耐すれば、おのづから他は平和になるべきなり。



崇賢門院

塩井福子

心だに誠の道に叶ひなむ祈らずとても神や護らむ。げに神は心なれ齋戒沐浴して神に祈るとも心不浄ならむ何かはせむ。又六根清浄といふも目にもろ〳〵の不浄を見て心にもろ〳〵の不浄を見ず、耳にもろ〳〵の不浄を聞て心にもろ〳〵の不浄を聞かず、口にもろ〳〵の不浄を云ひて心にもろ〳〵の不浄を云はず、鼻にもろ〳〵の不浄をかぎて心にもろ〳〵の不浄をかがず、身にもろ〳〵の不浄をなして心にもろ〳〵の不浄をなさず、身にもろ〳〵の不浄をふれて心にもろ〳〵の不浄をふれず、六根清浄とは乃ち此の云ひにて、信神は乃ち信心、心を信ずるにあり。然るに、利を貪らんがために神を祈り、過ちを去らずして、たゞ災なきを祈る小人の心こそはけがらはしけれ。

かけまくもかしこけれど、崇賢門院と聞えまつるは後圓融天皇の御母君にましまして、二位仲子梅町殿と申す四辻贈左大臣藤原兼綱の御女なり。賢明にましましてよく御身を愼み、下を憐れみめぐませたまひて、德望いと高う、天皇をも愛敬よく導き給へり。さて天皇位につかせ給ひて後、御年老いさせられ、一年冬ごもり病の床につき給ひしより、また立ちかへる春をもしろしめさず、櫻花ひとしほさびしく、遂に無常を先き立てゝうつろふを、なほ知らせられず、いよ〳〵深くたれこめさせ、日をふるまゝに夏引の手引の糸心細く見え奉るに、朝野みな心をいため、五月雨に世はしめりはてぬ。此に於て公卿大臣相はかりて諸社に奉幣使を遣はし、天てらす大御神をはしめ、天の御中主の神、高みむすびの神、神むすびの神、あしかび彦ぢの神、

天のとこたちの神、國のとこたちの神、いざなぎの神、いざなみの神、すさのをの神、たはなもちの神、すくなひこなの神、山の神、海の神、川の神、ありとある神を、まつりにまつり、はらひにはらひ、又諸國に令して罪人を宥し、大に泰山府君の祭りをなして神風をふきなびかし、以てみいのちをいのらんものと皆まどひはかりけるに、梅町殿かくきゝ給ふよりいたくおどろかせ給ひ、かしづきのさむらひ召させ給ひて、群臣わが爲めに、神に祈り、以て我が命を救はむとする志のほど、げにうれしけれど、吾が身一人の命を救はむばかりに、人をばあまた遣ひ、物をば多く費やし、政務を妨げんには假令へ神明のめぐみありて、吾が命のびたればとて、何のよろこばしき事かあらん。世にある間、已が心にもとることなきやう加護を願はんとなり。吾れ、平素道をまもり、未だかつて不善をなし丶覺えなし、然るに、今やみて死なんは天命にて何をにはかに神明に祈らむ、さやうのことをなさんは神に對してもはづかしく、我が心いさぎよからず、此の儀は思ひとまりてよ、げにさむかり、我が事にまでひくる丶心こそはげにうれしけれとて、つく〴〵と御涙を注がせ給へるに、群臣いよ〳〵感涙にむせびけるとなり。あはれ崇賢門院の御名に違はぬ賢明英智の君、實にめでたき國母にこそ。

美津女

山本正周

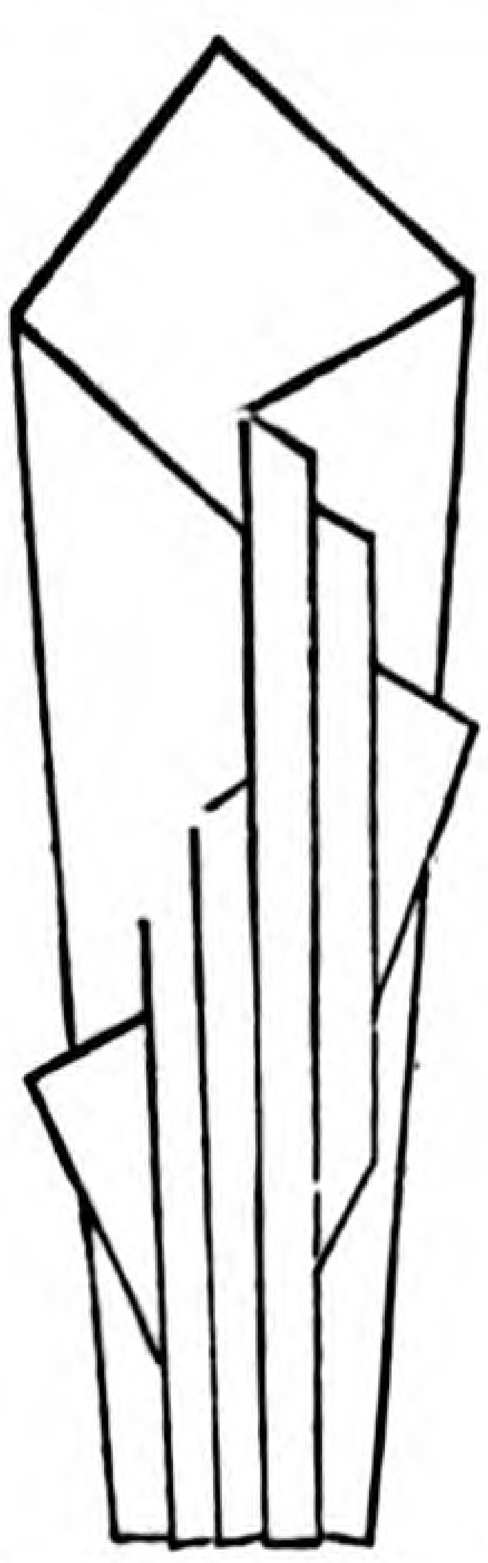
安藝の國、加茂郡、竹原村の某が女、美津といへるは、貧しき家に人となりしが、母は久しき以前より、病の床に臥し、手足不隨にて、起居にも人の扶を要すれど、美津女は、年ごろになりても、他へ嫁ぐこともなく、唯、病人の看護と、家事とに、餘念なかりき。しかるに、父母は、之を不便の事に思ひて、他へ嫁がしめんとて、幾たびか、勸むれども、聞かず。さて、母の曰へるやう、かくしば〳〵いひ勸むるに、汝がきかで、我が心も

安からず。といへど、美津女も、今は却りて、病の爲にも惡しかりなんと思ひて、遂に、其の言に從ひて、とある人の許にかしづきけり。さるほどに、いまだ、一月ならぬに、美津女、或る日、夫に向ひて、離別を請ひけれど、夫は、怪みて、其の故を問ふに、美津女は、涙ながらに、答ふるやう、母、病みてゐるに、妾、かたはらにあらでは、他に介抱する者もなけれどとて、其の始終を語りけるに、夫も、大に、其の孝心の深きに感じて、其の言の如く、實家へ歸し遣はしゝが、其の睦は、何時までも、忘れざりしといふ。かくて、美津女は、家に歸りて、父母に侍し、寒暑風雨につけて、勞はり慰め、起臥飯食に至るまで、屆かぬくまなく、二十八年、一日の如く、孝養を盡しゝかど、母の病も、遂に愈えて、齡、六十四に至りても、神氣も衰へざりしといふ。此の事、つひに、官に聞えければ、米を賜ひて、其の至孝を賞したまへり。

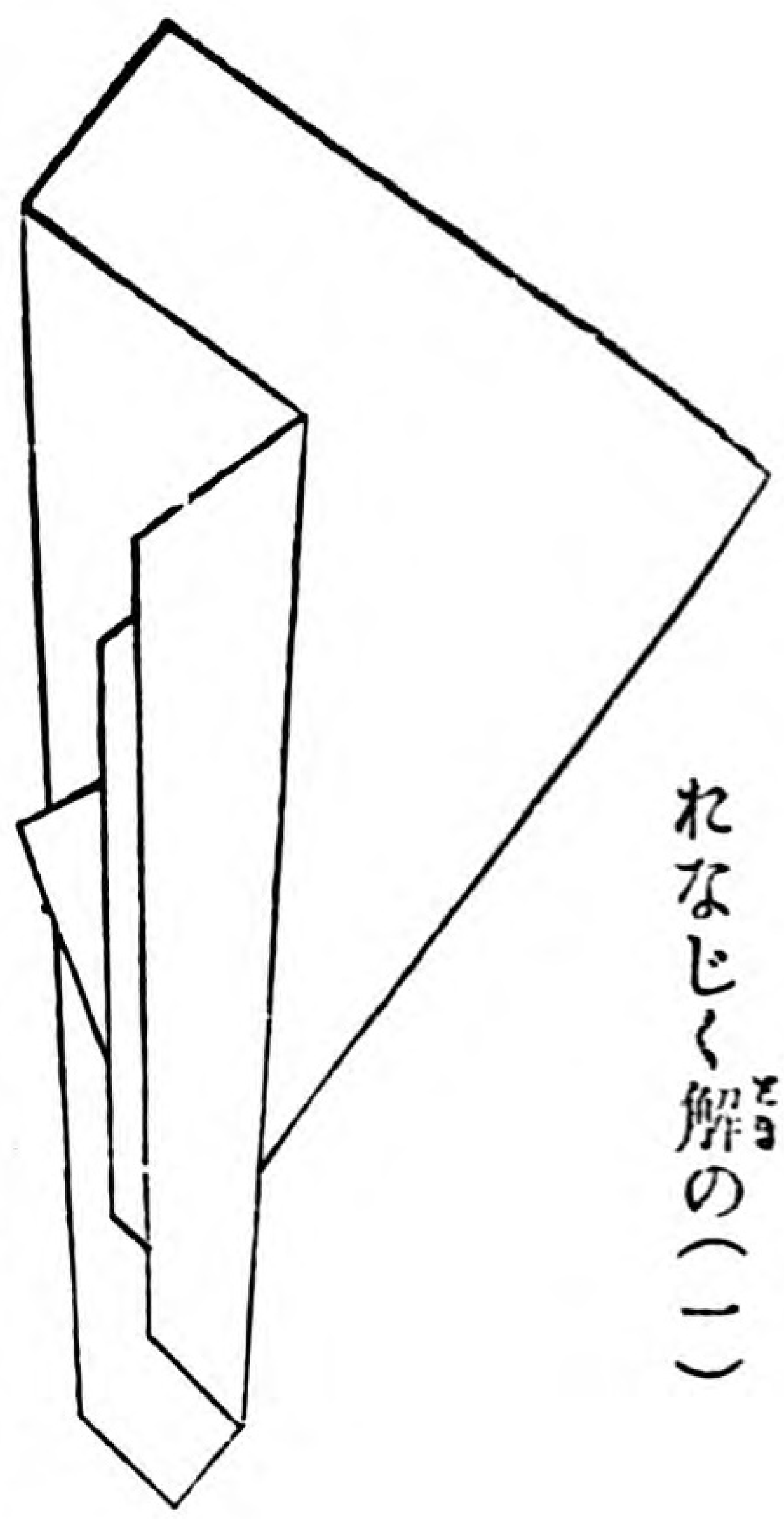


折形

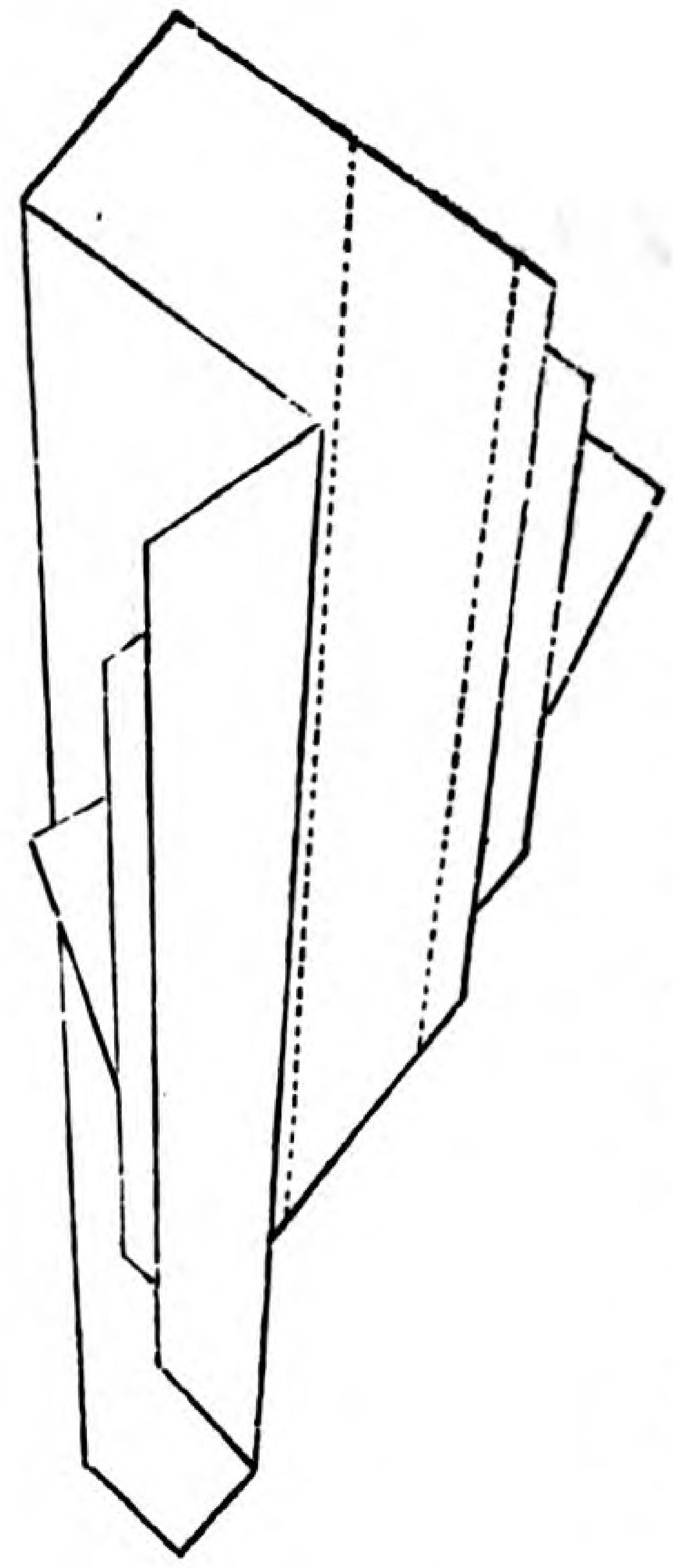
有住齋



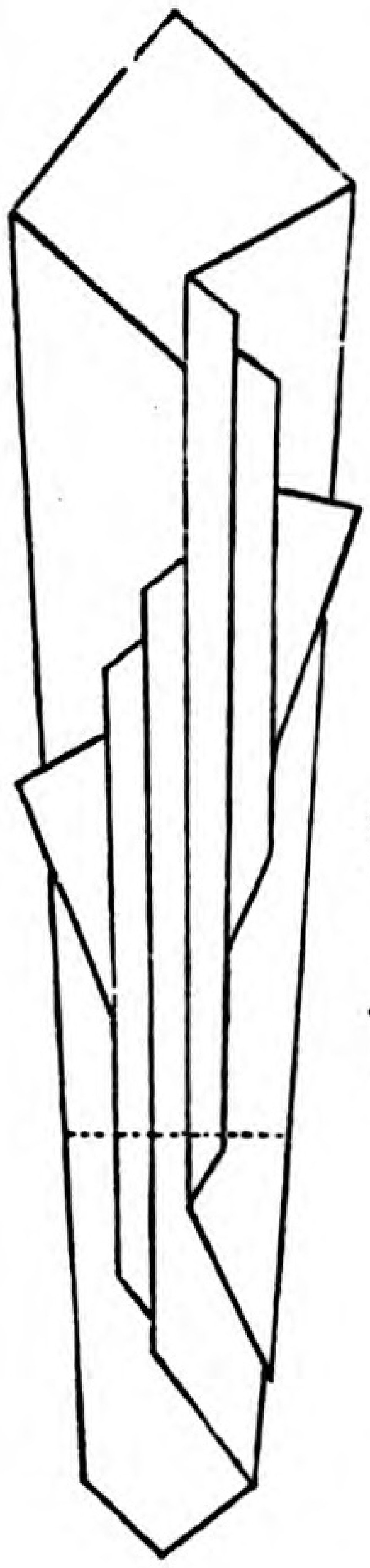
桃花包　是は、上巳(三月節句)にて用ゐしなり、下結をして上に水引をかくるなり。木の花は、すべて上へ向けて持行物なり。



おなじく解の(一)



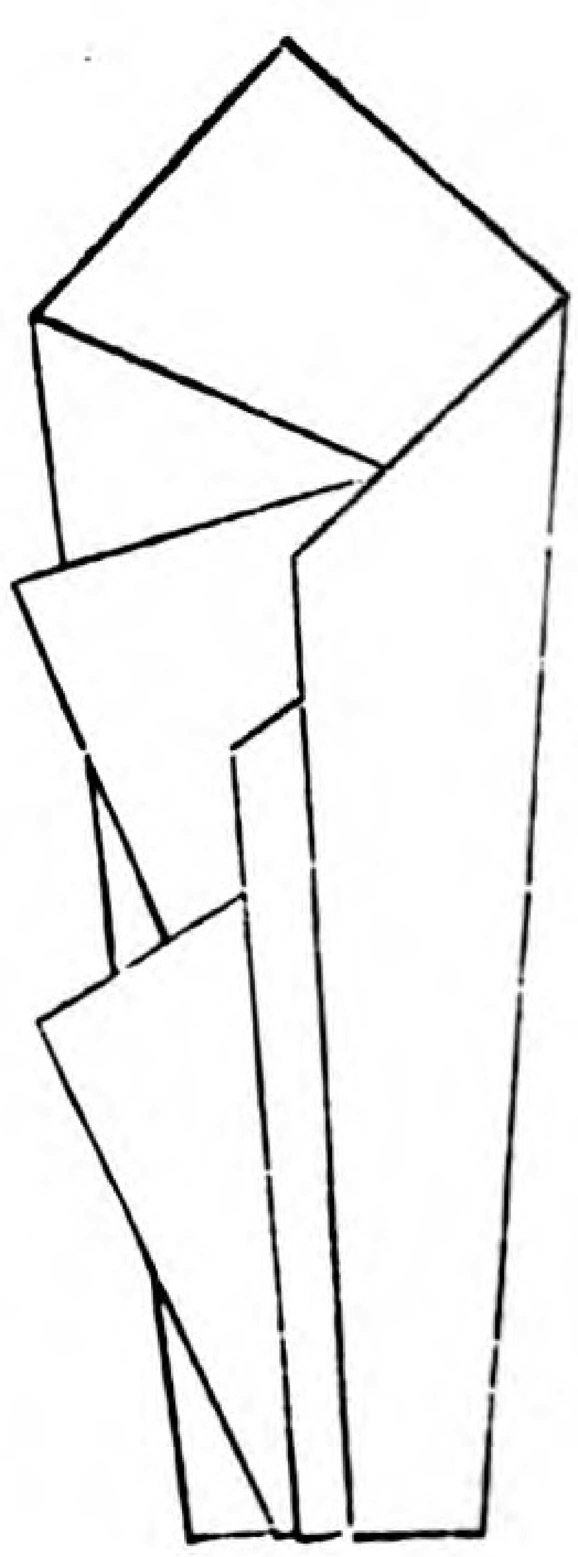
おなじく解の(二)　圖に示せる左側の點線の處を左に向て折り、後右側の點線の處を右に折りて解(三)となる。



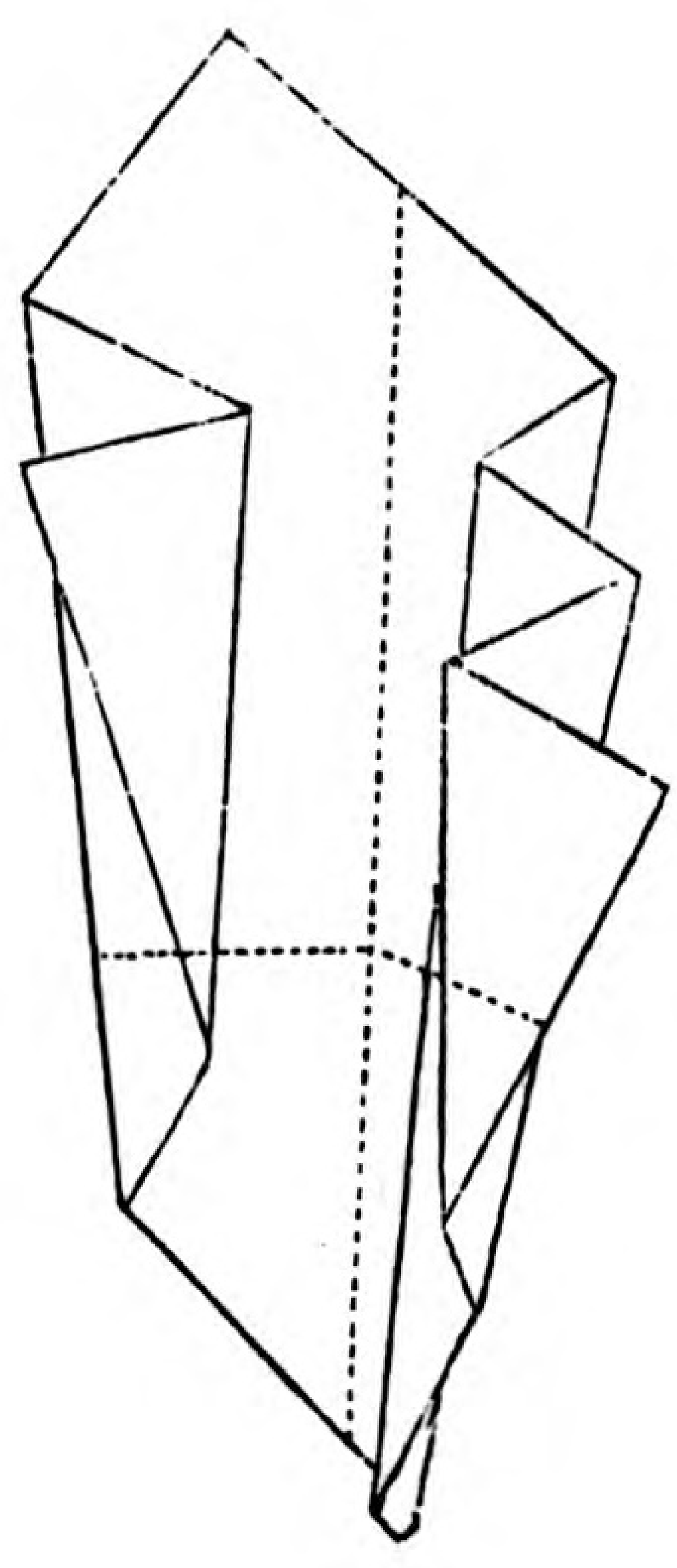
おなじく解の(三)　點線の處を裏に折り反して折り上る。

菊花包

是は重陽(九月節句)に用ゐしなり。使ひ方前に同じ。



おなじく解の圖



是は、先づ斯の如く折りて、其の縦の點線の處を左に向けて折り、后横の點線の通りを裏に折り反すなり。

茶の湯

茶禮初學

孤峯庵不羨　關　華雄

口切前用意の事

不羨曰、口切と云事は、山城國宇治郡菟路郷の茶師より、濃茶、及び薄茶を壺詰にして、外箱を附降したる茶の口を明るを云名稱にて、茶人言葉に、昔より斯云ひ做したるものなり。此壺を下すには、其年の五月茶目錄と唱へ、入用の茶を見積り、濃茶何袋、薄茶何斤、右注文賴入と書て、出入の茶師へ宛送るを例とす。此事舊幕府は、最鄭重にして、數奇屋方なるもの此御用被レ命、空壺を携へて上京し、御用茶師の家に派出して、茶の製造中彼所に詰切、製茶に不束の事なき樣點驗す。調製終て後、壺に詰て、是を御用三昧にて持下る。何故に哉其嚴肅なる威光盛にして、公衆に下座せしめ、假初にも足を地下に不レ置候伯と雖も、御茶壺に往逢ひ、下馬下乘せしもの也。(此の一事にても德川氏の威權旺盛なりしを知るべきなり)又諸侯伯と雖、出入の茶師ありて、茶道方を宇治に派出し茶壺を爲レ詰下したるものなり。無レ左は前述の目錄に應じて、茶師より驛送せしものなり。此壺を九月晦日迄濕氣無レ之場所に貯置、十月朔日に至り、取出して口を切、茶の湯を催すを慨して口切の茶の湯と云事なり。又茶壺を開くことは、茶會の席上にて、古式別傳あり。爰には畧レ之、我藩抔にも、君側に古例ありて、上林春松、竹田紹清の二茶師より下す處の壺を、此日に口を開き、白木三方に奉書の紙を敷、是に薄茶を如レ山盛上げ、頂上に濃茶初昔一袋を載、熨斗を附て君侯の一覽に供す。朝五ッ時に是を上げて、夕七ッ時に是を

徹す、茶道方此事を擔任するを例とす。此茶を、年中表向の使料に充用す。

一先づ道具組定むべし。此道具組に功者不功者知れるもの也。茶禮の眞意に至る歟至らぬ歟の堺𡉏に在るなり。

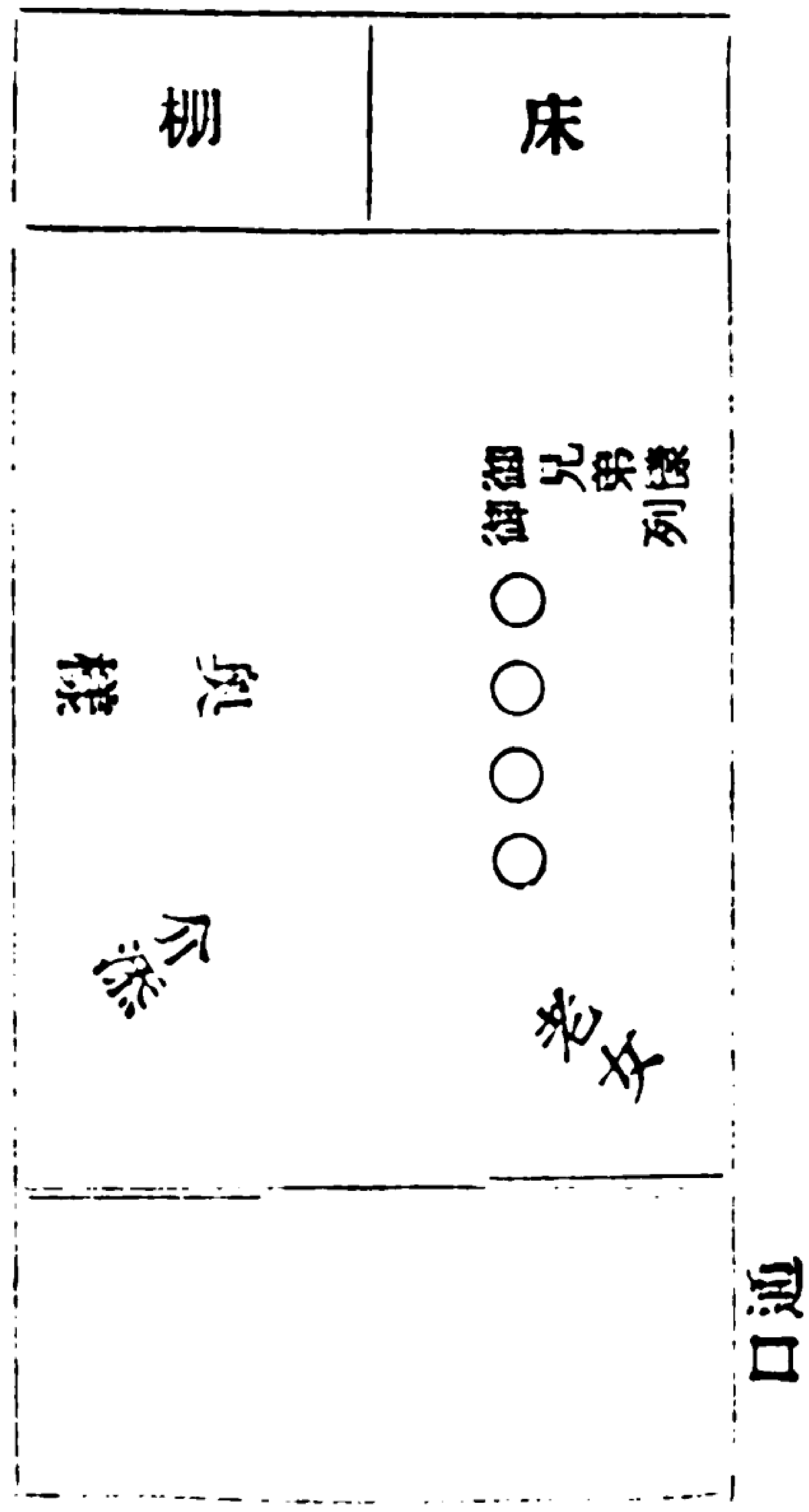
不渋曰、道具組定むべしと云は、第一掛物、釜、其陀枚擧するに雖レ不レ有レ遑、大概を言へば、香合、炭斗、灰炮烙、茶入、茶碗、茶匙、水指、建水、花入、及び花、懐石の家具一際、料理献立に至る迄、口切の茶會に可レ用。現品を取出し、各並列して、長短大小色合迄、再三再四熟察し、牒簿に記して道具組定をなすべし。是則ち道具組懐石付と云ふものなり。此組合にて、本文の如く、其人の技量能く察知せらるゝもの也。宗匠に付て可レ問。偖掛物は、古墨蹟を上等とす。墨蹟亞レ之、次は大徳寺住職、歴代徳義ある人の書、其他高位貴人の書給ふ物も支悟なかるべし。繪掛物は不レ許。横物、一行物、禪語、或は經文の類を用レ可。表裝も樣々あれども、文人仕立、明朝べり、長軸、包軸は不レ用。釜は、口切頃は大振を好む、形狀は普通は阿彌陀堂、丸釜、湍團、富士、霰釜、裏合、責紐等の內を可レ用。作柄は𡉏に言盡す不レ能。炭斗は、口切には新瓢瓶を多く用ゆ。香合は染付交趾(ナ)、呉洲、靑磁、祥瑞、樂燒等靜なるものを可レ用。灰炮烙は、新物、柳川、今戶燒をよしとす。羽箒は鶴、野鴈、樣々可レ有。灰匙は、少庵好よし。釜敷は、紙を可レ用。鐶は、古作ものよしと雖、是も適宜の品を可レ用也。花入は、竹の一重流義、古人の作を好。又は古銅、靑磁、信樂、伊賀、備前、等も有レ可。掛ても、置ても、花は其の時の物を好む。左れ共、取合次第なり。茶入は、肩衝、丸壺、芋の子、芋頭、尻膨、何れにても取合肝要なり。

(以下次號)

婚禮之樣（第四）

有住常子門人　みを子

御兄弟樣方御對顔の席



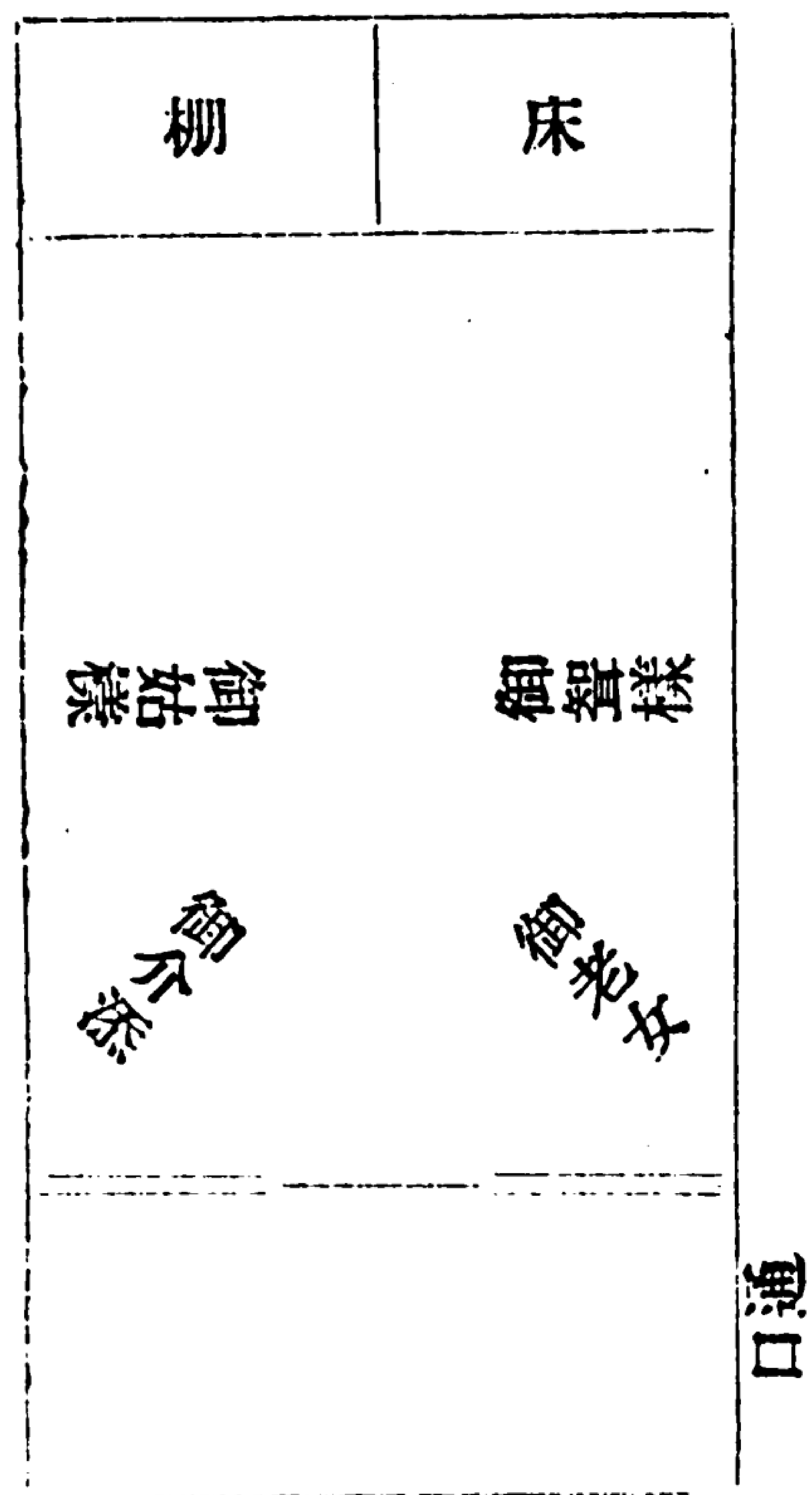
同御式

一御舅樣　御着座
一御兄弟樣方　御着座
一御長熨斗鰒　差上之
一御一同樣　御禮之事
一御長熨斗鰒　引之

一御雜煮、御吸物、御盃事、（畧之）
一御老女御介添、起座、下座に附て恭悦申上げ相互に千秋萬歳な祝て御披き申上候事
　御姑樣御入
一御姑樣　御祝の間　御着座
一御聟樣　御着座
一御長熨斗鰒　差上之
一御双方樣　御會釋之事
一御長熨斗鰒　引之
一御雜煮、御吸物等　畧之
一御濇土器　差上之
一御押盃　差上之
　御本酌　御加へ進み
一御姑樣へ御二献　差上　其土器持參
一御聟樣へ御一献　差上　御加への事
　御姑樣より御肴御老女御名代被進
一御二献　差上　其土器持參

一御姑様へ御一献　差上　御加への事
御聟様より御肴（御介添 御名代）被進
御二献　差上　御納相成候事
一御滴　引之
一御押臺　引之

同御席

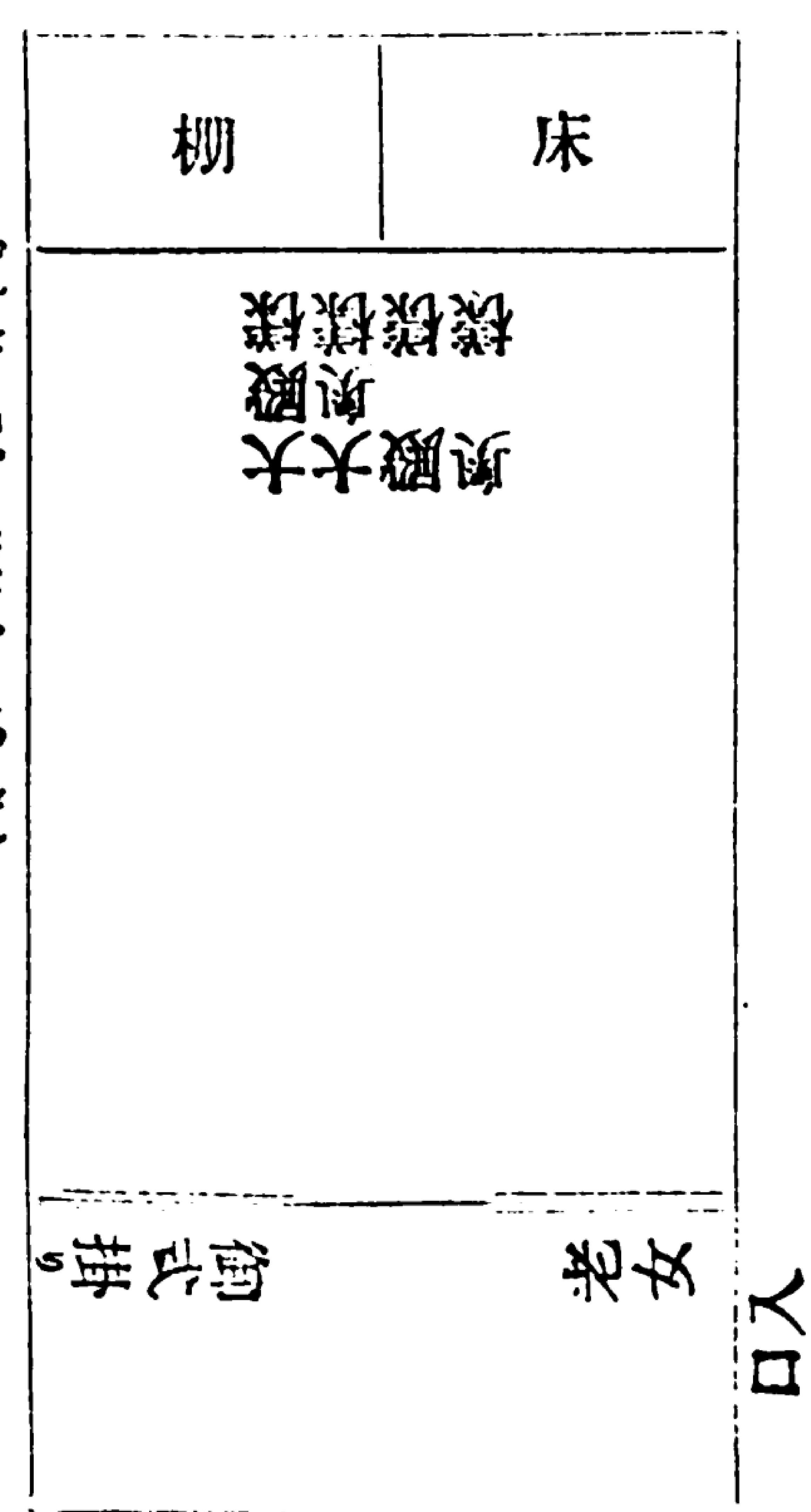


御家來衆御祝賀（ごけらいしうおんしゆくが）

一大殿様
一大奥様
一殿様　正面御着座

一奥様
重役 内事掛 執事 外一同 着座
一御長熨斗鮑　差上之　上座に置之
一同御祝詞申上直ちに披き候事
一御奥様御里方の御家扶従御侍女　着座
御祝詞（ごしうじ）申上（まをしあげ）直ちに披き（ひら）候事（さふらふこと）
一御老女（ごらうぢよ）より御披き（おんひら）申上候事（まをしあげさふらふこと）

同御席



御惣客様御酒宴（おんそうきやくさまごしゆえん）

一御惣客様　御着座

一長熨斗鮑　差上之
一御一同様御會釋有之候事
一御長熨斗鮑　引之
一御雑煮　差上之
一御盃　差上之　八寸足打ニ入御銘々ヘ差上
一御雑煮　引之

引替

御本膳　差上之
御二の膳　差上之
御三の膳　差上之
御向詰　差上之
御臺引　差上之
御飯鉢　差上之
御通
御湯　差上之

○

御吸物　差上之
御銚子　差上之
御盃　差上之
御取肴　差上之
御鉢肴　差上之
御指身　差上之
御吸物　差上之
御煮肴　差上之
御鰻焼　差上之
御茶碗　差上之
御酢の物　差上之
御浸物　差上之
御小吸物　差上之
御水物　差上之

○注意

（御本膳以下御水物に至る配膳の順序のくはしきよしは別に正しく物すべけれど、今は其の日の割烹方の扣へよりおほむねをとりてあげつるなり。其の心しておほろげなるは、式書に載せたる物ならぬ事を知りたまひて、見ゆるしたまひてよかし）

御酒宴御獻立

○御長熨斗鮑　敷紙三方

○小角　小田巻　梅干　作鰒

○御雑煮　串海鼠　のし餅　結昆布　鏡大根　里芋　花かつな　小奉書紅白水引箸包

○御本

酢

汁　越後味噌　花つみ菜

御生盛　鮒子付　紅かぶら骨　白髪大根　海素麺　花栗　わさび

香物　新大根　奈良漬瓜　花鹽

飯

○御二

御坪　鴨あん平　銀杏　葛仕立

汁　すまし　よせ赤貝　わらび

御千代口　鳥帽子貝　胡瓜　新生姜　梅肉あへ

○御三

御平　鰮大根　男　粒椎茸　木の芽

汁　笹葉摺身　松菜

御差味　調新みそ醤油　めじ　わさび

○御向詰　鯛鹽燒

○御臺引　雲丹　結松風　水引昆布

○御飯器より御茶までの順序是にはぶく

○御吸物　鯛ひれ

○御銚子

○御三組盃　白木臺松竹梅糸花

○御取肴　海鼠月煮　二段鰕　鶉　日月玉子　[illegible]子河茸　豊後梅　嬉し野

○御鉢肴　かやく　鯛　鎌れむし　青豆　かけつゆ

○御差味　ひらめ　海松貝　せんうご　青たで　わさび醤油

○御吸物　すまし　鶉つな　まの子　祝の子

○御煮肴　鯛の子　婦喜　花山椒

○御鹽燒　白くし　のし梅

○御茶碗　合せきす　茄子　柚子

○御酢の物　甘酢　貝の柱　長老芯　鹿子いか　木耳　防風

○御浸物　鶯菜　夏きく

○御小吸御　十六島海苔　はり生姜

○物水物　雲州蜜柑　林檎　粒狀

以上

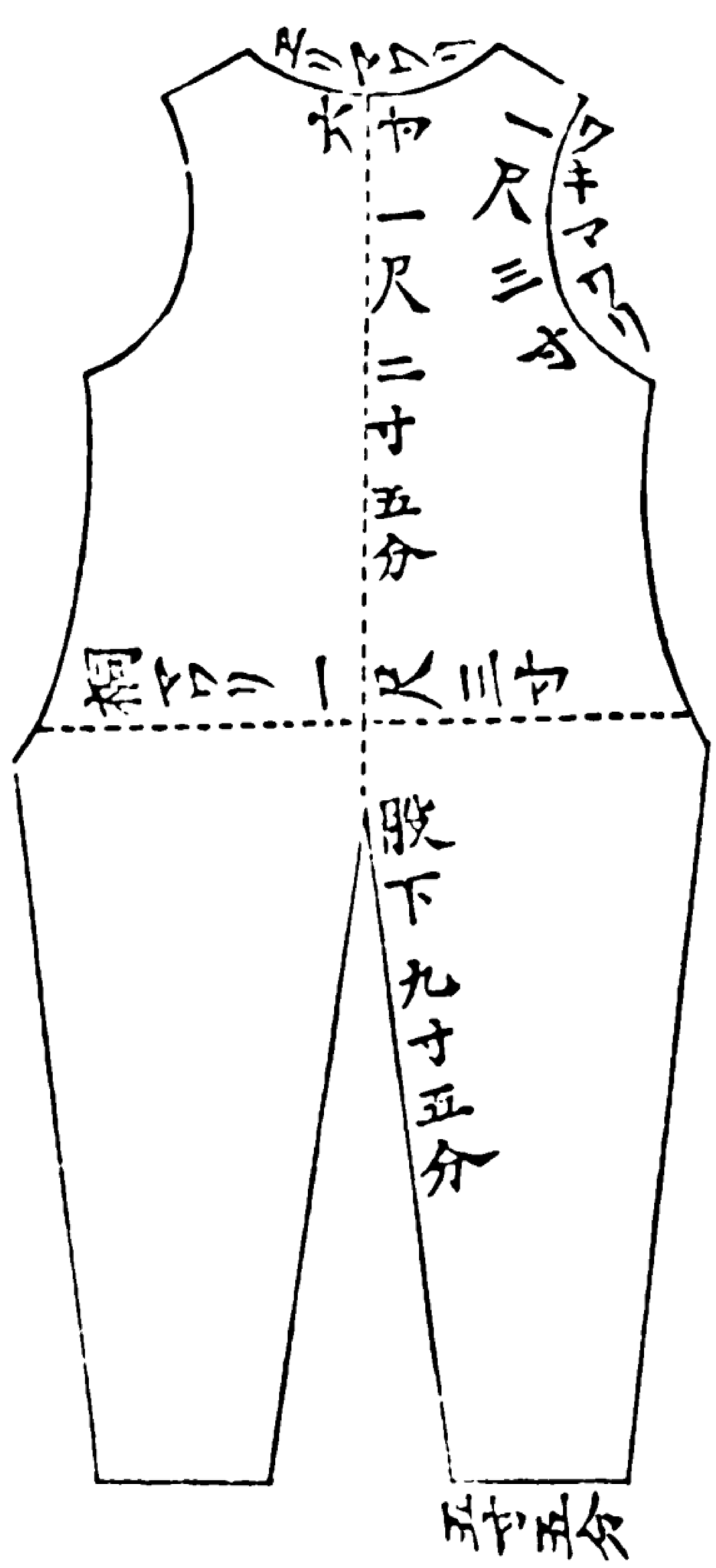
たちぬひ

養生腹掛の裁ち方

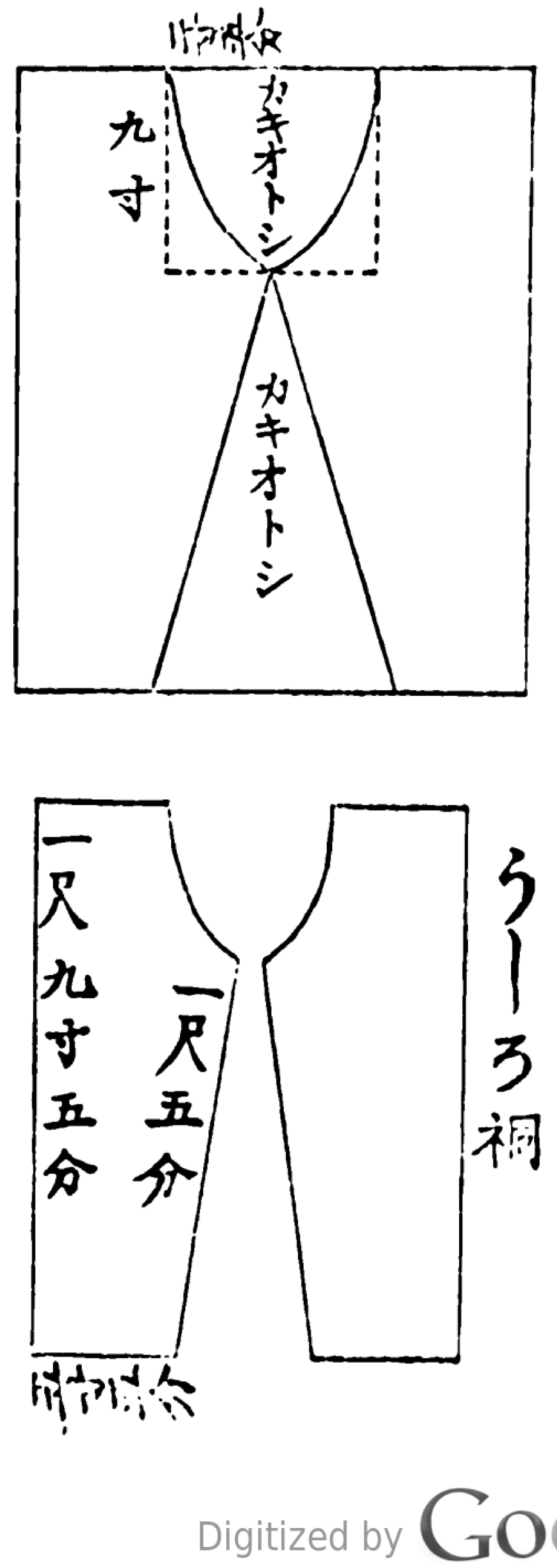
西山たい子

追ひ〳〵時候あしく、養生こそ肝要なれど、今度は養生腹掛をものさんと思ひぬ。此の腹掛は養生のものなれど、フランネルが尤もよろしく、晝夜とも、夏冬とも用ゐて大によろしく、殊に夏は尤もよろしく、夜などこれを用ゆれどねびへをする事なし。

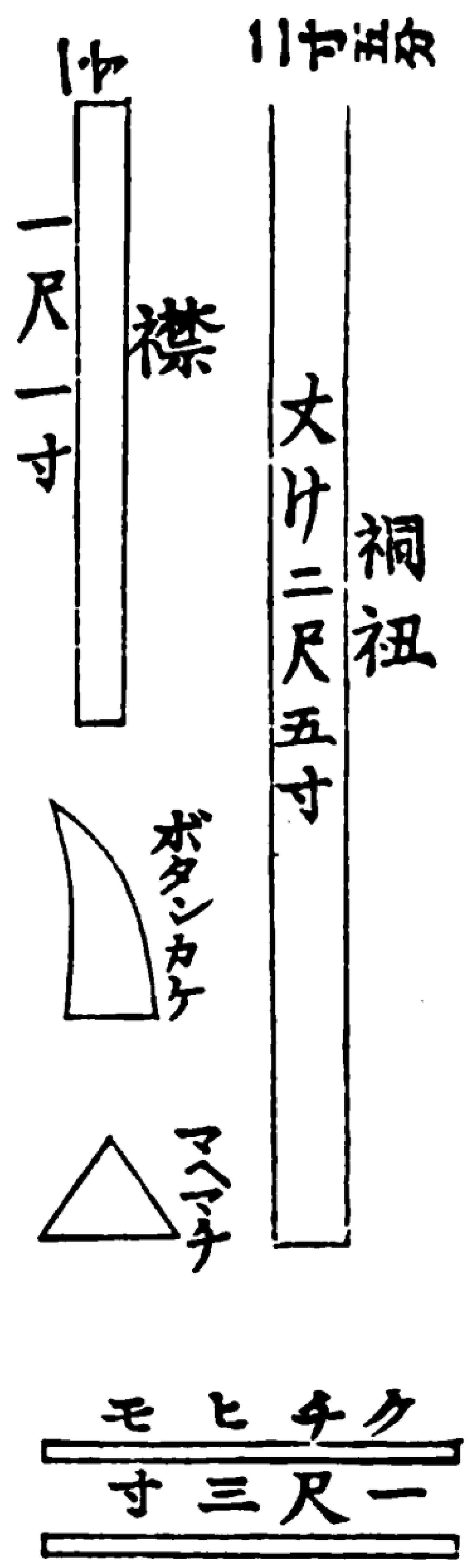
前裥



うしろ裥



即ち一片下の如くするなり



図の如く、前裥、うしろ裥、襟、マチ、ヒモ等を裁つなり。之は大人物にて、小供物は其の子供の大小によりて裁なり

だいどころ

一 みる貝

此貝は十一月より翌年の九月迄を期節とす。酢の物、椀種、刺身、前盛等に用ふ。

一 たひら貝

春より夏を期節とす。調理方、てり焼、酢の物、椀種等なり。

一 ばかはしら

はしらは八月頃より翌年の三月頃迄を期節とす。用ひ方、甘酢、椀種、てん種、さしみ、前盛等なり。

一 梅干の製法

梅干を製するには、入梅になりて梅を採り、之れを一夜水につけ置、翌日ざるにあげ、梅壹斗に鹽五升の割合にて樽に梅を入れ、鹽をふりて又梅を投れ、おしをのせ、水のあがりたる時おしをゆるめ、土用に入る迄其儘漬おき、土用になりて樽より出し、笊にあげ、水氣を去りてすの子の上にならべ、三日間程干たる後、(晝夜共)又樽の中に投れ、寒に入り三日程干したる後、壺の中に投れ、目張をなし置時は、數十年を經るも決して變る事なし。又樽に詰め置ても宜し。

一 奈良漬製法

夏土用中、上等の白瓜を採り、二つに割り、中實を去り、熱湯を通し、日光に乾し、味淋粕十貫目に、鹽四

升の割合にて、粕と鹽とを能く交せ合せ、之は四斗樽一本の割合、瓜凡六十本樽の底へ粕を置、瓜をならべ、又粕をのせ、かくしてだん〳〵と積込み、ふたをなし、目張をして、四五ヶ月經たる後用ふべし。又茄子、生姜、冬瓜の花おち抔積たるも美味なり。



秀歌集（廿五）

鹽井正男

○

ちぎりおくことこそ更になかりしが
　かねて思ひし別れならねど

○この歌は、新古今集の九の卷なる離別歌の部にありて、讀人は知れず。或人が俄に都を離れて遠くまかりける時に、女につかはしたる歌なり。○ちぎりおく。互ひにいひかはし約束しおくことなり。別れにのぞみて、行末のことなど約束しおくなり。○更になかりしが。少しもなかつたといふ如き意なり。○かねて。前かどよりといふ意にて、卽ち前かどより思うたる別れにあらず、俄の別れなりといふことをいへるなり。○別れならねど。かねて思ひたる別れにあらざる故にといふ意なり。

○一首の意は、かく別れんとは、前かどより思ひ居りたることにあらず、俄の別れなる故に、別れにのぞみても、いひかはし約束しおくことが、少しも無かつたといふことにて前かどより思ひ居りたる別れならむには、此の事は堅く約束しおかむ、あの事もしかと契りおかんと、いろ〳〵考へおきて契ることもあるべけれど、かねて思ひたる別れにあらず、俄に思ひの外なる別れなれど、何を契りておくべきやら、心はあわたゞしく亂れて、何も契りおくことが

なかつたといふことをいへるにて、俄の別れにはかゝるためしは、誠に多かることにて、よく人事の眞をうたひ得て、あはれにればゆ。歌は思想をのぶるものなれど、思想をねらざるべからず、然れども、その想ひは、よく自然に出でざるべからず。この歌など、誠によし。

○

玉ぼこの道の山風寒からば
　かたみがてらに着なむとぞ思ふ

○これも、全集全部の歌にて、紀貫之が陸奥に下り侍りける人に装束くるとてよみたるものなり。○たまぼこ。玉を以て飾りたる美しき鉾といふことにて、道といふ詞の枕につかひたるなり。それは鉾には及わるものなれど、道(みち)のみといふ音に引きかけて、道の枕詞につかひ來たれるなりといふ。○かたみがてらに。かたみとは形見にて、其の人の形として見るといふ意なり。かてらは、すべて、彼れこれとかねられたる意をあらはすことにて、即ち、こゝにては、形見をかねて寒さをふせぐにも、着られたしと思ふといふなり。○着なん。なむは去かありたしと願ひ望む志をあらはす助詞にて、即ち、こゝにては、着てありたしと人の上にればゆる我が心の中をあらはせるなり。

○一首の意は、此の衣服を餞別にあげます。若し旅路にて山風の寒からむには、何とぞ形見をかねて、寒さを去のぐに着られたしと思ひますといふことにて、情こもりて誠にあはれなり。

○

岩がねの床にあらしをかたしきて
　ひとりやねなむさ夜の中山

○これは、新古今集の十の卷なる羈旅歌の部にあり。有家朝臣の歌にて、旅宿嵐といふ題にてよみたまへるなり。○いはがねの床。岩を夜床とせる心なり。○床にあらしをかたしく。かたしくとは、もと衣の袖

をかたしくといふ意にて、伴れもなくて獨りねするをいふ。さて、こゝにては、伴れなくてねる夜床に、防ぐ方なき嵐のいたく吹きしきるのみなれど、かく嵐をかたくしといひて限りなき、さびしきさまをいへるなり。○ひとりやねなむ。獨りねむかゝアーといふことにて、身にしみ〲に思ひ入りたる心なり。○一首の意は、今宵は、岩ねの床に伴れもなく、枕に吹きしきる嵐が中に、唯一人にて、ねる事か、ゝアー、此のさ夜の山中にてといふ意にて、此の歌は誠にわびしき山中の旅ねをよみたるなり。岩がねの床といひ、嵐をかたしくといひ、獨りねむといひさ夜の中山といひ、皆、實にさびしくわびしき限りを取り出でゝ、さびしくわびしきいはむかたなくおぼゆ。歌はすべて、一首の上に用ふる詞や事物は、つとめて其の歌はむとする詩想にかなひたるを擇まざるべからず。例へばさびしきけしきを歌はむとせば、つとめて、それにかなひて、淋しき事物と淋しげなる詞とを用ひざるべからず。これ、實に歌よむ人の注意すべき所なり。此の歌は淋しくわびしき旅ねの情景をうたはむとするなり、淋しくわびしき事物や詞のかぎりを用ひたり。誠に歌よむ手を得たりといふべし。

○

忘れじとちぎりて出でし面影は
　見ゆらむものをふる里の月

○これも全集全部にあり。攝政太政大臣やがて藤原良經公の歌にては題の月前の旅の心なり。○忘れじと。故郷にて別れたる時に、今別れても、決して忘れはせじとちぎりたるなり。○ちぎる。互ひにいひかはし約束することなり。○面影。我が面影なり。○見ゆらむものを。此の句の末に、さるに音づれもせぬは何故ぞ。音づれぬは、若しや忘れたるにはあらざるやといふ如き意をあましたる詞づかひなり。○ふるさとの月。故郷の月には見ゆらむものをとつ

いくべき意なり。

○一首の意は、我が故郷を出づる時、別れても決して忘れはせじと互ひに契りたれど、月には昔のうかぶものなり、我が面影は、故郷人も、月にむかひては見ゆるであらう。即ち、月にむかひては我が事は思ひ出でらるゝ筈なるに、かやうに音づれもせぬはいかなる故ならむ、かゝるやうすにては、忘れたるにはあらずやといへる心なり。四句と五句とのいひざま面白し。

○
立ちかへり亦もきて見む松島や
　　をじまのとまや波にあらすな

○これも、全集全部にありて、俊成卿の歌なり。

○立ちかへり。再び來る意なり。○をじまのとまや。島べの苫屋なり。苫屋とは、苫にてふきたる小家をいふ。

○一首の意は、この松島のけしきは誠に美しく面白ければ、また再び來りて見物せんとも思ふ。されど、今宵かりねしたる此の島べの苫屋を、浪にあらしてこはしてくれるなといふ意にて、けしきをめでたるよりの歌なり。

源氏物語講義（六）

下田義天類

さきの世にも御契や深かりけむ、世になく淸らなるたまのをのこ御子さへむまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎまゐらせて御覽ずるに、めづらかなるちごの御かたちなり。

○さきの世にも御契や深かりけむ。とは、帝と更衣との御中らひは、唯今世のみの御緣にはれはさで、前世よりも、御宿緣の淺からざりし事なりけむといへるなり。即ち次の句の、世になく淸らなる玉の男の子御子さへ生れ給ひぬ。といふことを云はむとていひいでたる詞也。

○世になく清なる。は、此の世に比類なく美しきなり。

○玉の男の子御子さへ生れ給ひぬ。は、玉のごとき男の子御子までが生れ給へりとなり。ここのさへといふ助辭につきて、舊註に、此のさへといへるは、男御子なる故に、殊にめでたき意にていへるなり。とあるは、少しことわり過ぎたる說なるべし。こゝは、前段にも云ひしごとく、あまたの人々のそねみを受け、たよりにする人はなく、心細げに年月を送り給ひしが、さりながら、帝王との御中は、淺からざる前世よりの御因緣や有りけむ、さまでの分際にもおはさぬ更衣にて、帝王の御寵愛を蒙ること一方ならず、其の上にまた、かゝる男の子御子さへ生れいで給へり。とやうに見む方穩當なるべし。

○いつしかと心もとながらせ給ひて。とは、帝は桐壺の更衣の臨月と聞食し給ひてより、いつしか生れむと待遠に思食させ給ひて、となり。心もとながらず、は、待遠なることに思食すよしなり。いつしか、とある所へ、生れむといふことを補ひて見るべし。これは、例の省筆法なり。また、心もとながらせ給ひて、とある次へも、おはしけれども、といふことを差加へて見るべし。即ち、いつしか生れむと心許ながらせ給ひておはしけれども、といふ意に見るべし。

○いそぎ參らせて御覽ずるに。とは、御分娩ありと聞食して、急ぎ其の御子を參內せさせ給ひて御覽ずるに、なり。

○めづらかなるちごの御かたちなり。は、其のうつくしさがいふばかりなくめづらかなる御容貌にてありたり、となり。これ、即、この物語の主人公たる、光源氏の君なり。この御子の出所をいはむとて、前段に云へる更衣のことを書き添へたるなり。此の次に、更衣のことを云ふものから、皆この御子の可憐の境遇に沈めるよしを云ひ添へて、讀者に同情を表せしめむとの結構なり。

さて、舊註どもに、さきの世といへる所は、

君とわれいかなる事をちぎりけむむかしの世こそしらまほしけれ」といふ古歌をひきてかきたるやうにいへるはわろし。

また、玉のをのこみこといふ所をときて、詞のつゞき玉のをと、命のかたへを取りなしたるものなりといへるもわろし。

一のみこは、右大臣の女御の御はらにて、よせ重く疑ひなき儲君と、世にもてかしづき聞ゆれど、此の御にほひには、ならび給ふべくもあらざりければ、大概のやむごとなき御おもひにて、この君をばわたくしものにおぼし、かしづき給ふことかぎりなし。

○一の御子は右大臣の女御の御腹にて。この一の御子の御事は、今まで此の物語には見えざりしが、こゝに至りて、早くより此の帝には、第一の王子のおはしましけるよしを知らせたるなり。これ光君の御爲には、御兄君に渡らせ給ふ御方にて、後に帝の御禪を受けさせ給ひて、天の下知し食し給ふ御方なり。この御方を、この物語にては、朱雀院と申せり。心得置くべし。

右大臣の女御とは、時の右大臣の御娘にて、今女御を勸めらるゝ御方なり。此の右大臣は、性急なる所ありて、德行少く、且皇室を凌躐して、私權をたくましくしたる姿ありて、始終よからぬ御方なり。其の御娘の女御といふも、父君の氣性を受け、且其の權威を後楯として、動もすればよからぬ方へ趣き給ふ御方なり。これを、弘徽殿の女御と申せり。いはゞ御父子ともに、此の物語の惡役者なり。さて、一の御子は、其の惡役者たる右大臣の御娘の、弘徽殿の女御の御腹に出來たる皇子にて、光君に比ぶれば、御母方のいきほひ、即外戚の威權、遙にすぐれたる所の皇子なり。

○よせ重く疑ひなきまうけの君と世にもてかしづき聞ゆれど。よせ重きは、朝野の人の思ひ寄せが淺からぬなり。御長男なるのみの故に思ひ寄の重きにはあ

らず。外戚の威權盛なるが故に、朝野の人の重望を荷はせ給へるなり。右大臣の女御の御腹と云へる所に眼を付くべし。されど、此の君ぞ疑なき儲君、即、皇太子に立せ給ふべき御方ならむと、世上に尊敬を受けさせ給へど、となり。もてかしづく、は、あがめとりもつよしなり。聞ゆれど、は、尊敬辭にて、俗に、申し上ぐれど、と云ふ程の義なり。

○此の御にほひには、ならび給ふべくもあらざりけれど。この度御誕生の御子の御にほひにて、即源氏の君の御容儀にはくらべも附かざりけれど、なり。

○おはかたのやむごとなき御思ひにて。彼の一の御子の方は大概一と通りの御大切の仕振にて、なり。やむごとなきは、御大切にし給ふよしなり。御思ひは、帝の御寵愛なり。彼の一の御子の御方をば、御大切にし給はぬにはあらねど、それは、大方尋常一様の御寵愛にてなり。

○此の君をば私ものにおぼゝし、かしづき給ふ事かぎりなし。この君は、源氏の君なり。私もの、とは、帝の御内證もの丶やうに、なり。おぼゝし、は、おもほしの通韻なり。此の下へ、給ひてといふことを補ひし見るべし。かしづき給ふことかぎりなし、は、御大切に御養育せさせ給ふことが限なかりし由なり

さて、此の一句を取り總べて申せば、一の御子は、今の右大臣殿の御娘と聞ゆる弘徽殿の女御の御腹にておはしませど、朝野一般の人の重望を負はせ給へる御方にて、やがて、皇太子冊立の御事もあらば、此の君ぞ疑なき儲君ならむと、世間にもてあがめ申上ぐれど、今度御降誕の此の御子の御容儀に比べ奉りては、くらべも付かぬ御容儀なれば、彼の一の御子の方は、唯尋常一と通りの御寵愛のしざまにて、此の光る君の御方をば、帝の御內證もの丶如くに親實に御かはゆく思食させ給ひて、御大切に御養育せさせ給ふ事が限りなかりきとなり。

一の御子をば、外戚の威權の強きが故に、世間の重

望を荷はせ賜へるによりて、御大切に思食し賜ふよしにいひ、源氏の君をば、生來の御容儀玉のごとくなるが故に、帝の私ものゝやうに思食して御大切に遊ばし賜ふよしにいひて、同じ御大切に思食し給ふ根底にことなる所あるよしを書き分けたる所に、能々心を注ぎて味ひ置くべし。かゝる所にも、藤氏の専横に御心を置かせ賜へるやうを見るに足るものあるべければなり。評釋に、こゝを評して、

主客の法を設けて、初めて朱雀院の御事を書き出せり。これやがて、源氏君の方と、弘徽殿の方と、反對して、御中のよからぬ事を語る最初の筆なり。さて、一の御子の御勢ひのいみじき事を揚げ言ひて、却りてそれにもまさる若宮の御寵愛のいみじき事を云へる抑揚いとめでたし。

と云へるは、能き着眼なり。



漫録

神宮御炎上小史（一）

安藤正次

神風の伊勢國、析鈴の五十鈴の川上に鎮ります神宮は、大御神の傍國の可怜國、重浪のよする國と言よさし給ひて宮居定め給へる所、そのかみより今に至るまで、茂みたてる神路山の常磐木は、終古その緑をあらためず、流れたえせぬ五十鈴川は、いつもその清冽を失はず、たとひ木々の緑は、時に少しく色褪することありとも、やがては元の色にたちかへる事早く、底清き川水は、折にふれてしばらくはかき濁ることなきにはあらねど、やがて再澄みまさり來ぬ。げにや、世には汚隆あり、時には衰替あれども、いかなる世、いかなる時といは

ず、かしこき大御稜威は、世の治亂興廢を超えて、高く國民の精神をてらし給ひ、千古炳乎たり。國民は是を仰ぎ奉り、之にしたがひ奉り、以て生き、以て食ひ、以て國民たり。誰かその御恩頼により奉らざるものぞ。

さるを何事ぞ、明治三十一年六月廿三日早曉、伊勢よりの飛電は四方に傳はりて、四千萬人の心を驚愕と恐懼とのうちにうぞひたり。まことや火あり、神宮司廳、及參集所を燒き、延きて恐多くも御正殿御屋根に及びたりしかど、御神體は風日祈宮に御遷座ましましたりとの事なりき。誰れその不慮の事なるにおどろかざるものあらむ。誰か神慮をかしこみて恐懼せざるものあらむ、かしこくも、九重雲ふかきわたりにては、直に勅使を差遣し給ひて、御つゝしみを加へさせ給ひ、萬民また聖意を奉体し奉りて、ふかく恐懼のうちにありき。やがて原因は小使の過失よりいでたりとの事、明になりぬ。何者の痴漢ぞ、かゝる恐多きあやまちをしいでつる。

幸にして御正殿は、御屋根の一端にかゝらせ給へるのみなりしも、一度かゝる穢にふれたるもなれど、更にあらためつくり奉る程、しばしが間とて、古殿地に黒木の御假殿を仕へ奉り、去六月十三日に、假の御坐なる風日祈宮より、御遷坐の式をあげ行ひ奉りぬ。かくて一年二年がほどは、こゝにはしますべきなり。

抑神宮は國家の首腦なり。國家崇敬の府なり。その神宮にかゝる事あらせ給ふは、實に國家の不祥といはざるべからず。尊き神垣も、猶世のさがにかゞづらひ給ふ事、さりとてはかしこき限の事ぞかし。さてもそのいにしへより、かゝる例はいかにとおもひたつ事ありて、ひとつ二つの古記舊記を繙きて、おろ／＼ものにかきつけたりし程に、やゝ二十枚ばかりのものとなりぬ。記しをへてみれど、かしこにはくはしく、こゝには疎く、そこは定かに彼方はおぼろげに、もとよりとゝのひたるものにはあらぬが、たゞ筐底にひそめむ

はあたらしけれど、諸孃のしるべともならむと思ふに、古史舊記のまゝならむも事々しく、且は孃達に要なき事なるべけれど、その件々のあらましを簡單にかきあらためてもしゆかむとす。

扨その條目をあぐれば次の如し。

第一　火炎の豫防
第二　御炎上
第三　御炎上に對し奉りての朝廷
第四　善後處分

編者誌す

楠正成公の夫人に就きては、さきに、本誌(明治廿五年十月五日、廿日發行の女鑑第二十四、二十五號)に、細川先生の記されたること あり。其後、爰に言はるゝ如く、東京學士會院にて演說あり、又茶橋錄話、二、三、(明治廿七年一月、二月發行)にも詳しく載せたり、又本誌第百四十號(明治三十年九月五日發行)には、河内の國菊水學舘に在る井出知義氏の寄稿「楠正成公夫人」といふを揭けたるが、これには、皇道雜誌に載せたるを引證し、井出氏自らの考證をも加へて、細川先生の調査を補ふ處ありき。今、又、先生自ら彼の皇道に載せたる處を拔きて、前說を補はれ、之を本社に寄附せられたれば、再び玆に揭ぐ。

楠氏夫人異聞

細川潤次郎

余は嘗て、楠氏夫人の事に就き、傳聞せしまゝを、東京學士會院にて演說せしことあり。其の後、女子高等師範學校に於て、更に詳に演說せしことあり。其の說は、京師の柏原氏、近來改姓したる楠氏に傳はりたる舊說に依り、楠正成の夫人滋子は、上田兵庫頭の女と稱しながら、其の實は、萬里小路宣房の女にして、藤房の妹なりと曰へり。此の事の詳なることは、東京學士會院の雜誌と、女子高等師範學校にて出版せる茶橋錄話に載せたり。世の此等の書を閲する者、多くは疑を抱き、且反駁する者も少からざれども、余は、初より傳聞の說を紹介する者にして、一說を主張する者に非ざる故、强て答辯をなさゞりき。其の後三河の國濟美館發行の皇道第十四號を閲するに、大坂府龜井氏の說を揭載せり。其の說は、余が前說を助くる者なれど、是亦援引して、世人の參考に供せんとす。

河内國石川郡（南河内郡の誤か）喜志村美具久留御靈神職靑谷龜壽郎と曰へる人あり、此人は楠家の裔にして、數代の先大和守正直と曰へる人の夫人は、萬里小路家より來れりと曰ふ、其說に曰く、大和守橘朝臣正直氏令夫人は、萬里小路從二位藤原淳房卿の媛君敏子の御方と云ふ、正保四年吉田侍從卿の中旨を以て嫁し來れり、而して其の入輿の日を定むるや、滋子夫人の入嫁せられしは十二月なりとて、先例に據り十二月と定めたり、爾來同家婚嫁は十二月を恒例とす。

又、楠家秘鑑に曰く、

御臺所滋子御方自二田家一出賓元享三亥年十二月。

慈悲庵遺稿に曰く、

極月御臺所御入り、御名滋子媛、上田殿息女と申候へ共、其實は大納言樣御賓女云々

河内錦に曰く、

靈光寺樣御臺所は、上田隼人正の息女と披露すれども實は和田家御出生にて元享亥年十二月朔御入輿あり

赤坂昔話に曰く、

兵衛樣御行末覺束なき風說とり〴〵に付き、二十八日丸樣は觀心寺へ御出馬、御臺樣は都の御里方より、云々

全文此の如し、其の中靑谷家の傳說、楠家秘鑑、慈悲庵遺稿に載する所の如きは、大略余が前說と符合せる者なれども、河内錦の說は、和田家の出生として、萬里小路家の出生に非ず、只上田氏の息女と披露することのみ同じことなれども、隼人正と曰へること、前說の兵庫頭と合はず、赤坂昔話の說は、分明を欠きたれども、只都の御里方と曰へるにて、楠氏の夫人の京師より嫁し來れるを知るべきのみ。

以上は余が前說の及ばざる所なる故、世の皇道を闡せざる者に紹介せんとす。

此より先き、余は、前說の外に、河内國觀心寺の傳說

と、大坂三番の定專坊と曰へる寺の傳説とを茶橋錄話に掲げたり。觀心寺の傳説に據れば、楠氏夫人は、南江備前守正忠（南江備前守正忠ハ湊川ノ役正成ト共ニ戰死セシ人ナリト云フ）の妹、阿久の方と稱し、正成の亡後領内甘南備郷に草庵を結ぶ、時人南妃庵と號す。正平十九年七月十七日歿す、玉山淋圓大禪定尼と謚すとあり。又定專坊の傳説に據るときは、正行の母は薄彈正少弼以隆の女なりと云ふ。

上陳の諸説を考ふるときは、正成の夫人正行の母たる令妻賢母の所出に就ては、或は萬里小路氏とし、或は和田氏とし、或は南江氏とし、或は薄氏とす。而して大日本史列女傳には、不知何氏女と曰へり。余は固より一説を主張する者に非らずして、只此の如き令妻賢母の所出を知らんと欲するに由り、諸説を訪求したる者なれど、猶此の外にも傳聞の說あらば、幸に示さるゝことを吝む勿れ。

主從心得草（上編續）

諏訪 忠元 寄贈

爰に一つの咄しあり。昔〳〵今の事なるが、御江戶第一の場所本町三四より御藏前邊に、金銀山の如く、地面八百八町持たる大福長者あり。彼旦那、奉公人の肝煎を呼て申されけるは、當時手代小者にいたる迄、用にたつもの一人もなし、たま〳〵少し氣のきゝたるものは、我にうそのぬたをくはせ、已は何くはぬ顔して金銀を持出、吉原深川にまきちらし、或はかこひ女にうちこみ、末はつまらぬ身となりて、爰にも居られず欠落して、主人に損耻をかけて、何分意遣ひなり。又鈍き者は、臨機應變の計らひを去らず、前後の見合もなく、差支多くして、甚だ困り入なり。其方何卒よき人を見付口入いたすべし。隨分發明にして律儀なる者を早速遣はし申さるべしと賴みければ、肝煎暫く思案の体なりしが、良久敷して●いわく、發明にして律儀な

る者は、昔はこれあり候へども、只今にては皆旦那と相成候て、左様の人壹人も御座なく候と申ければ、檀那不興に見へけるゆへ、●肝煎一詩をつらねていわく●

彼輩冥頑隨下塵。唯應憐念莫生瞋。若能事々君意自。他將身作主人

此の詩の心は、彼輩とは下人をいふ、其下人は、皆おろかにして、わるい事には随へ共、よき事は一つもせぬ。それじやに依て人につかはれて難義して居る、あはれみをかけて遣ふておやりなされ。若亦主人のやうに心にははたらきがあらば、奉公はせずして主人となるべし。此道理を合點志て、其鈍きをいかる事なかれとなり。

人多き人の中にも人ぞなき
　人となれ人ひとゝなせ人

身を愼み氣をきかせて旦那になれ〳〵。もし旦那になりなむ、一日の給金壹分に當るか、壹兩にあたるか、百兩か量りがたし。二四が八ちり目をおいて三々九ろ●

●ふをするが身の為といふ算用をよく志るべし。奉公人たる者心を留よ。

假にも善を行ふべし、假にも悪はなすべからず。この一言至て大事也。志かと知りて常に行ふべし。大道を商ひにたとへ、色々によそへてさとす事は、其志れ安きを思ふゆへなり。又善事に進むの一助ともなりなんと、同志の輩に相談するのみ。大智晴雲の君子見て笑ふ事なかれ。

最明寺殿教訓百首

福原菫子　寄贈

いたづらにくらす我身のおろかさよ
　能のひとつも習ひ得はせで

世の賢こき人を見るに、若年の時より學術藝能に志深くして、日夜怠ることなし。故に諸藝萬能に達して、其の名をあらはし、家を起す。愚かなる人は只朝寝晝寝を好み、あくまで食ひ、あたゝかに着て、いたづら

に月日をおくり、一生を、飯を盛るふくろ、糞をつくる器となして過すは、殘り多きことぞかし。

いとまなき身にも物をならへかし
塵のつもりて山をなすまで

微塵も積る時は山をなし、涓滴も積る時は河をなす、何ほどいとまなき身なりとて、藝能をすき好み心にかけなば、日をつみ月を重ねて、ならずといふこと有べからず、古人の詞にも、一日に一字を習へば、一年三百六十字を得るといへり。爰を以て思へば、ならざるにあらず、只なさゞる故に、無能無藝にて一生をおくるなり。

あすといふこゝろはものにさへられて
けふも空しく暮はてにけり

惣じてなすべき事は、時を撰ばず速かに爲すべし、今日明日のとためらふべからず、今日を延してあすといふは、はや怠りの心なり、此の怠りの心より、あすは明後日になり明後日は明々後とのび、終に空しく過すは口惜しき也、朱文公の勸學の文に、『いふこと勿れ今日學ばずして來日ありと、いふこと勿れ今年學ばずして來年ありと、日月ゆきて年我と延ず、あゝこれ誰があやまちぞや』と、まことに有がたき金言なり。

人はたゞ心ひとつを正さずば
萬の能のあるかひもなし

たとへ無藝文盲なりとも、其心すなほにして律義第一ならば、中々世に捨られはせじ、藝能人に勝れたりとも、其心ひがみ邪しまならば、何ぞもちふるにたらんや。

こゝろだにたゞしくなさば賤の男も
やがて其身を世に立るなり

「うゑて見よ花のそだたぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」とは、心正しからざれば、登るべき位にも登る事を得ず、得べき職をも得ること能はずとなり。つたへ聞く大舜は、田夫より登りて攝政の位となり、終に帝位につきたまふためしもあり。左なきも、其の心

たゞしけれど、己れ求めずとも、人これをあげ用ひて、名を揚げ家をおこすべし。

　たのみぬる人に誠をつくせかし
　　かりにも荒む心おこしそ

人に事ふるには、其の主人の恩賞情のあるなしには少しも心をとめず、只一向に己れの奉公に忠節の誠を盡すべし。初めより分に應せぬ恩賞をのぞみ、己れのあやまちをかへりみず、主人の用ひざるを述懐して奉公する時は、自づから荒み勝になりて、終に逐放さるゝに至るなり。

　鳥さへもおのがねぐらの木をえらむ
　　道の正しき人につかへよ

君子に仕へやすしといへるは、物事順路にて善をあげ不善を措くが故なり、己れの勤ぶりによりて、身を立て名をあげ、いく久しく繁昌すべし、たとへ高位高官に居るとも、不義非道の家には奉公すべからず、小人にはつかへがたしといへり。かゝる家に勤むる時は己れ其の不義非道に與からずと雖も、必らず禍を蒙むる、不義にして富且貴きを浮べる雲の如しと、論語に見えたり、今日は時めき榮えても、明日を頼みがたきは、積惡の餘殃のがる可からず、いつ天罰をかうむるやもはかりがたし、恐るべし愼むべし。

　召つかふものには情け深くして
　　さてわるからぞ勘當をせよ

人の上たる者は、下を撫育するを以て道とせり、況んや其の家に事ふるものをや。常に恩を與へ情をかけて召仕ふべし。かゝれば彼も義を知り恩に感じて、よいいよ忠勤を抽するもの也。然れども、不忠不義の者はいましめこらさずんばあらず、賞罰の二つは、車の兩輪鳥の兩翅の如し。古人も、信賞必罰といへりとぞ。

　わが身なほわが心にもまかせぬに
　　人を心に任せべきやは

わが身はもとより我がものなれども、わが心まかせには行はれず、ましで他人をや。然るに、物事しひて我

が心の儘にせんとするによりて、人ににくまれうとまるゝ者なれど、只わか心を小て、堪忍を守るにしくはなし。

上のことの心にそまで腹たゝど

われより下に心あれかし

萬事を思ひやりて行ひを愼むべし。上の人われに無禮を加ふる事ありて腹立など、これを下の者に施こして、わが心の如く腹立ん事を思ひやり、愼しむこと肝要なり。總じてわがいやなる事をぞ、人に及ぼすべからず、我すきなる事をは人にも得せしむべし。これ即ち仁を行ふの道なり。

梅雨のたびの記（續）

佐々豊水寄贈

十二日　風なけれど、れし船にて、備後の鞆に、未の時ばかり船かゝりぬ。

十三日　雨にて此みなとに長日をれくり侍りける。

十四日　明がたより雨は晴ぬれど、くもなほはれやらず、むかふ風なれど船出もならざるよしにて、見合しに、風もなほりしとて、未に過るころより出船し、一里ばかり帆にて行と思ひしも、また夕つかたは風なぎて、れし船にて白石に船かゝる。夜中いかりをあぐる音枕にひびきて、夢もむすばず、とかうして明方近きころ、押音もやみぬ、いづくにか船かゝりしと尋させしに、手島といふ所まで行けるよしこたふ。

十五日　午に近きころにてもあらん。船出しけるが、むかふ風にてれして行、申の時ばかりに日比のすこしまへにかゝる。月もさやかなれど、とりかぢの方も明渡して、戌の時ごろまで、供の男女うちかたらひ、れはみさくみかはし物語などして、亥の時ばかりに一里行て、日比の湊にこよひは船かゝる。雨降出とて、苫ふく音かまびしく、まくらかみにひびきて、いぶせく夜をあかしぬ。

十六日　雨をやまず、こゝに日をかさねんと思ひしに、

巳に過るころより雲はれて、午の時ばかりにはれして船出し、申の時ごろまで七里行て、備前の牛窓にかゝる。去年の秋も此湊に、九月十六日の夜旅泊せしが、このかみの御船もはなじみなとにかゝりたまひ、御供の船も數多ありて、いとにぎはひしが、今夜はみづからの船のみにて、萬壽丸さへ今年はまゐらで、去年の秋いとゞはれもひいでらるゝ。

十七日　巳に過るころ船出し、またらくはれして行、今日は室へ着船せんこといかにあらんとはもひしに、晝ごろより追風にて、申の時ばかり室の湊に船つきぬ。ことゆゑなく渡海せしとよろこびあへり。直に暮ごろ室のやどへ上り、旅ねの枕をとる。

十八日　巳の時ばかりにやどを出る。空くもりなくはれて、風も音せず、うらゝかに日影さしそふ。室の山路を越て行、昨日の船よりみはし高山を越るとて、

山かつのかよひ路とのみみやりつる
　たかねをけふはこえてこそゆけ

左右山々そびえ、芝生の原を行く、岩のところどころに大なるも小さきもありて、つゝじのこきうすき、紅にはのがしゝ咲て、まことにつくりなしたるやうなれば、めづらしく目とまりぬ。今日行所は芝生うちつゞき、れんげ草などさきみちしなかに、黄なる小草の花もみどりに交りて、秋の野ならねにしきをしく。山の裾に池もあり、水草の生出て、麥畑には雲雀のこゑして、空高くまひあがり、いと興あり。夕つかたまたし歩行にて行、申に過るころ姫路のやどにつく。

十九日　朝日立のぼりて出る。すこし行て一郷川舟渡しあり。それより曾根の松をみんとて行、いにしへ菅原大臣のつくしへながされたまひし時、此所に植ゑきたまひし松のよし、今に榮て枝葉茂あふ。この松の葉をもたる人は、わらはやみなどに惠あるよしなれば、人々拾ひける、自もいさゝか人のためもてゆかんと拾ひて、

世の人のかくともつきじさかゆく

　　　このかみかきのまつのことの葉

それより石寶殿をみて新井川の舟渡を越、高砂へ心ざして行、祇園社あり、相生松のよしいふもいぶかし。此松、かた枝は男松かた枝は女松のよし赤松なり。古の松は枯て、その後植つぎしといふに、

　植そふるいろもかはらであひれひの
　　　名はたかさごのうらのまつがね

それより高砂浦に行、風すこしあれど、空いとよくはれて、しばしこゝにやすらふ、石など拾ひとりて又駕に乗て尾上鐘を一見し、暮近きころ加古川宿につく。

二十日　空くもりなく、朝日の峯にさしのぼるころ宿をいづる、明石の人丸社へ詣で、

　傳へきて代々にさかふるしきしまの
　　　みちをまもりのかみやあふがん

　しき島のみちあきらけくこのかみの
　　　めぐみをそへよたどりゆく身に

忠度の墓をみて、

　高き名はいまもくちせでやまさくら
　　　むかしのはるをしのばれぞする

大藏谷にてやすみ、舞子濱を歩行にてゆく、海原はるばるとみわたして、船の行かふさまいはんかたなし、土地きよらにして、松の木立ふかき木かげをゆく、

　常磐なるいろよりほかのかげもなく
　　　ちもとのまつのおなじ木たかさ

たかき山へのぼれば千壺といふあり、これをみて仲哀天皇とやらんの御陵ををがみ、又駕に乗て行、此所に敦盛の石碑あり、須磨浦の磯なれ松のかげにしばしやすらひて、

　眞帆かた帆こゝろごころにゆく船も
　　　おもひいり江のかせたのむらん

ゆきゆきて淡路島も遠ざかりぬれど、

　行さきとみしもいつしかうらなみの
　　　へだてゝあとにかすむしまやま

それより須磨寺に行て靈寶數多みる、中に青葉の笛な

どみるに、むかしゑのどれぞずる、辨慶が筆にて、制札を立られし若木のさくらもあり、ここかしこみめぐりて、亥に過るころ、兵庫濱のやどに一夜の枕をかる、そのよ、郭公のはつねをきゝて、

すま明石なぎてゆくらんほとゝぎす
たゞひとこゑをこゝにのこして

樓へのぼりて海の面をみるに、月の光波にうつりて、船の行來もみゆる、淡路島紀國の山もまじかくみえて、眺望たぐひなし、しどゑながめてふしどにいりぬ。

廿一日　明れど旅よそひそこそこにして、供人の來るまで此所に眺望し侍る。波間に出る朝日影ののどかにてらして、たぐひなき朝ぼらけなり。終日こゝにあらまほしくれもふ。今日も十里あまりの道なれどとそそのかされ、心をのこして出立、けふ行所はけはしき山路にはあらねど、登下の道なり。此所に楠氏の塚あり、立寄てみる。それより生田社を心ざして行、ほどなく此所にいたる。上の山生田社ならん、社の左右に梶原井、般梅あり。行ゆきて舟渡一所あり、十三渡は火ともして越ぬ。大坂の御舘へは亥に過るころつく。

廿二日　けふはこゝに足をとゞめぬれど、いとゆるやかに、心も落つく、宇土より河島、先ごろより此所に滯留しけれど、めづらしき所の對面のうれしさ言かどし海上つゝがなかりしよろこびのれはみきくみかはしあそぶ。此ごろ日和つゞきぬれど、先のほどいかゞなるらんとれもふ。

廿三日　けふも空よく晴、午に近きころより思ひ立て天王寺へ詣んと出立、すこし駕にのりて御城近き邊より歩行をゆく、昔、三齋公の住居たまひしところは、いさゝか道よりなれ。行てみる、今も越中町といふよし、高津宮、生玉、天王寺こゝかしこみめぐり、うかむせの家にてやすむ。清水へも立寄てみる、二里餘の道ときけど、かへりは舟にてもどりぬ。

二十四日　雨降七時ころにもあらん、川舟に乗り、天

滿べも行てといひしながら、早日もくれ、雨もをやみなけれど、むなしく過る、一里ばかり行かと思ひしに、雨風まさりに吹く、いかがしてあかしなんと舟中ものうし、夜半ごろよりなほいやましになりぬれど、

波かせのねともはげしくかぢまくら
ゆめはいづくにさそひゆきけん

とひとりごちて一夜をあかしぬ。しのゝめ過るころより風もすこししづかになり、雨もやみぬ。

廿五日　辰に近きころ空はれて、苫などとりのけ、舟出しけり、八幡へもまうのぼらんと思ひしに、河舟ひまどりて、暮近きほどになり、又雨もつよくはあらねど降いづれど、伏見へ着も夜更なんとて、はるかにふし拜み、からうして子に過るころ、伏見の御館につく、二十四日申刻ごろより舟に乗り、二十五日子刻ばかりに伏見につき侍りぬ。終夜みづからをはじめ、枕とらざりけれど、今日此所を出立ん心もなし。

二十六日　朝山も、昨日より此所までむかひにとてまゐりければ、いと嬉しく、なにくれの物語などして、伏見に旅枕をかさね侍りぬ。

廿七日　伏見を立て今日は名にしれふ華の都へおもむくとおもへど心嬉しく、朝とく旅粧ひしつゝ、巳に近きころ出立、まづ藤森につく、しばしやすらひ、稲荷社へも詣で、山へものぼりて見る、それより駕にのりて行、東福寺を見物し、通天橋など音にきこえしも、今日はみることのうれしさ、今は紅葉も青葉にしげる梢を目下にみながさるゝ、流れも清く紅の色にいでなど、詠もさぞあらんと、秋ならまほしくぞおもふ。こゝかしこみめぐり、ほどなく大佛をみる、年ごろきゝこし大伽藍佛の大きさ、みな人のしるところなれど、筆にもらしぬ。三十三間堂をみて、此所の茶店にしばし休み、清水寺へ詣で、いにしへより諸人しんじ、惠もふかき觀世音の前にぬかづき、舞臺よりみれど、淀川、山崎、八幡南にのぞむ、地主權現へもまゐる。音羽瀧のもとにて休み、それより高臺寺へ行てみる。美

をつくしたる御寺も、今は古寺となりぬ。昔ぞおもひやらるる。案内する僧出來て、のこるかたなく見物し、かさのぢんといふにもあがりてみる。祇園一軒茶屋にて休み、知恩院はそこ〳〵にみて、むかふの會所といふ御舘につき、此所に留滯し侍りける。

廿八日　雨降けれど、今日は近き所とぞそのかされ、靈山へ行、丸山にてあそび、暮つかた空も晴ぬれど、明日は嵯峨へゆかんとおもふに、心いそがれて暮ころかへりぬ。

廿九日　雨はふらねど、雲はれやらず、いかがあらんといふ、降もせまじきよしいへど、やどりを出て、三條通、兩替町、小池通へかゝり、神泉苑へ立よりてみる、うづまさへ行て、聖徳皇太子の尊像を拜み、廣澤池へ行てみる。此所の茶店にて休む。むかふは衣笠山といふよし、廣澤池の眺望いはんかたなし。鳰の波にゆきかふをみて、

　むかしより鳰のかよひぢあとたえず
　　いまにその名もひろさはのいけ

それより二尊院、小倉山の山庄もみんとゆきけれど、さゝはることはりて門内へもいらず、むなしくかへる道に紅葉の一葉二葉いろづき散落てあり、拾て、

　ただ一葉いかにそめてか小ぐらやま
　　あきをもまたぬいろにいでけん

と口すさみぬ。今ひとたびといへる古歌をもおもひいでられて、みぬいにしへをしのぶ。釋迦堂へも行、拜みて、野宮のほとりより雨すこし降くれど駕にのりて、小柴垣、黑木鳥居など行すりにみて、あらし山へ心ざして行、此所の三軒茶屋といふに休む。むかふは嵐山、大井川、渡月橋は左にみゆ、戶難瀨瀧をみんと石原を行、いにしへより代々の歌人の詠れきし名所とおもへばしのばれて、

　ここに今はなもあらしのやまざくら
　　しげるあを葉のいろもなつかし

かげ隆此所へもともなひしが、花や紅葉のをりみせま

はしきとて、

　小ぐら山いまひとたびのとむかりも
　　わを葉にれもふこころしらなん

となぐさめて、行、渡月橋をうちわたり、虚空藏へ行、松尾、梅宮拜みめぐり、それより梅津渡を越て、壬生へ立よりしころは、はや日も暮近くなりけれど、こゝにてしばらく休む。かへるさなれど、島原をもみて、出口柳の本の茶店に休み、朱さか野の邊をとほり、四條通に出てかへる、端午の節句前にて、市中の左右人形などさまざまかざりにぎはしきことなり。

晦日　內裏の邊を一見して、中立賣御門より油小路、今出川通北野天滿宮へ詣で、平野の茶店にて休み、金閣寺へ行、きゝしにまさりて美をつくしたるところなり。是より大德寺へゆかんと、野路を行に、今日は今宮の御輿洗のよし、いとにぎにぎし。高桐院へ詣て、三齋公の御墓を拜み、今宮へ詣て、別當佐々木何某が家にて休み、かへるさ、下加茂へ行、吉田へも參詣し、暮かかるころかへりぬ。明れど、（以下次號）

北の海路

石榑千亦

第十四信

　夜もすがら松風とのみおもひしは
　　わふくま川の瀬の音なりけり
　山もよしせのともきよし千代懸て
　　わが宿しめむまつのしたいほ

松葉館は福島の町の果にありて、山を前後に見、阿武隈川をたゞ庭の下にながめ、わたりのけしきつゆ市の塵にしみたるものなく、黄金しきたらむが如くうなだれたる稲、疊しきたらむが如く翠をのべたる桑、みな其庭に入れり。かにかくにうれしき宿といふは、こたびの旅の奧州蝦夷かけて、まづ指をここに打らむ。正午縣廳にものして書記官參事官などにあひ、會務のことをかたらふ。みな熱心に力を盡すべしといふ。警

務課長は事務打合の爲に宿に來り、何くれとかたらふ縣廳よりの歸さ信夫山公園にものす。飯坂温泉にものすべくおきてたりしも、空合あしきのみか人の來べき時も迫りぬるにて、えゆかざりし。

公園は福島町を去る十二丁計、田畑の間の路を經て來るところ、一目に市街を見おろし、けしきあしきにあらず、されど上野芝などにくらぶれど、いと小さくはたあかぬ心地す。山上招魂社黑沼神社あり。一は戊辰の戰死者にしていと新しく、一は式内の社にしていと古し。鄙の公園としては、まづかゝるものなるべし。こゝには三新聞あり。進歩黨のを日報といひ、自由黨のを民報といひ、その中に立てるを新聞と名づけ、みな頭に福島の文字をおく。こゝには未だ市制だにしかれずして、なほかくの如し。河野廣中、阿部井磐根、柴四朗などの出所として、政黨の軋轢おもひやるにあまりあるべし。

夜その記者みな相率ゐて來り、本會の今のあり樣、こしかたの歴史、ゆくすゑののぞみなど伯の君の談らふに、みな耳傾けつ。もとより博愛慈善の事に、黨派などいふものゝなければなり。月は河瀬にふけて、風のやう〳〵寒くなりゆく頃、みなその歸さにつきぬ。二十日夜。

第十五信

廿一日つとめて停車場に來り、七時發の汽車にて歸さにつく。道のこと又いふべきなし。くはしくはこの一二日の中にたいめたまはりてなむ。

筆のついでになほくりかへしてもいはまほしきは、東北の兵備のそなはらぬ事これなり。東北の海岸一の砲台なく、一朝事あらむ折敵の巡航艦來りて、海岸の市街地に大砲一發づゝ放ちおかむには、彼がおもふまゝになるなり。まして北海道は全く明放しなれど、海岸に近づきて鐵道を破らむ、陸の交通絶えて商船のおはれむ時、逃入りて保護をうくべき要港なければ、海の交通はた絶えなむ。軍艦完備の曉にても、なほ海岸延

長線の長きわが國に悉くうかべて守ることを得ぬは、いはでもの事にて、艦隊は主力を敵の主力ある艦隊にあつべきは論なし。さても救ふべき砲臺も要港もなく、軍艦はたなしとすれど、初めより熨斗をつけて高坏の上にあぐると何ぞ異ならむ。その時幾百千萬の陸軍ありとても、河童の何とやらにも及ばず、つまり土偶と撰ぶところもなからむ。軍備擴張とか何とかこちたくのゝしれる人等も、是までの仕來りとか情實とかいふ私心にせまられ、弊におちいりて、陸にのみ心を盡せるは、目なきか魂なきか、それにてもよし、何故に東北に要塞砲兵をおかぬにや、われはかの某の日米開戰未來記、桑港攻擊は覺束なからむも、わが國の要港を占められ償金を出すことの、事實に現はれ來らずやとそれのみ憂に堪へず。軍事のことわきまへぬ吾にとりては、何事もわからねど、素人の考にても一たび東北に遊びたらむには、さばかりの思は起らではあらじ。あはれわが救難所の設けられて、海岸望樓の片はしをだに補ふことあらば、これ幸の極といひつべし。終にのぞみて、これのみは更にきこえまつりたくて、こゝにくどくどもくりかへし候。あなかしこ、とくかいやり給へや。

北の海によするあだ波ふせがずは
　やまと島根もあやふからまし
仇波のよせ來ぬかたもなからまし
　四方の海邊にこゝろせよひと

二十二日朝　（大尾）

雨夜の獨語（二）

白松園主人

（に）艱難は、幸福の母なりといふことを、あいなだのみに、することにはあらね共、一錢の學資なくて、學ばんとしつる、自然の境遇は、おのれを驅つて、さまざまの辛酸困苦を、嘗めしめたり、信と義と、禮と恥とを知る上は、如何なる困難に遭遇するとも、苦しかるまじ

と決心しぬ。さてその決心の、臍を固めしめたる者は、全く兄の力によれり。我兄の性、短氣急性なること、疾風烈火の如くなりしかど、極めて自信の念に強く、自らさぞと思ひ定めしことは、容易に改たむることなく、必ず意志の實行を期しき。かゝれど、初め吾妻に上れりしとき、或人の、當時の學生、獨立の念に乏しく、常に依頼心を離れざる故に、大方意志を貫徹する者少しと、戒めけるを、いみじく信じて、必ず獨立せんことを盟ひき。然るにおのれが性、極めて鈍くて、意志はた薄弱なりしかど、居常嚴責して止まず、ろの刺激の、余りに甚しかりしため、少しく改まりぬめり。かくて、兄弟協力して、活計の途を講じ、先づ兄を助けて、其志を遂げしめ、さておのれを後にするに定めつれども、いかなる事をなしてか、口腹を養はんと、兎角に案じ煩ひけるが、石版彩色畫の、廣告ありけるを見て、やがて之れに着手し、終日終夜、息をも繼がで、書きに書けども、僅に六錢を得るに過ぎざれど、こは斷念し、此度は筆耕をと、志しつれ共、之れさへ其種少くて、いと覺束なかりければ、止めつ、かねて知りける人の、水車業をなす者ありければ、之れに頼み聞えて、米舂く事の、手傳をなすに、あさましう、我ながら、よくもかゝる下賤の群にまで、陷りけることよと、悲しきものから、我と心を勵まして、その業をつとむるに、生れてより、力業とては、鍬一つ持ちしことなければ、始めてこそありけれ、骨も碎くるばかりに覺えて、今は起ち居さへ、苦しうなりけれど、止むを得ず、これをもうち止めつ。かくては手を束ねて、餓を待つに等しかるべし、いかがはせんと、議を疑らすに、或人の路傍に飲食物を鬻ぐは、頗る利益ある由、語りければ、兄は之れを聞きて、げに方今の學生、窮してたづきを失ふ輩も、一人として、社會の下層に、活路あるを知る者なし、よろしく右の説に從ひて、今夜より試みに、飲食店を張らんはいかにと、おのれも大に之れを贊し、夜は車を曳きて、商人

となり、晝は袴を着て、學生となる、中々に興味多からんと、獨つて之れを實行するに決し、直ちに屋臺車を購ひ來り、鮨パンの類を設け齊へ、筒袖の破衣の上に、繩の帶を結めつゝ、夕暮の頃より、窃に宿を出でゝ、車を引き行くに、あたりの者等は、見つゝ笑ふめり、豫て思ひ定めしことながら、何となくうしろめたく、爪くはるゝ心地しながら、ある街の傍に、車を据へ、小暗き後に隠れて待つに、まてども／＼、入り來る客なし、夜も早や十時とればしき頃、一人の男來りて、頻りにうちながめて、鮨とパンとを一つ宛食ひつゝ、「アヽマヅイ」と云ひて、立ち去れり、そのときのをかしさ、思ひ出づれど、今も腹を抱へられぬ。それより後は、立ち寄らんとする者だになく、人影消えて軒端の燈火さびしげなり。今はとて歎息しつゝ、車を曳きて、かへるに、駐在所の前を通るとき、巡査は怪しと思ひけむ、進み來りて誰何すらく、「ナンダイ」と、書生なりと答へしかど、巡査微笑して復た云はずなりぬ。かくて翌の夜も、雨の降るにも屈せず、出で行きしに、客なきこと前夜に異ならず、かくすること三日にして、遂に落膽し、嗚呼我曹、商買の道には猶うとかりけりとて、斷念したることありき、いかにをかしかりけむ。爾來數年を經たる今日、何ぞ該處を通行して、當年の懷舊、そゞろに禁じ難きに、彼の誰何せし巡査の、猶勤續して、交番の前に立てるを見き。あはれ兄の、今も此世にあらましかど、いかに笑ひの、くさはひなるらむと口惜し。

(は)れなし頃の、夏なりけり、夜寢ぬるに、蚊帳も布團もなかりけれど、せん方なくて、着物を、頭と足とに掩ひて、寢たるに、やがて蚊は、羽風ならして、いみじう出で來て、只刺しに刺す、苦しさ云はん方なければ、二人は密に起き出でゝ、近きあたりに、神社ありけれど、そこに至りて、拜殿の片隅にて夜を明かすに、社は殊更涼やかにて、蚊は絶えて居らざりけれど、その後は夜毎にこゝに來りて、東の白む頃、窃かに宿に飯

りけり、こは知る人もなかりしかども、神の御心に、何どか見給ひけむ。

(へ)時雨ふり、紅葉散り、時のまに冬は來て、寒さいたう、身にしむ頃となりぬれ共、例の夜の衾とてもなければ、なほ衣服の限り取り出でゝ、宿の者に見や疎まれんと思へば、燈火やをら打ち消して、竊やかに纏ひて寢るに、すさまじうわびしく、すき間の風さへ、いとさむけれども、堪へ忍びて、兄弟背を合はせつゝ眠りけり。あはれ故郷人に、一目、此の樣見せましかばと思ひぬ、されば後の日に、今日の昔を、語り出で、笑ふ折のなくてやはといふを、せめてものにして、日頃過すに、身はならはしものといふは、まことにて、斯くても、風だにひかざりしことの、不思議さよと、今よりは、すゞろに髪の毛も、彌立ちて覺ゆ、さて兄は、ひと目知れる人の許へ、行きけるに、くさ〴〵の物語の末に、云々の由語り出でければ、此人物のなさけある人にて、哀れに悲しきことかな、さらばこれ參らせんとて、夜の調度を、二人が被るべく、かしにしかば、いといたう喜びて、車に積みて、夕暮の頃歸り來つ。さて、おのれに向ひて、人の情のうれしき由を語りぬ。その時、おのれがよめりける歌

唐衣たもとゆたかにたちしかど
　包むにあまる今日のうれしさ

忘れじなちとせの松の露よりも
　君がめぐみのかゝる夕暮

(と)かゝる折にぞ、人の心もあらはれぬべきと、兼好の云へるぞうべなりける、初めのほどより、難波の葦のよしあしを見て、交らはぬにしもあらね共、日比は見も分けがたきを、大事なるときに臨みて、よそに見すぐすなどによりてぞ、まことの心は知らるなる、おのれ、友の少きにはあらねど、眞心あるものは、中々に、交り淺き人にはかめるは、何の故とも知らず。

(ち)兄は、いたく音曲を好みしかば、夜毎に三里に余れる處まで、唱歌習ひに行きけり。峻しき峠を越えて、

行けど、道いと近けれどとて、ある日、たち連きたる山中の木深きに、弓張月の影をたよりに、辿る〳〵皈るとて、忘れもやすると、歌と譜とを、繰りかへし歌ひつゝ、行くほどに、ふと心づきて見れど、見も知らぬ山の、頂に出でたり、こは唱歌に心を奪はれて、迷ひにけりと、もと來し道を求めて、漸く皈りぬと語りき。又ある時、風琴を買ひ求めて皈へるに、余りに彈きて見まほしさに、宿に至らん間の心元なく、遂に道芝の上に坐して、一時間余り奏で〻かへりぬ、大方さどかり好みたりしが、その東京に出でし時、日頃詩吟には、最も得意なりければ、遂に工夫して、オールガンに合はせて、彈くべく、譜節を考へ出でつゝ、多くの詩を擇び、悉く譜を附して、日本詩吟集と題して、出板することゝはなしぬ。然るに當時、神田あたりの、某學校に奉職せし、尾崎某と云ふ音樂教師あり、之れに書肆への周旋を、頼みしに、此のしれ者、卑劣にも書肆を欺き、おのが作曲の名義にて、出板させつ。原稿料をすら、大方掠めて、僅かの金をくれたるのみにて、殘りは遂に拂はずなりぬ。身は此道專門にありながら、此道にはたど〳〵しき、一書生にだも及ばず、名を盗み社會を欺き、僅に余暇をもて、作り出して、學資の一端ともせんとする、貧書生の金を、貪りぬるしわざは、只に德義上の、罪人のみにはあらじかし。このしれ者、その後芝の某中學に、居ると聞きしが、今もありやなしや。

(り)葉月十五夜の、月いと明きに、西のそらを眺めやりて、ふるさとの八幡の祭は、今夜なる者をと、思ひ出でたるこそ、哀れなれ、鄙の祭禮とし云へど、老いたるも幼きも、いと樂しきものに、待ち數へつ、やがてその日にもなりぬれど、親戚なる翁媼等は、孫など伴ひて、處せく入り來ぬるもをかし。此日社には、相撲神樂などの催ありて、一年の賑、之れに過ぐる者なし、おのれある時、この相撲見むとて、詣でたりけるに人いみじう、山を築き出でたらんごと、集りたれど

容易見えぬを、漸うに分け入りて見るに、前にいと無禮なるれのこわりて、處得良に、さしはたがりて、いと惡げなりけれど、後より、やをらその帽子を突き動して、少し避けしめんとしけるに、其のをのこ痛く怒りて、急にうしろに向きたるを見れど、日頃の識れる、魚店の主なりけり、此の輩のならひ、爭ふことには、いとはやりかにて、逸速く打ち懸らんとせしに、れのれなるを見て、躊躇てわりしが、さりとも知らで、傍に同じく見てわりける男に、物をも云はで、攫みかゝりけれど、此男驚き怒りて、互に劣らじと、打ちあふを、あさましう、いとをかしかりけれど、ついでわろかりければ、まかり出でぬ。

蘇小妹三難新郎（三）

湘玉女史　節譯

從來大家の女眷が、廟に入りて燒香するには、人に見らるゝを厭ふゆゑ、朝早く行か、然らざれは、夜に入りてゆくこととなり。甘麼にとなれど、朝早く行けど人來らず、夜に入れど人の已に散り去りたる後なれどなり。秦少游は兼て少妹が燒香の時刻までも探り得たれど、二月一日の五更の時分起出で、先づ髮を梳り、面を洗ひ終りて、遊方道人の模樣に打扮ち、青布の唐巾をもて頭を裹み、耳の後には兩個の石碾的假玉環兒を露し、身には皂布の道袍を穿て、腰には黃なる縧を繫け、足には淨襪草履を穿き、頂の上には一串の拇指大的數珠を掛け、手中には一個の金漆鉢盂を持ち、侵早に東岳廟の前に至りて伺候居たり。天の色黎明なる頃、小姐の轎子は廟近く來にけれど、少游は走開一步路を讓りたるに、他の轎子は廟に入りて、左の廊下に昇据られたり。當下小妹はやをら轎より出で、殿に上りけれど、まちかまへたる少游は、早く小妹の容貌を看見了りしに、妖嬈美麗と云ふにはあらねども、清雅幽閑て、全く俗韻なき風采は、却て一段の見榮あり、かく容貌は見定たるも、又他の才の調が眞正にいかなるやを知

らず、試して見んと思ふ内、暫くして焚香も畢りたれど、少游は却廊を循りて、殿の左の方に來りて、小妹に相遇たり、少游は直に個つの問訊を打て云ふ、

少姐有レ福有レ壽願發二慈悲一

此意は、少姐の容貌を見まゐらすに、福あり、壽あり、願くは慈悲の心を發して惠みを垂れ玉へとなり。

小妹聲に應じて答云ふ。

道人何德何能敢求二布施一

此の意は、道人は何の德何の能ありて、敢て布施を求めらるゝやとなり。

少游又問訊云ふ、

願少姐身如二藥樹一百病不レ生

此意は、小姐の御身藥樹の如く、百病生せざらんことを願ふとなり。

小妹は、一頭走一頭答云ふ、

隨二道人口吐二蓮花一半文無レ捨

此意は、道人の口より蓮花の如き好き語を吐きたまふに隨す、我は半文も布施は出さぬとなり。

小娘子一天歡喜如何撒二千寶山一

此意は、小娘子此上なく歡喜し、何ゆゑ寶の山を撒きちらしたまはざるやと小妹を挑むの意をあらはしたり。

小妹は斯くとも心附かざれは、口に隨せて答云、

風道人恁地貪痴那得三隨二身金穴一

此意は、瘋　道　人よ、恁地に慾張たる馬鹿なことを言ふや、どうして金穴を持て歩く者があらうやとなり。金穴は金持のことにて、後漢書に見ゑたり。

小妹は一頭では道人の問に答ながら、一頭では早く轎に上りけれど、少游も亦身を轉へさんとして一句を喃出して道ふ、瘋道人今日小娘子に對面することを得しは千萬の幸なりと。小妹は此言を聽きたれども、すこしも意にとめず、早や轎に上りけるが、跟隨的の老院子は先刻よりの有樣を怪み思ひたるに、轎の傍にまで來りて斯の如き言を發するは、道の道人餘りとい

へた放肆なり、いで詩閙をして呉れんと、少游の跡を遂はんとする、折しも廊下の那方より一人の垂髪的だちなる俊俏の童兒走り出で來り、かの道人に對ひて呼び道ふ、相公早く這裏に來りて衣服を更へたまはずやと、那の道人先つ走り、童兒も後に隨ひて去らんとするとき、彼の老院子は、悄地童兒の肩を捻り、低聲にて、今前面に走り去りたるはいかなる相公なるやと尋ねたるに、童兒は答て、われは高郵縣の秦少游と云ふ相公なりと答へけれど、老院子も兼て其名を聞き居る人ゆゑ、詩閙をなさずして、其儘回り來り、其よしを附添の老婆に語り、老婆は轎の内なる小妹に傳へ、小妹も玆に始めて那の化緣的道人は秦少游の假裝的したるものを曉りて、之を一笑に付し、且丫鬟們にこの事を多口さぬやう囑付て回りけり。

話分兩頭、さて秦少游は假裝して岳廟に至り、飽まで小妹の容貌を看しに、思ひし程に醜からず、況て應答は水の流るゝ如く、其才氣のすぐれたることは言ふ迄もなければ、こゝに始めて心を定め、速に吉日を擇ひ、親ら訪ね往きて親を求めたるに、父老泉も、望む所なれど、異議なく應允したり、よりて少游は、世間並に結納の財幣を贈る抔の事を辨したり。この親の締りしは二月初旬の事にて、少游は急に婚を完せんと欲し、其意を言ひ入れけれども、小妹之を肯はず、是他なし。他は既に秦觀の文字をしかと看定めたれど、試驗に及第することは必定なり、今や試驗の期限も近き居れど幸ひこれを終りてのち、秦觀が象の簡を持ち、烏紗を冠るに至りたる上にて洞房花を擧ぐるも遲からずとの意なりけれど、少游も只得なく他の言に依ひけり。

さて三月初三日は、禮部省に於て大試驗あり。秦觀は首尾よく此制科に中り、評判も至てよろしけれど、直に蘇府に來り、丈人を拜して又完婚の一事を稟復、且寓居には人手もなければ、貴府にて花燭の禮を行ひたしと相談せしに、老泉笑て、子は今日及第の金榜を掛け、秀才たりし白衣を脱きて、緣ある衣服を著る身分

になりたることとなれど、子の爲には今日は最上の吉日なり。婚禮のために別に日子を擇ぶに及はず、只今晩この小寓にて親を成すこと美事ならめと云ひけるに、東坡學士も傍にありて之を賛成し、相談頓に決りければ、是夜小妹と秦觀は相竝て堂に上り、親を拜し百年姻眷と就り了れり。正に是、

聰明女得二聰明婿一。　大登科後小登科

此意は、聰明なる小妹は聰明なる秦觀を婿として、佳人才子好配偶を得たり、又秦觀は禮部の大試驗に及第したる後、さしも容易に人に許さゞりし小妹の婿となりたるは、恰も小試驗に及第せしが如しとなり。(未完)

才くらべ

蓬生屋女史

高木が才

延元二年七月、新田義貞義助二手に分れて、國を支へ京を責めむものとて、義貞は三千餘騎にて越前に留り、義助は二萬餘騎を卒して二十九日越前の府を立ちて、翌日敦賀の津につきたまひぬ。尊氏之を聞き、義助が上洛することそゆゝしき珍事なれ。期にのぞんで引かむ南方の敵勝に乘るべし。未だ事の急にならぬ先きにはやく八幡をこそせめれとしれき、京都へ歸りて北國の敵を相待つべけれど、高武藏守へ下知をぞなしける。此の八幡山には、義興顯信敗軍の兵を卒してたてこもりしに、洛中の逆徒かずをつくして取圍み、城中己に食乏しく兵勞れしかど、なほ北國よりの上洛近くにあるべしと聞きて、士卒ただそをたよりに梅酸の渇を忍ぶぞかりなる折から、師直尊氏が下知を聞き、急に此の城を落さんとすれども、山嶮岨にして、中々に上ぼりえで容易くれとすを得ず。さまぐ\思ひをめぐらし、或夜風雨にまぎれ、逸物の忍びを山に入れて、神殿に火をかけたり。官軍はさる事あらむとも知らず、やゝ油斷しける折りから、俄かの騒動、煙の中にあわて迷ふを見て、四方の寄手十萬餘騎谷々より攻め上ば



り、既に一二の木戸口までぞ攻め入りける。此の城三方は嶮岨にて、防ぐにたよりあれど、西へなだれたる尾崎は平地につゞきたれば、僅に乾堀一重をたのんで春日少將顯信朝臣の手のものども五百餘騎にて支へたりけるが、敵の火を見て皆引色になりにけり。爰に城中の官軍多田入道が手の者に高木十郎松山九郎とて、名を知られたる兵士二人ありけり、高木とよばれたるは、心はいと剛にして大山をもくづさんずる氣のみはあふるれど力は螳螂の斧ばかりなり。又松山と呼ばれつる方は、力世にすぐれて、つねに、人の一分も動かし得ざる大盤石を片手にさゝげなどして、自からもほこり、人もまたおどろきけるが、心はいと臆病ものにて、豆を射る矢風にもわなゝくばかりなりけり。折りしも二人共に同じ圍を堅めてありけるが、一の木戸を敵にせめおとされ二の木戸をなほ支へてありけるが、敵は雲霞の如く押し寄せ來りて、はや、逆茂木をきりやぶり、木戸をも落さんとす、最前よりたゞわなゝきわ

なゝき居たる松山はいよ／＼震ひ戰きて、戰かはん事も思はず、はては、逃げまどひて、腰をもぬかさんとかりなるに、高木十郎之を見るや眼を嗔らし、此の臆病野郎め、かくの如く敵四方を圍みて、一人もあまさじと攻め戰ふ合戰なり。こゝを破ぶられては宗徒の大將達乃至我々に至るまでも落ちて殘るものやあるべき。されど、此處を先途と戰ふべき處なるを、御邊以ての外に臆して見え給ふこそあさましけれ。つねひごろ百人二百人が力ありと自稱せられしは何のための力ぞや。所詮御邊爰にて手をくだきたる合戰をし給はずど、我れ敵人の手にかゝらんよりは御邊と差し違へて死すべしと、腰の刀に手をかけ、怒つて誠に思ひ切つたる体にぞ見えける。松山その色を見て、覿面の勝負、敵よりなほ怖ろしくや思ひけむ、しばらくしづまり給へ、公私の大事此の時なれど、わが命惜しむべきにあらずいで／＼一戰して、敵に見せんと云ひつゝ、なほわなゝき／＼走り立ちて、傍らにありける大石の五六人しても持ち上がらぬばかりなるを、輕々と提さげて敵の群がり立ちたる中へ投げたとせしに、何にかたまらん寄せ來りし數萬の兵共此の大石に打たれて將棊倒しをするが如く、一同に谷底へ落ちて、頭を砕くもあれど、手足の飛ぶあり、或は己れが大刀長刀につき貫かれて命をおとし、疵を蒙むる者幾十萬と云ふ數を知らず、松山はたゞ夢中なほわなゝき／＼大石大木あたるにまかしてなげれとしなげれとしさながら大山の崩るゝが如くなり。今しも攻め落さむと見えつる八幡の城、思ひの外にこらへてこそ。松山が力は只高木が身にありけりと笑はぬ人もなかりけりとなり。

書きよせ（一）

草の屋主人

和歌自賛

堀川の内大臣賴宗の卿は、日來和歌を好み給ひて、よくむかし人の歌の心、歌の古實をも知りて、大に自負

せられけり。其の時の關白宇治殿にまゐられても、たゞあらむたゞ低頭平伏もすべかりしを、賴宗は上ばる毎に、和歌の事やがて申出でゝは、是は殿もしろしめされじ、賴宗こそ知りて侍れ、彼れも賴宗こそ知りて侍れ、殿などはえ知らぬ事なりとて、扇もて、板敷をはたゝとたゝかれけるに、宇治殿も笑はせ給ひけりとなり。實に罪なきは和歌の道にて、此道は自讃も亦憎からぬ事にや。

正徹謫居

釋正徹は淸巖和尙と號して、世に徹書記と申しけり。そは始め、書記たる故を以てなりとか。東福寺に居りぬ。日來しき島の道を好みて、其の名いと高かりけるが、或る秋の夜、月をながめて、

中〳〵に見ぬもろこしの鳥も來じ
　桐の葉たとせ秋の夜の月

そも此の歌の中なる見ぬもろこしの鳥とは鳳凰のことにて、其の鳥は君子鳥など稱して、聖人の出でたる世ならでは出でずともろこしにて稱しぬ。其の鳥はまた桐に下りる鳥なりとか、故に如何に桐の木がありてもまだ見たる事もなき鳳凰など來はせぬから、桐などありて中〳〵に月のさはりゆゑ、いつそのことあの桐の葉など落してしまへとの心なり。此の歌天上に達し、こは時世の惡しきことを諷するの意ありとて、逆鱗大方ならず、遂に山科に謫せられぬ。正徹山科に謫せられ、其の居る所を招月と呼びけるが、又七月魂祭りの折り、

中〳〵になき魂ならむ故鄕に
　歸らんものを今日の夕ぐれ

天皇、又此歌をきこしめして、あはれませ給ひ、幾むくなくして、東福寺へ召しかへされしとなり。和歌ははかむかり神意を動かすものにこそ。

むしそむ切り

むかし淺草觀音寺內に能ありけるに、さらでも人集る觀音寺內、上下の見物人山をなす中に侍とも見えず、

中間らしきもの丶一人通りけるが、諏訪町のあたりにて、むしそば切り一膳七文とよびけるに、かの男、腹すきけれどよらむやと思ひ、腰なる錢を見れば、僅か十四五文あるのみ。されど、殊の外にくたびれつかれひだるくはなりたり。まづよらむやと思ひ、暖簾の中に入るや早くせんをばかきすゑたり。腹はすく、殊に口あたりのよきもの、嚢中錢乏しきも忘られて、遂に四せんまで喰ひけり。そば切りの代は四七二十八文、腰には錢十四五文ならではなし、如何はせ丶んとおもひけるが遂に惡しき思案を定め、亭主を呼び、酒やあると問ふに、如何にも御座候と云ふ。さらば二十四文ばかりがの出し申されよと云ひ付くるや、忽ち持て來るま丶、それをものみ、後に一ぜんの蕎麥切れ半分食ひ殘し、傍らにやすでと云ふ虫のありけるを幸ととりて、椀の中に入れ、蓋をなし、亭主を呼びて問ひけるは、此のあたりにはやすでと云ふ虫多くあるやといふに、はい、なるほど大分御座りますと答ふ。そのやすでなるものは殊の外くさくて且つ毒あるものなりと云へば、なるほどくさきものにて御座ると亭主の云ふに、そのやすで此の蕎麥の中にありたり。はじめは知らで食べたるが、見よ、此のそばに居りたるに甫めて心づき、おどろきてやめぬ。あな心ちもどしげなり。かやうの毒蕎麥喰はせてもよろしきにやとて、椀の蓋を取り、なほさま丶丶の惡口雜言し、はては蕎麥代一文も置くまじといふに亭主は少しも騒がず、さやうのわやは他所に行きて申されよ、此の店にてはやくに立ち申さずとおちつき切りたるに、かのものはいよ丶丶腹を立て、此の不屆もの、何を云ふ。今一言あらば其の分には置かぬぞと怒り罵るに、亭主はなほおちつき、靜かにおもての看板をさし、おれをば何と見られ候や、むしそば切りと書きつけたり。むしはありても苦るしからずやと云ふに、流石男も困じはて、言語も出でずありしが、亭主はうち笑ひ此の返答し給はゞ代價一錢も取るまじと云ふに、其の儀ならば、我等をば油虫に

し給へとて、歸り行きしとなり。

笠子笑談集

金津常十郎

道風の神勅

小野の道風若年の比、神前に一七日參籠して、書法を得ん事を願はれけれど、滿願の夜、夢ともなくうつゝともなく、白衣の神あらはれ、告て曰、汝書を能くせんと思はゞ、是より、自身、底まですりぬきたる硯千面を當社に納むべしと。告給ふと思へど、暫時の夢なりけり。夫より道風心を書に止めて、終におこたらず、年たくるに及びて、神約の如く、千面の破れ硯を奉納したまふ。これより道風天下に名筆のほまれを得たり。今にいたるまで、兒女子も其の名を玄らざるものなし。

註に曰、萬の願望の成就するは、成就する理あるなり。人々、皆、其の成就するを、向の神のなさるゝことゝのみ心得て、其の神は吾か胸中に在ことを知らず、ひたすら神は向に在るとばかり思ふなり。神様の方では、却て、人がてく〳〵遠き處へ拜みにゆくは、それ程願ひごとが隙どりて、遲くなるとて、殊の外神慮を惱まさるゝなり。手跡を上達せんと願をかくる人は、心日夜手跡にのみ怠らず。又劍術を上達せんと願ふ人は、劍術にのみ心を入れ。又金持になりたきと願ふ人は、晝夜錢金の利の事のみ怠らず。扨、又、何某の娘を妻にしたく思て願をかくる人は、ひたすらに其の娘を得んと思ふ心がある故、何でも立身出世して、終には成就する處へも至るなり。是皆、其の人々の怠らず、心がくる功が積りて、神様がなされて下されたことと思て、存じもよらぬ御禮物を神前へ納め奉れども、神は御辭儀もなされず、神様よりは結局神主殿が御悦なさるゝなり。それが、こぢくれ商人に、前銀やる心で、此の願が叶ふたら、石の鳥居して上ますの何のと、神様へ賄賂しかけてとてもいやとはいはれぬ仕方をして、もはや、吾が

手に握りたるものと心得て、それがもし成就せぬと、人間に云やうな恨言を吐き、神さまへ難をつけてのよまい言、されども、神様は人間心と違ひ、そんな賄賂ぐらいでびくともなされず、邪のない正直な者へ、御禮物は無ても願を成就させてくださるなり。正直者は、吾が胸中の神様が請合てござるゆゑ、外の神だちは安堵して手むなしなさらるゝなり。そんなこととも知らず、邪な者は、役人に賄賂して置きた心持で、寝て居ても只知行はとれると同じことと思ての仕形なり、そんな奴には、神さまが尻を嗅せてござらるゝと知るべし。あなかしこあなかしこ。

鬼門の崇

ある人家の傍なる木を切りけるが、程へて鬼門にあたる木なる事を人のしらせけれど、それより病づきて煩ひけるが、いく程もなく死にけり。其の隣の人ことの外借銭持にて、此くれはこねがたく、いかゞはせんと案じけるが、ふと思出しけるは、隣のれやぢは鬼門の木を切て、其崇が來て死なれたから、我も鬼門の木を切て死なむやと覺悟し、はや死ぬ心持にて、又はらく〱から錢をたくさんに借集めて、毎日飲食して樂み、それから鬼門先の榎をむつたりきり倒して、是でまづ死ぬはずと、安堵して、又例の錢の餘りにて酒のみて、はやそろ〱煩ふはずと、あたまをなでても、せめて頭痛のうつ沙汰もなきゆゑ、是ではならぬと、又々三年ふさがりへ邪魔したり、大小便すべからずの所へ小便して見ても、誠に聾に鐵砲なれど、扨は鬼門殿がれにくしみだそふな。

註に曰、人皆吾心より病を求るとは知らず、其の鬼門の譯もしらずして、ひたすら恐しきものと思ひ、此の方角に障れど殺さるゝことと心得、もし知らずして此の方にさはりて、跡より鬼門なることが知れたるときは、早崇があらうかあらうかと、自分の心に崇を拵ね、毎日其の崇か加増する故、終につもりて病となるから、猶々うろたへて、追付殺さるゝこ

ると思ひ、是から又死ぬ死ぬと云病を心に拵るゆゑ、程なく望の如く往生の素懐をとぐる物なり。彼借錢持は死ぬことを自身より覺悟してなすことゆゑ、心に一點の疑なし。それゆゑ、病となるべき種もなし種がなきゆゑ死ぬことは猶々なし難し。若鬼門ぐらゐで死なるゝものならば、河へ身を投たり、首括りたり、又は自殺したりする世話なことはいらぬものなり。是皆理を知らぬ愚俗が、とかく恐しい〳〵か病となり。自業自得で、吾が身を殺すなり。皆人が其の恐しがる鬼門と云は、方角に八卦を配ると、艮の卦があたる。艮は即ち丑寅なり。丑は牛なり。寅は虎なり。故に、傳教大師が工夫で、其の牛の角と虎の皮とを取合せ、扨又艮の方は東と北との間にて、即東方は陽、北方は陰なり、其の陰陽の間なれど、陰陽交激の理を以て、彼の牛の角に、虎の牙、及び虎の皮の褌を用ひ、扨其の交激にて憤怒の勢をなす形を拵へ、是を鬼の形とす。今世上に用る鬼の圖は、此の傳教大師の思出せしより始れり。さて亦、陰陽交て後萬物成生の理なれど、即ち萬物の始る門と云心にて、艮の方を鬼門と名付たり。もし傳教がこんな慰をせずに置くと、今以て鬼門に食傷する人もなかるべし。しかし、自分が病を拵へて死ぬことゆゑ是非なき次第なり。唐土にも日本の鬼門と同じき俗諺あれども、正東にて、日本の鬼門とは方角差へり。凡て東西南北、及び十二支など、是皆人事の爲に付たる名目なれど、もし其鬼門などの名を、人の拵へぬ以前は如何、以前は如何。

梅の下風（四）

白魚女史

木靜かならむと欲すれど、風やまずとかや。此處に越後の高田の城下をさる一里ばかりなる在に、傳吉とて所に、名高き孝子ありけり。祖父の世までは村の庄屋



役をつとめ、田畠もあまた持ちて、近郷のものにも立てられけるが、父の世になり、ふと災のりて、畠をも田をも失ひ、庄屋も其の親類のものに奪はれて、水のみ百姓となりし等の災重なりて、いつしか病にさへかゝりて、傳吉が十と云ふ秋、もろくも、木の葉と散り行きけり、幼なきより人にすぐれたる孝子傳吉は、たゞ悲しく、涙にむせびつゝ、やう〳〵村人に助けられて野邊の送りすませし後も、われ今少し大人しくは父君にかのやうなるあはれの最期はさせぬものをなど、さま〳〵思ひめぐらせど夜たゞ悲しくさねさゆる床、如何にもして母のみはやすく送らせんものとて、其のまだ夜の明くるもまたで起き出で、くりやのことは母に知らせず、こそ〳〵となしはて、山ぎは明くなるをまちかねて鍬かつぎては田に下り、夕べに近く歸り、歸りてもなほ足腰延ばさむなどの心はなはなく、藁取り出でては草鞋をつくり、繩をなひ、如何にもして母を安樂にさせんものと、小さき身体にあまる勞働、夜晝のくるしみをたゞ樂しみくらしぬれど、母ごらでも悲しき母心、世が世、時が時ならば、たつたひとりの子供、乳母よ護よとかしづき育てんものに、やう〳〵十歳、こままはしよ、たこあげよと、遊びに狂ふ年なみを嘆きも怨みもせず、くりやのことまでも此の母をいたはらんとする悲しさよと、つく〴〵身にしみて之もまた夜ねぶれずよなゞだもして、子を樂にさせんと息子が寢いきを伺ふほどに、彼方はとくそつと起きつゞけて起きんとすれど、母さままだ早し、己も今少しねぶたし、母さま起きては、まさかに寢ぶれもせねどとて、强ひてまた寢やに引き入れられ、此度はねくれず起きんものとわざとね入りしやうにして、子がねいきを伺へど、子もまどろまず、又やそつと起きる、われはどまでかぞうがいとしやと思はず涙の聲立つれど、母さん何が悲し、今に立派に樂にしまゐらせんに、もうもう何も思はでねて居て給はれ、とのやさしき言葉にいよ〳〵せきあへぬ涙をそつと夜具の内につゝみ、又わざと笑

ひとよみ、せめて心安堵してねぶりをまして子を安めむとするのみ、母子あれどなほ苦るしき樂しみもありけるよ。

傳吉はたゞ〳〵母をどやしなはん事のみを樂しみとすれど、母も子をやすめんため、今は中〳〵に働かずなげかぬを、子のためとして、いつしか、樂隱居の如く、心さへいつかのどけくぞなりはてにけり。げに白銀に黄金にまさるは子寶なるべし。さどかり養はんとする孝子、親もまた早く子も安樂となり、よき嫁をも迎へて、孫出でなど其の時にこそ背負ひつ、だきつ、人手にも父母の手にも去どしもかけず、蚊にも蠅にもつゆ血などすはせず、いたはり〳〵て、それがせめて息子への恩報じならんなど、長からぬ日を、ひとり長う、もう十年よ、五年よと親も待つに、天ひとりまたしめず、傳吉が十六と云ふ年、母は病にかゝりて、日々に重り行くに、傳吉は思ひ悲しみ、己れ飲食も口にせず、たゞ母が身に藥よ滋養物とて求めに求めてすゝめ、衣帶とかで看護すれど、母が病は中〳〵になとらず、最期と思ふ、背撫づる傳吉がかいなもまた朝影とどかりに疲れたるもあはれなり。

垣も秋の半ど、軒のはぎ、ともすれど、はら〳〵と音立つるに、母子顏合するもたゞ涙、げにひるまもなく、夕べはなほ更入相の鐘の音身にしみて床も身も沈みはてんずる思ひ、互に涙せきては、一去きりあふるゝ音の高さもあはれなり。

世にはまつ事なけれど、たゞ〳〵汝が家を起さん日を數へまちたる母は、もう父君の迎ひに昨日も今朝も、今もまたこされたれど、もうあすの日もはかられず、夫の迎へいとふにはあらねど、汝をおくが悲しく、又伴れんはなほ〳〵あはれに思へど、さのみはぐゝみもせぬ子に海山つきぬ孝養冥加とも幸福者とも言の葉は絶えてなし。かやうにはぐゝまれたる母は、此の處にはつるとも、思ひ殘す事は更らにあらじ。されどもそちが心はなほあかず、孝養のなほうすきを恨み悲しむら

んと思ふ。それがいとをしきのみ。又二つには孫が世話をも見で、汝が養ひをかへす事のならぬが悲しきのみ、惜しむはたゞ汝故、我は孝子が養をかむかりうけ、汝が孝子と人にほめはやされ、かつは家をも起さんずる心情をも見たれど、たゞ嬉しくもう思ひ殘すことは更に〳〵なきぞよ、必ず我を後にをしまれぞ、をしむさまの今の目に見ゑてそれが悲しとて、傳吉が疲れしさまをうち守りて涙にむせべど、傳吉はたゞ悲しく、何の答へも力もなくたゞまろひなく音の通ひてか庭の玉笹も身をふるはしてはら〳〵と露おとすもあはれなり。

母は又や涙をぬぐひ、生きてかむかり孝養うけたるに死してまた事云ひおくも、如何に親とてあまりなれど思ふ事孝子に云はぬも又慈ならねど云ひおくなり。そもわが里もと庄屋なりしが、子と云ふものは我とはやと云ふ妹との女子むかり、我れ長女なれど家つぐべかりしを、母たがひをりて妹におとをつがせまほしうするに妾もゆづらんと思ふ折りから幸ひ、此方の家にて妾を懇望なりしもをかしきゑにし、後妹は家をつぎ養子を取りしかど、身持あしう他の男と家出して家は斷絶、妹は如何になりけるや、たゑて音づれもなく、我も義理ある妹なれど、一入尋ねもやらんと思へど、身も此のさまの身となりをれど、心にかけつゝも、今日まで過しぬ。もし、御身が長き行末、その妹にめぐり逢ふせもありて、おちぶれもをらむ、我れと思ひてはぐくみても給はれ。さもあらむ草葉のかげ返す〳〵もうれしうなむ、との言葉、傳吉ははじめて聞きゝし事ながら、おどろくひまもなく、たゞはい〳〵と首づき答ふるのみ。母はなほ涙ながら傳吉が背を撫で、傳吉たのむぞ。必ずやつれはてゝ、わがあとを追ひてたのみ甲斐なき身となりそよと、其のまゝつかれてや眼を閉づるに、傳吉はうちおどろき、母さん〳〵と驚きすがる窓には秋風の音かなしく尾上の鹿も遠くむせぶが如くなり。



文林

海邊郭公　東久世通禧

住吉のうらのゆふなみうちなきて
まつ原とほくなくほとゝきす

社頭郭公　高崎正風

初音をや神にたむくるほとゝきす
ことしもはやしうふすなの杜

船納涼　前田利嗣

のむ酒もたちまちさむる心ちして
夕へすゝしきふねのうちかな

晴後遠望　津輕承昭

雨はれしすみたかはらの遠かたに
けふりたなひく橋場あたりか

雨後新樹　風早公紀

ゆふへより降つゝきたる雨はれて
若葉のつゆにあさひさすなり

夕烟　諏訪忠元

入相のかねもひゝきてやまかけに
たえ〳〵なひく夕けふりかな

月前待郭公　宮地厳夫

月ははやのきはの松にかゝりけり
やまほとゝきす一こゑもかな

池梅雨　阪正臣

さみたれに池のまこもはみかくれて
くひなもなかす成にけるかな

河梅雨　小出粲

せにかふる心になりぬさみたれに
年としわふるかはつらのやと

遠郭公　大口鯛二

ほとゝきすとほき空にてなく聲も
さやかなるまて夜は更にけり

夏朝　岩崎勝從

起いてゝつゆにぬれたる庭みれは
かせなき朝もすゝしかりけり

雨中友來　植松有經

五月雨の空こそはれねさわやかに
こゝろはなりぬ君とかたりて

樹陰泉　遠山英一

わくとしも見えぬ木陰の岩しみつ
苔のしつくのたまるなりけり

新樹　下田義天類

風かをる四方のみつ枝に比ふれは
花もゝみちもいろなかりけり

古寺雨　三輪義方

しめやかに小雨けふりてれは寺の
うてなは人のかけたにもなし

伊勢大輔　佐々豐水

おをによしならの都のはなよりも
よにかくはしきこゝろなる哉

忠婢れさん　仝

長門のや森のれは木のかけきよく
つれ野の恥をすゝきつるかな

夜郭公　草野隆道

寢覺してうれしきものはほとゝきす
初音きゝつる夜半にさりける

河邊新樹　足立正枝

隅田川おをはのかけにさをさして
花のおとゝふ船もありけり

狐　宇井正夫

風まじり雨ふるきつね啼くよひは
もの思ふ空もさひしかりけり

樵夫　木庭芳香

あさな〳〵しら雲ふかくわけいりて
なけきこる身は老にけるかな

盆石　安齋篤敬

砂をもり石をならへしやまとかは
こゝろかまへの跡も見えけり

山新樹　伊東祐寶

やまさとははなの白雲おとたえて
しける若葉のかけくらきかな

岸上藤　近衛貞子

山ふきのうつろひはてし川きしに
さきかはりたる藤なみのはな

谷新樹　鍋島榮子

しけりあふ木々の青葉に包まれて
有りともみえぬたにのした庵

梅雨晴　前田朗子

さみたれの晴て今宵はめすらしく
月のかけをも見いてつるかな

田上螢　小池道子

稲つまもまたほのめかぬ小山田の
つゆをてらしてとふほたる哉

暁旅行　松平健子

さしくしのおかつき月夜空に見て
知らぬ野山をゆくたひちかな

河納涼　中島歌子

河風はふきもふかすもすゝしさは
うかへる月を見る夜なりけり

納涼風　遠山いね子

燈火は消えたるまゝにはしゐして
つきまつほとの風のすゝしさ

夏露　北島以登子

朝またきにはのしはふにおく露を
ふむこゝちよき夏はきにけり

夏夢　土岐幾子

風わたる清水のもとのうたゝねに
すゝしくわたる夢のうきはし

隔山聞郭公　中牟田常子

ほとゝきすやまのおなたに鳴聲を

思はすこゝにきゝてけるかな

聞郭公　常磐井文子

卯のはなのさきいてにける岡のへに
やまほとゝきす初音なくなり

待郭公　原田蒼生子

うのはなの月の夜ころになりに鳧
山ほとゝきすひとこゑもかな

樹陰水　服部磯子

吹かせのれときくたにも涼しきを
しみつなかるゝもりの下かけ

川邊螢　安東菊子

川そひの里はのめきてよるひかる
玉とみきはにとふはたるかな

歎病發思歌　七十六翁　藤井行麿

空蟬の　世のうきふしは　空がそふ　れはにしあれど
人みなの　いたつきぞかり　わちきなく　うれたき事

は　石つぬの　またしもあらず　かくてわれ　とし月
長く　足腰の　たゝぬやまひに　外にも出す　内にこ
もりて　うち伏して　なげかひをれは　なぐさむる
こゝろもあらず　ねぬなはの　音のみしなけど　日月
年　たつにつけても　ひとりかなしむ。

池邊義象ぬしを送る　下田義天類

みづたまる池邊の君　魂あへるはしき吾がせが　わた
の外の日の入る國の　佛蘭西の波理斯のさとに　はろ
〴〵にまかると聞きて　思ふこと一言申さむ　君が行
く國の先々　學ぶべき事はありとも　習ふ可き業はあ
りとも　そこをしも取る可き人は　我が國に猶こそあ
らめ　我がせこに我が望まくは　それをしも見よとに
非ず　そこをしも聞けとに非ず　年まねく君が窮めし
一筋の世繼の姿　もはらなる國の手振を　まつぶさに
彼に教へて　彼の國の爲をもはかれ　是も亦日いづる
國の　御民等が遂に取るべき　わざにしあるらし。



雑報

●御製の御事　天皇皇后兩陛下の御歌にも、長けさせ給ふ御事は、今更に申さんもかしこし。さて天皇陛下、御位につかせ給ひてよりこのかたの、御歌數は幾十萬がほどなりといふ。今も、午前六時より御學問所に、出御せさせ給ひ、萬機をすべさせ給ひながら、日毎に、三十首、もしくは三十五六首づゝは、よませ給ふとなむ。大御心のほど、仰ぎ奉れども、はてしもおはしまさず。

●大祓　去し卅日は、古來、夏越の祓する例なるに宮中にても、その式を行はせ給へり。およそ日本國中いづこのはても、みなひとしく之を擧行せしなるべし

●御衣かへ　兩陛下には、去し一日より、夏の御服にめしかへさせ給へりとぞ。

●英香梅　といへるは、英照皇太后陛下、御世におはしまし〻ほどに、青山の宮の御庭に植ゑさせ給ひて愛で給ひし梅なり。幹は三尺ばかりにして、枝毎に苔むし、はなびらの大さ、よのつねのに倍せり。陛下かくりまして後は、もと皇太后宮職をつかさとして御園の御守につかへ奉りし鷹林某に賜はりけり。某、これを我が園にうつして、陛下につかへ奉るが如く、おほし培ふこと、おろそかならざりけれど、去し春も、時をたがへず咲き出でたりしが、このほど、實、數多を結べりといふ。されど、某も、こを採りて、陛下の御靈の御前に奉りて、神靈をなぐさめ奉れりとぞ。

●故北白川宮　殿下の御心を、ゝしく〱まし〱て、かつて、しぞ〱御身を硝煙彈雨の間におかせ給ひ、遂に臺灣討伐の役にかくれ給ひしは、去し二十八年のことなり。かくて、さきつころ、宮の赤坂の御殿に、宮内官、征臺の諸將をはじめ、故殿下に奉仕せし人々、打

ち集ひて、れはしましゝむかしを偲び奉り、御績を繼へ、御慈を忝なみ合ひけるが、この日、琵琶師、家弓熊介氏をよびて、宮の臺灣入の一曲を彈せしめけり。さて、征臺中の雄ましかりし御ありさまより、かくれましつる哀しさまで、目のあたり見奉るが如くに、語りけれど、御息所、王子、王女殿下をはじめて、ありあふ人々、みな、ありし昔にたちかへりし心地に、せきあへぬ涙、はふりれちて互に袖をぞうるほしけるときくがまゝを、かきつけつゝ、我が眼も、涙にうるみて、筆のあともたしかならずなむ。

●宮相の近詠　田中宮内大臣は、日夕、省務に鞅掌し、日曜日ごとには、小石川關口臺町なる芭蕉庵に入りて、靜に心を養ひ、吟咏を事とすといふ。左の二首は、その近詠なりとぞ。雅趣愛すべし。

何事もたらぬがちなる山里の
　かけひに餘る水の音かな

打ち渡す駒とめむしの夕まぐれ
　ところながはに轡むしなく

●文部省の國語學調査　本邦當時、國語學の統一をかぎ、爲に、大中小の學校教科書も一定せず、愈、復雜に赴き、且、多岐分裂せんことを憂ひ、取調委員を設け、なほ、折々國語學者をも召集して、諮問會を開き、其の一定の方針を定むべしといふ。人もとより神妙不可思議なり。言語も亦、靈妙を極めたるものなり我が國語ことに然り。願くは、いよ〳〵この靈をたづね、妙をひらきて、大に活動せさせまほしきものなり。

●第二高等學校豫科　ことし九月より、大學豫科第三部の授業を開始すべしと。これはきくがまゝなり。

●尋常中學校數　近來何地にても增設せしに、愈、盛大に赴けり。誠に慶事といふべし。これに入りて業を受くる子弟は、みなこれ、日本魂をみがき、世界の知識を綜合して、やがて、内にしては、我が皇の天業をたすけ奉り、外にしては、大に國威を宣揚すべき大

任を帶びたるもの。希くは、其の些々たる小人に類せる卑行をすて丶、大に寛大の氣を養ひ、以て我が祖先の英靈に答ふるを期せよ。

北海道	二	東京	三	京都	一	大阪	六	神奈川	一
兵庫	六	長崎	一	新潟	五	埼玉	二	群馬	一
千葉	一	茨城	一	栃木	一	奈良	一	三重	一
愛知	三	靜岡	三	山梨	一	滋賀	二	岐阜	四
長野	一	宮城	一	福島	五	巖手	二	青森	二
山形	三	秋田	一	福井	三	石川	一	富山	二
鳥取	一	島根	三	岡山	一	廣島	四	山口	一
和歌山	二	徳島	一	香川	二	愛媛	一	高知	二
福岡	五	大分	二	佐賀	二	熊本	一	宮崎	一
鹿兒島	一	沖繩	一	（合計一〇〇）					

●府縣立高等女學校數　中學校すでに、其の數を增せども、なほ足れりとも すべからず。さるを府縣立高等女學校に至りては、全國中、鐘大鼓にて、さがしもとむとも、左の十五校の外はあるべからず。歎くべきなり、なほいよ〳〵資力を養ひ、計策を講じて、增設を計らまほしきなり。かの外來の宗教者を見ずや。たとへ子女教育の外に、一種の希望のあるありとも、遠く來りてもなほ、辛苦經營して、これらの學校を設立するにあらずや。日本神州の子女の教養を此等外人の手に委ぬることの、結極益なからんは、いと見易き理なり。よそごとに見て過すべけんや。我が同胞士女よ。或は公に、或は私に、大に爲す所あれよ。

東京	京都	大阪	奈良	名古屋	彥根
長野	仙臺	米澤	福島	靜岡	福井
松江	高知	久留米			

●横濱高等女學校設立建議　去十九日、横濱學校長三島豐太郎氏は、市の教育會にて高等女學校設立の必要を說き、維持は、授業料を以て支辨すべき計畫にて、その設立費の支出を市に建議せんとて、委員を撰びて、調査せしむときく。一日もとく其の成功を見まほしきものなり。

●高等女學校生徒の同盟　よき事ならで、よきはいふまでもなし。されどよからぬと覺ゆることに同盟すと聞ゆるはうたてし。國は江州、地は大津の高等女學校にて、さきつころ、男女職員の間に、教授上意見の衝突ありしに、生徒は、男教員に贊成するもの多く、中

には、女教員某の教授は受けじとて、同盟せるもありと聞く。教授上のよしあしは、生徒ならでも、他に自ら定むるものあらん。聞くが如くんば、これ柔順の德をかぎ、師弟の義を忘れたる出すぎものといふべし。よく思ひ、よく改めて、自ら其の非を悔いよ。智ゆたかなりとも、德なくばはた何かせん。

●夏季女子講習會　前號廣告にかゝげしが如く、東京府教育會にては、來る七月廿五日より、翌八月十四日に到るまで、三週日が間、神田橋外なる東京府高等女學校内にて、女教員、或は一般女子の爲に、左の學科の講習會を開くべしといふ。女子講習會のさきがけなり。

(講師渡邊政吉氏)家政學附保育法(講師後閑菊野氏)
裁縫教授法(講師谷田部しゅん氏)

●小學生徒を質素に導く　は、まづ急務なるべし。身分に應じたるは、さてもあるべし。家豐ならぬに、子の求むるがまゝにして、親は子故の暗にまどひ、遂に浮華を將來に流さんは、おのが子孫のみか、ひきて、國家にも影響すべし。之をすくはんは、教育者の任なりとはいへ、また家庭にして、重に此等の衝に當る母たり姉たる婦女子の務かろからずとす。深く思ふべきなり。さて、此度、新潟市長は、市學務委員會に、生徒風儀矯正の方法を諮問せしに、やがて答申を得て、左の如く決定し、教員と父兄とをして、勵行せしむべしといふ。世の婦女子宜しく鑑る所あるべし。

抑々小學校は教育の根底にして風俗の良否實に此に因源す故に校内の教訓と家庭の薫陶は相待て國民の良風俗を養成せざる可からず今や質素勤勉を旨とし小學生徒の衣食日用品具の標準を一定し以て現今滔々奢侈を競ひ汚行に陥り遂に國家の困弊を馴致せんとするの流弊を防遏矯正せんと欲す即ち其要項左の如し

一　小學校生徒は平素は勿論式日と雖も左の各項に準據すべし
イ　用具は實用を辨ずるに止め高價の者を用ひざるを要す
ロ　衣服類は不得已部分(半襟袖等の類)の外絹物を用ひざるを要す
ハ　履物は表付を用ず草履は木綿緒麻裏を超へざるを要す
ニ　辨當は常食を超へざるを要す
ホ　女生徒の髮飾は華美高價の飾髮を用ひざるを要す
ヘ　飲酒喫煙を禁嚴するを要す

●太田裁縫學校　といへるは、茨城縣、水戸市、上市、上金町にあり。校主は、太田梅と云ひて、同縣、新治

郡、石川村の人なり。先に、東京裁縫女學校長、渡邊辰五郎氏の門に入り、研精多年、卒業の后、群馬縣、高崎町に、裁縫學校を開設せしが、後、茨城縣小學校裁縫科の教授法の振はずして、他の學科と相伴はざるを憂へ、寧ろ、力を父母の國に致さんとて、去し、明治廿八年、十二月、今の學校を開設せしなり。さて、普通女子には、普通裁縫の術を教授し、副科として、脩身、禮法、和歌、習字、數學讀書、家事經濟、點茶、生花、彈琴、押繪、縫取、編物、造花、料理法等を授くといふ。かくて、又、小學校裁縫教員を養成せんが爲に數回、講習會を開きしが、業を卒へて、各校に就職せしもの、皆、結果宜しくして、爾來、各地より採用を望むもの尠からず。なほ今回、甲種（七月　日より起り八月三十日に終る六十日間）生は乙種（八月一日より起り同三十日迄）生とも、講習修了の上、成績佳良のものには、小學校裁縫專科准教員の免狀を授與せらるべき特典を與へられしかば、其の募集に應ずるもの亦、尠からず。さて、この乙種は、講習の時日、少きを以て、講習の前後、六ケ月以上、公立小學校の教員屐に従事の履歴を有する者に限るといふ。かくて、明治二十九年、第一回の講習會已來、已に脩業證書を授與せしもの、二百余名にして、教員に従事する者百余名の多きに至れりと聞く。

●中國女學　といひても、我がにはあらず。常世なる上海女學校の名稱なり。さきに、設立計畫中なりしことは、前號に掲げたりき。こは、道臺嚴信厚等が、計畫に成れるにて、既に去し三十一日開設せりと聞く。なほ進みては、「女學報」といへる雜誌をも發刊すべしとぞ。中國女學よ。自愛せよ。汝の國の、よからぬをば、捨つるに吝なる勿れ。汝が國の、よきを保ち養ふに怠る勿れ。他の國の長をとるに、勇ならざる勿れ。さて、大に磨き、大に養ひて、碧眼赤髯の侮をすゝぎ、はたよく我が東洋の面目を施す基を固めよ。只管屬望にたへざるなり。

●不良兒童の原因　なりとて、東京感化院にて、感

化生によりて、調査せしものなりといふを見るに、左の如し。誰か我が子を惡かれと願ふものあらん。誰か我同胞の惡からんを願ふものあらん。はた又、たゞの一人にても我が國民を惡かれと思ふものあらん。父母たり、兄姉たり、同胞國民たるもの、いましめずして可ならんや。よし國体はもとより、よかりとも、勝れたる國民多からずんぜ、いかでかも、國威を輝すことを得ん。直に、子女教育の任に當るべき婦女子はことに大に心すべきなり。

不良の原因	百に對する比例
愛悄の過度より生せしもの	二七、二
冷淡の養育を受けしもの	三〇、八
苛酷の養育を受けしもの	四、一
遺傳の不良と認むるもの	七、二
妾腹に生れしもの	三、一
生母の行状不良なるもの	六、二
不良の朋友に交りしもの	六、二
風俗の不良なるもの	二、〇
原因未詳のもの	一三、二

●貞婦　肥前の國、佐賀市に住める野口某といへるは、豆腐をひさぐを家業とせるが、もとよりゆたかならぬが上に多年の間、肺撚症になやめるを、妻のよし女、ひたすら病夫を看護し、二人の幼児を養育しながら、夫に代りて家業をはげみ、始終怠なしといふ。感ずべき妻ならずや。◎又、大分縣の人、黑吉某は、中風病をわづらひて、足腰もたゝぬを、妻のしわ女、看護怠なく十年一日の如しといふ。これもいと感ずべし。

●豐年の兆　とて、むかしよりいひ傳ふるが中には、さま〴〵あり。今、岩手縣、上閉伊郡下閉といふ處の河野某が苗代なる、早稻苗七寸もかり延びたるに、穂いでゝ、籾四粒をつけたりとて、古老皆、豐年の兆なりとて、喜びあへりとぞ。

●生徒の美擧　鹿兒島縣、某郡、吉野小學校にては、修學旅行費の爲、または、有益なる事業に、義捐せしめんが爲に、茶の實を拾はせ、之を賣りて貯金せしむといふ。こたび南洲翁銅像建設費の中にも、これより義捐せしと聞く。

●あらずもがな〳〵。岐阜縣、某郡、小學校に、白金巾の兵兒帶をおび、いと短き袴をうがち、かてゝ髮は斷髮なる裁縫敎員ありと聞く。男敎員ならば、まづとかくはいはじ。これ女敎員なりとは、あらずもがな〳〵。

●朝鮮人の求婚　我が國にては、おはむかしより、よき血統を撰みて、妻をめとるがならひなり。唐人は、妻をめとらんには、須く貧家よりすべしといひ、後には、我が國にも、『妻は木じりよりとれと』いへる諺もありて、相似たる處もあり。さるをこのごろ、朝鮮元山時報といへるに載せたる求婚廣告を見れば、いはく、『借金あり資產なし妻たらんと欲するものは持參金ありて美貌なるを要す』といへり。よく思へば、これ朝鮮人の氣象をよくうつせるなり。おのれ家まづしく、借金をさへつくりながら、かほよき妻をめとり、その上に妻によりて、金を得んとす。其の私慾ふかく、腑甲斐なさ、歯もうくばかりなり。さて、金もし盡き、かほかたち衰へなば、捨てもかねまじきなり。かゝる國民多ければこそ。他をのみ賴みて、或は、大國におもねりて、支那にたより、或は、又、露西亞にもよるなるべけれ。かゝる奴ばらは、東洋人の面をけがすものなり。もし之に應ずる婦人ありて、結婚すといはゞ、祝の心ばかりに和歌一首を呈せん。

韓人は妻にたよりてたゝんとす
腰のよわさの限しられず

●東京府下の肉食額　なりといふを聞けば、左の如しといふ。これによれば、日毎に九十頭づゝを食ふ割合なり。一ヶ月にて算すれば、

牛肉	四十七萬二千六百八斤
馬肉	十二萬四百廿一斤
豚肉	十萬四千四百四十六斤

又、十五區八郡にての乳牛數、及、一ヶ月の搾取高は、

乳牛	三千四百十六頭
搾取高	二千百石一斗

この價金　八萬四千圓四十錢　（一合四錢の割）

●乳癌と食物との關係　このごろ東京府下にては、婦人の乳癌をわづらふもの數多くなれるが、この原因をたづぬるに、重に食物によれるなりといふ。さるは、哺乳婦の營養物、ことに肉類を多量に食するは、母体の精氣を保ち、かつは、嬰兒を十分に哺育せしむる功はあれども、癌疾をひき起す害もまた之が爲にして、健康ならざる婦人など、餘に肉食を多量にして、爲に、乳汁の分泌を妨ぐるによりて、この症のもとゝなるなり。ことに、この肉食は、中等以上に多く行はるが故に、この病にかゝるものも、亦、此等の婦人に多くして、たとへば、流行病の如き赴ありといふ。これを豫防せんには、適宜の菜食をするをよろしとすと聞けり。

●梅の實の中毒　いつもよくあることなり。親たちは、よく〳〵注意せらるべし。盛岡市にては、少年少女の未熟の梅を食ひて、その中毒の爲に入院せるもの七人ありといふ。

●子守車　また乳母車ともいふ。籐にてつくれる小き車にて、小兒を乘するものなり。近年これが流行盛なるに、よくたゞせば、まづ二人ありし下女一人を減じて、母みづから之にかはりて、子守するに便なるが故なりといふ。これも物價の騰貴せるが爲なりといふ人もあり。さもあるべし。

●遞信省の懸賞意匠募集　これは、郵便物配達の遲延を憂ひてなり。賞金をとらんとらじは、まづしむらくれきて、婦女子は、家にありて、多くこれらの事にたづさはり、かつは、意匠にもすぐれたれば、工夫をこらして、世の公益を計らんは、たのが任の一なるべし。其の趣旨、及、募集事項は、（委しくは六月二十四日の官報を見よ）

郵便物配達の遲延には諸種の原因あるべしと雖も適當の受函なく且合圖器の設けなきを以て門戸を敲き門前に呼び家人の出づるを待ちて之に手渡するが如

き不便あり爲に毎戸にかゝる手數を要し配達人が受持區を終るまでには非常の延引を來すによる。之が改善の策を講ずる第一着手として、受函及び合圖機の意匠を募集す。構造簡易にして安價に且本邦の家屋に適し一般に行はれ易きもの。一等賞百圓、二等五十圓、三等三十圓、受函合圖機共に優等なるものは此倍額を給す。募集期限は來る九月十五日迄なり。

●修正の民法　民法修正案（親族、相續の二篇）は、こたびの帝國議會を通過し、去し六月廿一日（火曜日）の官報號外を以て、公布せられたり。戸主、家族、婚姻、離婚等の注意すべき諸項あり。實施の日も亦近きにあらん。就きて熟讀し置くべき

●心の華記者に謝す　本誌講義録につきて、此の頃心の華記者は懇切なる注意を與へられたり。記者に對して篤く其の好意を謝し、合せて將來一層の反省を加へむことを約す。然れ共、源氏物語につきての我が社の見解は、記者と聊相違する所なきかを疑はざることを得ず。世間に源語を排斥する論者中には、往々に未五十餘帖を一讀したることもなくして、曾て時勢に激せられたる慷慨家の言論を其の儘に請賣し、源氏といへは、恰も爲永春水流の人情本などの如くに盲想するものありときけり。心の華記者のごときは、決して此の儔類にあらざることを知る。記者は、其の美を知りて其の醜を厭ふ者、始めて共に源語を語るに足るべし。然れども、源語を目して裸体畫に比し、また演劇のぬれ場に諭へられたるに到りては、頗怪まざることを得ず。蓋、これ、源語を排斥せむとする熱情より、識らず知らずかゝる酷評を下されたるものなる可けれど、かくては彼の喰はず嫌ひの論者と伯仲する感なくんぞあらず。彼の源内侍の如きすきもの、若くは木枯の如き輕薄女は、源氏物語を讀むもの、誰かこれを爪彈きせざるものあらむ。空蟬の貞操なる、朝貌の堅固なる、末摘花の篤實なる、夕顏の柔順なる、その足ら

ざる所は作者悉くこれを冷評して、其の取るべき所を賞賛したるが如きは、かへりて女子の參考とはなるべきも、讀みて害を流さむとする嫌ひの如きは、それいづこにか有るべき。その外藤壺の中宮の事のまぎれを生じたる、六條の御息所の空閨を守り兼ねたる如きは、此の物語中にあらはれたる女子としての瑕瑾なる可けれど、これ等は嚴しく筆誅を加へて、讀者をして慄然たらしめたる所なり。紫の上の如き、あかしの君の如きは、寧女子たるものゝ標本としてかき出したるものにあらずや。女子の爲には教誡の一とはなりぬべけれど、これを讀みて害毒を流すべき懸念は、源語中それいづこにかあるべき。されど、これを教訓書としては多少の批難すべきことなきにあらざることは、講師が其の始めに於きて委しく論じ置きたるが如し。唯一部の文學書として、即中古文の文範として、本誌にこれを掲げたるのみ。彼の中世堂々たる男子が、この書に心醉して世務を忘れ、武事を怠り、婦女子の態度をよろこびたる光源氏、若くは匂ふ宮の類の擧動を欽慕して耻ぢざるに到りしは事實なり。かくの如き風俗を造り出したるは、これを讀むものゝ罪なりといへども、吾人は、大に此の源語の流弊なりとして指彈せざるを得ず。心の華の記者足下、あやぶむことなかれ。源語中、裸躰美人を見るが如きことは絶ねてその痕跡をだに見ざる所なり。但、宇治十帖には、記者のあやぶむごときことには非らされども、聊注意すべき所なきにあらず。其の邊は、謹みて記者の忠告を參酌すべし。終りに臨みて一言云はむ。心の華記者は　圓融花山の時代にあきたらざる所あるより、其の時代の作にかゝれる此の物語をあきたらずとするよしに論せられたり。若果して然らは、記者は、戰國沒倫の間に作れる孔丘の春秋、南朝窮蹙の時代に成れる准后の正統記等をも、時代にあきたらざるが爲にこれを捨てむといはるゝか。吾人は源語を以ちて、春秋、正統記等に比せむとするものには非らず。されど、時代によりて

其の書を捨てむとするものは、吾人のまた其の忠告を甘受し難き所なり。芻蕘の言も捨つ可からず、人によりて言を捨てざるは先哲のいましめなり。況むや時代をや。その懇切なる忠告を感謝せむとするあまりに、聊吾人が見る所をしるして心の華記者の一粲に供す。

●新刊書しなさだめ

○高等小學女子書簡文　石川正作著　東洋社發行

小學生徒のみならず。普通女子にも共に參考として、よきものなり。開卷第一に書簡文の心得をとき、本文には、報知、勸誘より雜の部まで、十二部に分てり。さて作例すべて百個をあげたり。(價金二十錢)

○日本書通信習書帖　東洋社内　日本書通信習會發行

これも、書に志ありて、師に乏しき者の爲には、大に便あるべし。まづ書につきて、古今の逸話、講師の講説をのせ、卷末に、習書臨本數葉のものを附せり。(會費一ヶ月金三十錢)

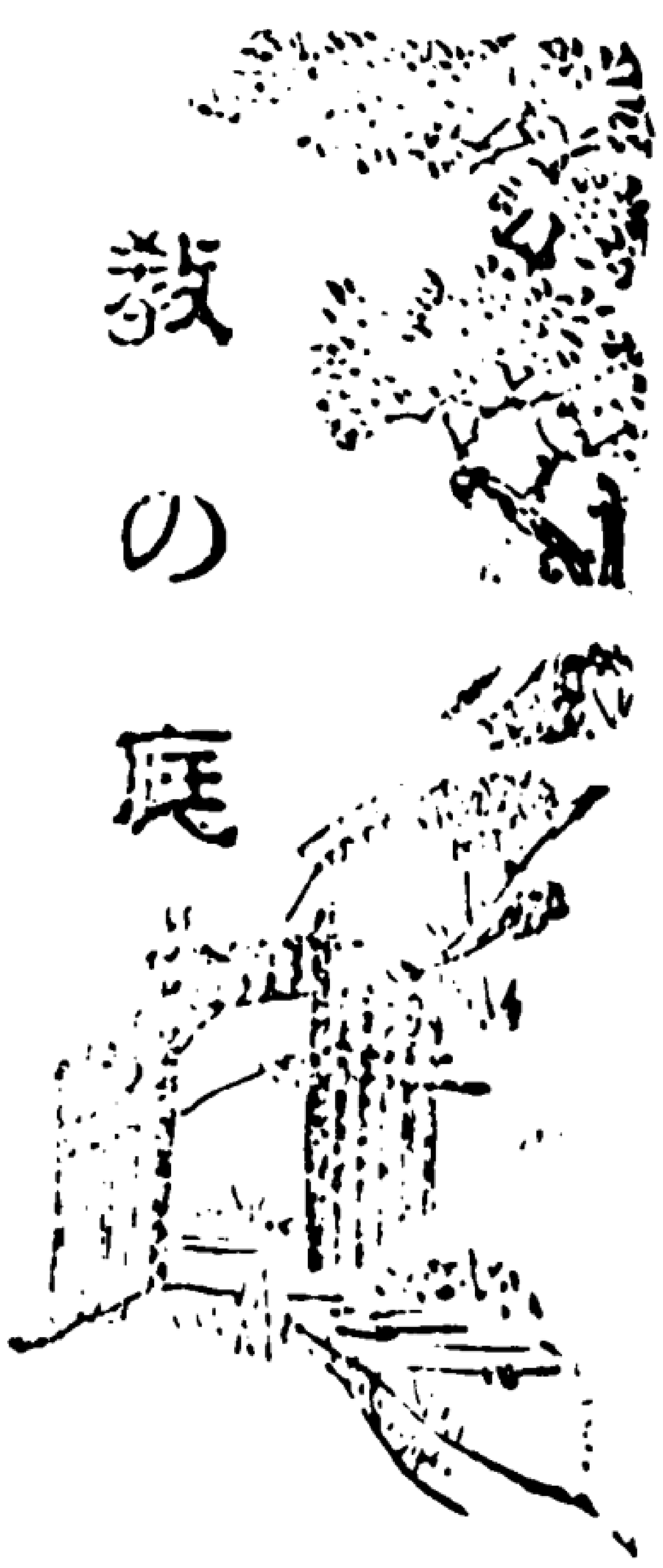
○新體詩集 月の桂　鐵幹外數人　中學書院發行

一口に申さむ。玉石混淆のものなり。よきはもとよりよく、あしきはもとよりあし〻。大家には、黑川、本居、飯田、物集、諸先生をはじめて、小家の、鐵幹に至る。しかして、玉と玉との間に、石をはさみおきたるいよ〳〵みにくし。鐵幹の作多くは石なり。おのづから心の底も見えすきて、賤し。これらは、其の醜讀むに堪へず。(價金十五錢)

◉女鑑歌文月並兼題

七月廿日	歌	新田義貞公	七月十日〆切
	文	友人の病氣を其近親に報ずる文	
八月五日	歌	百合花	七月廿五日〆切
	文	瀧の書を見て	
八月廿日	歌	朋友	八月十日〆切
	文	山遊び	

歌文原稿は必〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。



敎の庭

七月五日發題　夏泉

天

わきいづる清水に秋ややどるらん
むすぶたもとの夏としもなし　佐賀市與賀町　穗積稔子

地

秋風やかよひきぬらんなつながら
すゞしさあまるやまの井の水　肥後國菊地郡城北村　徳永萬壽子

人

繁りあふ草かきわけていさくまん
夏わすれ井のきよきいつみを　栃木縣下都賀郡富山村　白石藤子

秀逸（二十首）

梢ふくかせのすがたのすずしさを
うつしてきよきなつのましみづ　石井豐子

あらかねの土もさくてふ夏の日も
しみつのもとは涼しかりけり　石井信惠子

音きくもすゞしかりけりなつ山の
いわねをあらふ谷のましみつ　永井さい子

岩まよりわきいつる水の清けさに
むすはぬ袖もすゝしかりけり　吹田たけ子

たちよれはいとゝ涼しき眞清水に
松ふくかせもおもはさりけり　住山幾子

しばらくは夏てふことも忘れけり
出るしみづを手にむすびつゝ　三谷きみ子

風わたる木の下かけのいはしみつ
むすふそてには夏なかりけり　大坪修子

涌き出る岩間の清水むすひあけて
なつをもしたしわすれける哉　武田粲子

わきかへる泉のもとはなつながら
早くもあきのこゝちこそすれ　吾妻ちか子

夏をさへわするゝはかり涼しきは
この山かけのいつみなりけり　諸井久良子

わきいつるいつみの水の涼しさに
早くもあきのこゝちこそすれ　山根久子

あすもまたきてや掬はん夏なから
あきかせかよふやまの井の水　長松かね子

わきいつる岩井のみつの音きけと
むすはぬさきに夏そわするゝ　林あさ子

家つとになさまほしきは夏しらぬ　大海原芳子

この山かげのいつみなりけり

たちよるもすゝしき岩の岩しみつ　青木たま子
むすはゝあきの風やかよはむ

立ちよれは夏のよそなる心地して　佐々小琴子
あつさをあらふいはしみづ哉

むすふ手のいとゞ涼しく覺ゆるは　長洲餘野子
夏もいつみのそこやこほれる

つぬさはふ岩まかくれのいはし水　淺井靜子
人にくまれてなつや志るらむ

松影のしみつかもとに立ちよれは　岡山それ子
夏もよそなるこゝちこそすれ

たちよりて掬はぬ人はなけれとも　久間春子
たえぬいはねのこけ志みつ哉

(以下原稿到着順)

わきいつる杉檜かもとのいはしみつ　溝口貞子
あつさはさらにわすられにけり

堪へかぬるあつさもいまは忘れけり　堤　彬子
わきてなかるゝきよきいつみに

風やさすさきはのまつのしたかけに　野口信幸子
わきていつみのなかれすゝしも

あつき日にならすあふきの風よりも　田代蹈子
すゝしきものはしみつなりけり

松かけにわきてなかるゝいはしみつ　田代綾子
むすへはなつもわすられにけり

まつかげのいはもる水のすゞしさに　樋野りよう子
なつのよそなるこゝちこそすれ

しけりあふ松のもさなるこけしみつ　谷口なほ子
あつさもしらてむすひつるかな

岩しみつなかれなかれてまつかれな　仁保甚子
めぐるもすゞし今日のあつさに

わきいつる岩井のみつにこゝのみは　高島壽子
なつのよそなるこゝちこそすれ

なつしらぬ山まつかけのいさらみつ　曾山みち子
いさゝはこゝにいほむすひてん

なつこたちしけりしてすゝしきに　木村絲子
いはもるみつのこゑそ身にしむ

なつやまの木立しけりてすゝしきに　楢　楠子
いはまもれくるましみつのおと

おくやまは夏ながらましまつかけの　島田好子
しけれるもとにしみつながれて

なつやまのいはまの清水さめくれは　中島房子
むすはぬさきにすゝしかりけり

堪へかぬるなつのあつさを流しけり　西村登羅子
しけるこたちのましみつのおと

なつやまの青葉をめぐるきしみつは　木村若子
くむもすゝしきこゝちこそすれ

汲む人のまれなるほとそ知られける　溝口直子
なつのみやまのおくのましみつ

暑き日もいはもるしみつ手にくめは　町田勤子
なつのあつさもうちわすれけり

わきかへるしみつに動くなつやまの　野田千代子
しけみのかけそあつさわするゝ

立ちよれはあつさもよそになつ山の　松原常子

いはまのしみつすゝしかりけり

なつこたちあつき山路をたとれとも
しみつなかれてすゝしかりけり　吉川國子

たちよれはころもて寒きなつやまの
しみつのおとそすゝしかりける　水島巽子

夏の日のうれしきものはおくやまの
いはまにわけるいつみなりけり　成田延子

なつやまの五百津岩むら木かくれて
たつるいつみのおとそすゝしき　神田樂子

なつはたゝいつみなかるゝおい松の
かけをたよりに日をくらさまし　西村芳子

さらぬたにすゝしかりける箱根やま
おとさへすみてわくいつみかな　高橋信子

立ちよれはなつとすゝしく聞ゆなり
あつさわするゝましみつのおと　大島あい子

なつかけて逢坂やまをこゆる日は
しみつわき出てすゝしかけけり　大森純子

なつをさへ忘るゝまてにみやまちの
しみつのおとそすゝしかりける　長島綾子

惱みつゝたとるやまちのかたへより
おとすゝしくもわくいつみかな　秋閒菊子

山路行くさきにいつみのおときけは
なつのあつさもわすれはてけり　澤田俊子

湧きいつる清水のおとのすゝしさに
なつのやまちはすきうかりけり　越山雪子

夏の日のやまちたとるはくるしけと
しみつのおとそいのちなりける　細井糸子

なつやまのいはに砕くるいつみこそ
あつさわするゝこゝろなりけれ　白井玉子

なく蝉のこすゑにたかきみやまちに
いはもるみつはなつとしもなし　芝田源子

いはんすへせんすへしらす涼しきは
あつさをあらふましみつのもと　佐々有鄰子

夏の日のいはまなかるゝいつみには
わきてすゝしきかせそこもれる　猿木多喜子

夏の日にやまちをゆけはいはまもる
しみつのおとそすゝしかりける　近藤季子

なつふかき山路のいつみきて見れは
おともすゝしくあきこゝちせり　青山峯子

掬ひなはてもにほるかとおもふまて
しみつわくなりなつのみやまち　青木繁子

音たてゝすゝしきものはなつやまの
木たちのかけのしみつなりけり　小川欽子

いつのまに誰かむすひけんなつ山の
おくのましみつうはにこりせり　溝口惠喜子

汲む人もまれなるおくのましみつは
いつもにこらてすみわたりけり　遠藤千勢子

なつやまの茂みかおくのしみつこそ
あつさわするゝこゝろなりけれ　長島諒子

おひしけるなつやまかけの岩しみつ
おとさへさむきこゝちこそすれ　浦島龜子

なつこたち深きやまちのいはしみつ
いまこそひとにくみしらるなれ　吉川勝子

なつころも取れまほしくおもふまて
むすふしみつのおとそすゝしき　芝田鎌子

なつしらぬこころ得たりと思ふまて
はやくもひゆるましみつのおと　岡田紗子

立ち寄れは岩井のみつのそこすみて　根岸英子

むすはぬそてもすゝしかりけり

音すみてながるゝしみつうら見れは
なつのあつさもなかれゆくらん　溝口久子

湧きいつるいつみの水をくみされは
むすふそてこそなつなかりけれ　溝口寛子

夏はたゝしみつのもとそ住まふへき
あつさなかしてこゝちよけれは　町田てい子

蔦まとふいはれのしみつくみとりて
あつさわするゝひともありけり　松井佳子

風わたるなつのこたちのふかくして
いはのしたよりいつるましみつ　遠藤鈑子

糸のこさたきりておつるいはしみつ
むすはて見るもすゝしかりけり　長島伊勢子

ふた葉み葉散りし古葉をかきやれは
見るもすゞしきしみつありけり　横山峰子

よのちりをよそにみやまの眞淸水は
こゝろきよくもすみわたるらん　横山秀子

なにこともたらぬかちなるいほりにも
湧きてすゝしきましみつのおと　竹山治子

岩しみつむすひあへぬにすゝしきは
なつのなかるゝこころなるらむ　玉井隆子

わきいつる岩間のしみつせき入れて
なつのあつさもわすられにけり　大隈つれ子

夕されはわかはをもれてつきかけの
やとるいつみそなつのよそなる　竹村竹里子

かけふかきいはまをもるゝ眞淸水に
なつをわすれて日をくらしけり　林琴子

休らへはなつともわかぬはしり井の
いはかきしみつすゝしかりけり　齋藤せん子

月かけのうつれるみれはいさゝなほ
すゝしさまさるにはのましみつ　春永己巳子

なつなから夏とも見ぬす我かにはは
しひの木かけにしみつなかれて　酒井清子

きのふまて氣もさめさりし岩しみつ
たへぬあつさにいまそこひしき　酒井澄子

けふもまたゆきてすゝまん山かけの
しみつかもとはなつとしもなし　酒井豊子

風かよふかたやまかけのまつかれの
しみつのもとはなつなかりけり　金森俊子

たへかたき夏のあつさもわすられて
くむもうれしきましのしたみつ　阿保松子

たちよれはむすはぬさきにまつ涼し
眞しみつ湧けるまつのしたかけ　日置佐喜子

ひくらしの聲するやまのまつかけに
すゞしさあかぬましみつのおと　高桑若子

松かけのしみつのもとにやすらへは
むすはぬそてもすゝしかりけり　高桑美津子

松か根をあらふしみつにまつか枝の
みどりのしつくなかれゆくらむ　高桑清子

やすらひてかたへを見れは岩しみつ
きよくもすめるさまのすゞしさ　遠藤千代子

ここちまてすゞしくなりぬ夏木たち
しけれるかけのしみつむすひて　清水すみ子

たへかれしひるの暑さにひきかへて
きよきいつみのもとそすゝしき　山路月枝子

立ちよりてむすふもすゝし夏のよの
つきかけうつるやまの井のみつ　山下靜野子

立ち寄れは庭にいつみのおとすなり　三好梨花子

あつさわするゝまつかけのいほ
三幣みさな子

しみつわく木の下かけはなつころも
立たまくなしきこころなりけり
酒井けい子

夏の日にみさりのいつみまくらして
むしろしめける[ほ]さそすゝしき
小杉みや子

吹きすくる風やあつさなはらひけん
よれはすゝしきにはのましみつ
佐野幾代子

たへかたき夏こそここにゆかしけれ
なくやまかけのたにのましみつ
鈴木貞子

湧きいつる水のあたりはなつもなほ
よそにしられぬおきやかよへる
本田鉊子

岩間よりなかるゝみつのおさきけは
むすはぬそてもすゝしかりけり
山口千枝子

山かけはなつのあつさなよそにして
ゆめにらむすふいはしみつかな
綿野りき子

たちよれは掬はぬそでもすゝしきは
いはゐのみつにあきやかよへる
中山さみ子

むすふてのこほるはかりに思はれて
すゝしきものはいつみなりけり
新川染津子

山路きていつみのもさにいこふひに
なつのあつさもわすれはてつゝ
白石由子

わきかへるいつみの元に立ちよれは
なつならぬこゝちこそすれ
山内蔦子

わきいつる清きいつみのみつかゝみ
こゝろうつしてみぬひさそなき
久米定子

夏こたちすゝしきかけにやすらひて
むすふもたのしやまのゐのみつ
中桐杏子

岩かれなつたひておつるこけしみつ
むすふたもともすゝしかりけり

松かれなつたふしみつなむすふまは
なつもわすれてすゝしかりけり
絹脇ます子

そこすみて木のはうかへる山の井の
あたりはなつもかよはさりけり
池谷富子

岩はしるいつみのもさにたちよれは
むすはぬさきゝすゝしかりけり
柳田里子

あへきつゝ來し山かけに湧くいつみ
いさおりたちてむすひてな見ん
西鉊子

夏の日もすゝしかりけりまつかけの
いは井のみつなむすふたもさは
福原菫子

立ちよれはいは間の淸水おさすゝし
みつのうへにやあきのかよへる
小杉ひさ子

立ち寄れは身にしむはかり涼しくて
むすはてかへるたにの眞しみつ
岡里富子

さらぬたにすゝしき松の木のかけな
おさたてゝゆくみつもありけり
高桑多賀子

なつやまの木のしたかけの岩しみつ
われのみひさりむすふすゝしさ
大高つや子

むすふてのしつくに秋やかよふらん
みさりすゝしきまつのしたみつ
横山柳子

みちの辺のやなきのかけの岩しみつ
むすはて過くるひさなかりけり
四村千代子

岩しみつむすふたもとのすゝしさに
あふきもなつもわすられにけり
谷口ふさ子

迷はすは知らてすくさんなつやまの
みくさかくれのたにのましみつ
鉦子歌子

いは間よりもり來る水のおさきけは
むすふゆめさへすゝしかりけり
鉦子茂子

岩まよりなかるゝしみつそてひちて
逸名

なつのかたみにいさむすはまし

まつかけの岩井のしみつあさけれと
なつをはよそになかしつるかな　外川登子

みとりなす松の木かけのいはしみつ
こゝろすゝしく千代もむすはん　進藤敏子

いは清水むすふたもとのすゝしさに
いつかあつさもわすれけるかな　進藤ゆき子

立ちよれは夏のあつさもわすれけり
しみつなかるゝまつのしたかけ　田中静子

玉の緒もたえんはかりのあつき日に
むすひさめたるいはしみつかな　田中時子

堪かたきあつさもよそにはらはれて
いつみのもとはなつなかりけり　濱田直子

松かけにあせふきあへすたちよれは
こけのしみつになつをわすれつ　山崎ゆく子

しはしとてむすふ泉にゆくりなく
ぬるゝたもともすゝしかりけり　森はる子

ゆふ日さすみねのまつ風しつまりて
すゝしくのこるみつのおとかな　足立宗子

風なきていさく〳〵あつきひるかりは
いつみのもとそたちうかりける　足立多嘉子

くむ人のたえまなけれはやまかけの
しみつになつはかよはさりけり　足立滿彌子

たきりおつるいはまの清水むすふては
こほりにふるゝこゝちこそすれ　足立松子

あらかねのつちさへさくるこの比の
あつさわするゝいはしみつかな　橋本さよ子

岩間もるしみつのもとにたゝすめは
なつのよそなるおもひこそすれ　廣沖たま子

わき出つるいつみのおとの涼しさに
なつもよそなるこゝちするかな　田中庚子

いはまよりわき出る水はむすはねと
たゝみるのみもすゝしかりけり　熊田點子

わきいつるしみつのもとのすゝしさに
いまはあふきのかせもからしな　高屋はき子

わきいつる岩井のみつのおときけは
なつなきさしとあやまたれけり　細川ますゑ子

わき出つる清水のもとに立ちよれは
なつもなかるゝこゝちこそすれ　堀いさむ子

たひゝとのよろこひむすふいは清水
あせとゝもにやなつをなかすらん　佐藤きよ子

みなつきのこの日さかりも忘るゝは
くむ手すゝしきやまの井のみつ　大村八代子

立ちよれはむすはぬそても涼しきは
岩はしりゐのみつにそありける　尾立富子

てにむすふ石井のみつのすゝしきに
なつをよそなるこゝちこそすれ　村上貞子

世のちりをさけんと思ふやまかけの
いはまのしみつむすふすゝしさ　北村しつ子

あらかねの地もさくへきなつの日も
あつさをしらぬましみつのもと　高橋頼子

わきいつる岩間のいつみすゝしさに
なつをもしらぬこゝちするかな　濱さみ子

なつしらぬ岩間のしみつきよけれは
むすはてみるもすゝしかりけり　由井浪子

たちよりていさむすひみん岩しみつ
おとをきくたにすゝしきものを　由井澄子

たちよれはむすはぬ袖もしめるまて　長谷川松衛子

すゞしくふりぬたにのましみつ

こゝたらぬ深山なれともたちよれは
すゝしるあまるいはしみつかな
野中あさ子

やまかけにわくまし水はあさけれと
うき世のなつはしらてすみけり
二宮春枝子

山もりはなつのあつさもわきいつる
しみつのかけにうらわすれつゝ
仲田繁子

わき出つるいつみの元にきて見れは
なつの外なるこゝろなりけり
仲田榮子

すゝしさのとゞこはあれと夏の日は
いつみかもとにしくものそなき
白石梅子

淺けれとたひゆくひとのなつのひに
ふかくもたのむやまのゐのみつ
宇高松子

岩しみつきよくすゝしくなかるなり
なつやましけるならの木かけに
大橋靜子

家ちかくきよきいつみのなかるれは
あつしさ云ふはおもはさりけり
大橋芳子

立ちよりておほろの清水むすふ手に
しはしはなつもなきかさそ思ふ
德永辰子

手にむすふ岩井のみつにけさかりの
みちのつかれもわすれけるかな
小森田輝子

なつくれは草ふみしたきみちつけて
くむひさおほしたにのましみつ
廣田さめ子

くみなれし庭のまみしついつしかも
なかしゆきけむなつのあつさを
河野清重子

夏くれはこけのころもゝあらふらん
すゝしくみゆるやまの井のみつ
四元照子

きくたにもなつをわすれて涼しきは
いは間をもるゝましみつのをと
弓山さみ子

たちよりてむすふ手涼しなつやまの
みさりいろこきまつのしたみつ
榊原八千代子

岩間よりもりくるしみつたちよりて
むすふ手すゝしなつやまのかけ
矢田部信枝子

おりたちて岩もるしみつむすへれは
わか身になつはあらぬさそ思ふ
竹村貞子

あさゆふにきつゝなれつゝ掬へとも
あかぬはなつのいつみなりけり
泉久眞子

袖ひちてむすふしみつのすゞしさに
なつてふことはしはしわすれつ
泉さい子

へたてなき友とうちつれふもとなる
きよきいつみにあつさわすれぬ
平野晴江子

すゝしくも松のこかけにわきいてゝ
なつのあつさもいはしみつかな
藤村幾子

岩間よりもりくるみつのおときけは
むすはぬさきにすゝしかりけり
北村常子

湧きいつる水にむかへはおのつから
こゝろもきよくなりにけるかな
北村弘子

なつなから冬をわするゝはかりなり
空つくいつみなめつゝおみみは
佐久間八重子

なつすきて秋やたちぬとおもふまて
いはもるみつのおとそすゝしき
湯淺うの子

岳つちもさくるはかりのあつき日も
いつみを見れはすゝしかりけり
平泉なほ子

やまふかみ湧きてなかるゝまし水に
今日もあつさをなかしつるかな
太田題子

湧き出つる清水にしはし立ちよりて
うつすこゝろそすゝしかりける
田中みつ子

茂りあふひさむらまつのやまかけに
成瀨朝子

なつなよそなるいつみなかるゝ

あつきひも松かした根のこけ清みつ
むすへはそてにかよふあきかせ
續木松子

みつ枝さす背藭のかけもいろそひて
にはのいつみそすゝしかりける
續木香芽子

立ちよれは夏はなかれていつみかは
たへぬあつさもわすられにけり
澤田蕗子

うれしさをなにゝたとへん汗おねて
こゆるやまちのまつのしたみつ
岡田陽子

わきいつる岩まのみつのおときけは
むすはぬさきもすゝしかりけり
藤澤萩子

松かせに音をすましつゝいはしみつ
ひゝくあたりはなつなかりけり
藤井よし子

つゝましき道もわすれてをさめらか
こかけのしみつくみかはすなり
大河内長戸子

たちよりてむすへは夏のあつけさも
さけてすゝしきいはしみつかな
錦織幸子

袖ひちていさやむすはん我かにはの
いつみのしみつなつさしもなし
小松靜子

見るたにもなつを忘るゝこゝちして
すゝしきものはいつみなりけり
服部かつみ子

むしあつき夏にはあれさましみつは
むすふてさむくおもほゆるかな
竹腰隆子

松かけのいはまにむせふましみつは
むすはれさなほすゝしかり鳧
田中八千代子

松かけにいろをふかめてわきいつる
しみつになつはやさらさるらん
遠藤貞久子

涼しさのいつこはあれさなつはたゝ
しみつかもとにやさやからまし

みな月のあつさもけふはわすれけり
たもとすゝしきたにのしみつに
遥名

たつねきてむすふもすゝし山まつの
木かけにいつるなつのましみつ
折田さい子

岩間よりしみつなかれてまつかせの
かよふこかけそなつなかりける
北原季子

岩根ゆくいつみのおさのすゝしさに
いましはしさてたちうかりけり
安田ふじ子

松かけのいはまのしみつさめくれは
むすはぬそてもすゝしかりけり
門谷敏子

たちよりて岩井のしみつむすふまは
またきにあきのこゝちこそすれ
魚住愛子

夏しらぬいつみのもさにやすらひて
あふきをさへにわすれきにけり
大竹治子

立ちよれは岩まのしみつすゝしさに
なつをわするゝこゝちこそすれ
辻本ひさ子

岩かれなめくりていつかましみつに
なつもなかれてすゝしかりけり
畠山雪子

岩間よりしみつはきよくなかれけり
なつのあつさもよそになしつゝ
畠山千代子

夏さいふものをいつくにかくすらん
見るもすゝしきやまの井のみつ
畠山百合子

岩まもるしみつになつやなかるらん
ひるもすゝしきまつのしたかけ
畠山千惠子

むすふ手に夏のあつさをわすれつゝ
たちはなれうきいはしみつかな
林環子

たちよりてむすはぬさきも涼しきは
いはれにひゝくしみつなりけり
小川愛子

あつけさに森のしたみちたさりきて
坂井みつき子

むすふもすゝしなつの眞しみつ

松かげのいはもるしみつむすふ手に　なつのあつさもわすれけるかな　神野ひさ子

ひさりしてむすふはなしき眞清水を　このまゝつさになすよしもがな　中澤千乃子

わきいつるいは間の水のおさきけは　むすはぬさきになつそわするゝ　高石登代子

あふきをもわすれつるまで松かげに　すみてなかるゝいはしみつかな　萩原章子

わせいつるいつみの元にたちよれは　むすはぬさきにすゝしかりけり　北島功子

けふもまたあつさわすれむ松かげの　いはゐのみつをむすひくらして　北島松子

日さかりもけふは忘れていくたひか　いはもるしみつむすふすゝしさ　河田いし子

むすふ手は氷るさはかりおもはれて　なつもすゝしきやまの井のみつ　齋藤よし子

七月五日兼題　玉と瓦と

天　岩城國相馬郡飯豐村　平泉なほ子

玉には光あり、瓦には光なし、光ある玉は人に貴ばれ、光なき瓦は人にかへりみられず。されど、瓦は瓦として、またふさはしき用あるものなれど、光なしとて、むげにいやしむべきにあらずかし。人の、才あり徳高くして、世に尊ばるゝものは、これ人の中の玉とやいはまし。またさせる名も聞えず、才も少かれど、おのがなすべき業にいそしむ方の人は、瓦の光なけれども、其の用あるにたぐひつべし。おのれは、彼のうはべのみを玉にして、其中は瓦にも劣るえせものをにくむ。瓦なりとて、いやしむべきかは。

地　規定の賞品たまはらすべければ至急住所を通知せらるべし　岡山それ子

物の差の、いみじきにたとへられ、醜美のいたく異なる、例にひかるゝは、此の玉と瓦とになん。そも、瓦は僅の光りもなく、其の色たゞ黒きのみにて、一の見處も、なきに引きかへ、玉はきらびやかなる光りを放ち、其の色美はしく、形やさしく、従ひて其の價も貴とけれど、世の寶ともてはやされ、古より夜光の玉などと云ふことと、書に見えたり。かけまくもかしこき我大御國の、三種神寶も、其の一は、やがて此の玉なり。實にめでたくも尊き物にてこそ。されど、人の行のすぐれたる、或はみめ形の美しきなど、此の玉にたとへられいやしききはに居て、行のひいでたるを、瓦中の玉など云ふなり。さはいへ、瓦もまたひとへにおとしむべきにあらず、そは實用の上より見れど、美しき玉よりも遙にまさり其の用いと廣ければなり。されど、人も亦其の行と心とは、明玉の如く、清く美しく、しかも其の用は、瓦のやう廣く大ならんことこそ、ねがはしけれ。

人

千葉縣安房郡豐田村香見 三幣みさを子

世のなかに、何はあれども、光あるものは、なべて人にめではやされ、光なきものは、心にもかけられてすぐすめり。されど、古より、いと美しく滑らかなることの形容には、金殿玉樓、さては、玉のをのこ、光てりそふ、などいふ詞をひきあつるも、やがて、光あるものいと貴くめでたきを、あらはすなるべし。金剛石さては眞珠などいふ、夜さへてりかゞやくばかりの珠は、いと貴き品物の飾となり、やむことなきれ前にすゑられ、いくばくの價もてあがなふも、得がたきばかりめではやされて、こよなき寶とぞなりぬる。瓦は御國をはじめ、外國々にいたるまで、家屋を葺く料として、いと効用多かれど、さまで人のとりいでゝ、目にもかけぬは、光なきをもてなるべし。いとかしこかれども、 皇后の宮の「金剛石も磨かずは、珠の光はそはざらむ、人も學びて後にこそ、まことの徳はあらはるれ」、と御詠あそばされしも、やがて、玉をいたくめでさせ給ひしに、さて、人も學問を勵みて、智を磨き徳を修めなば、いみじき功をたてゝ、世をてらすべきにさはなくて、日々遊にのみ耽り、業を怠らば、石瓦とひとしく、萬物の靈長に生れし、人の人たる光なからむ、との大御心なるべし。されば、人たる者は、いや勉めに勉め、いや勵みに勵みて、智徳をみがき、呉竹の世にぬけ出でゝ、君の爲め國の爲めに、力をつくし、瓦となり全からむより、玉となりつゝ、砕けむことこそ、願はしかるべけれ。あはれ、妾の如く、智もなく徳もうすき者は、瓦の如く、世の人の瑕をもとむることなくて、なかなかに心安し、と思ふものから、いとはづかし。

(以下原稿到着順)

三谷きみ子

世の中に、いたきけぢめあるもの數多あれど、玉と瓦とは、たくらべんやうもなく、あさましきものゝ限りにこそ。されど、いかに玉なりとも、深山より堀りて出せるばかりにて、みがきもとぎもなさゞらんには、ほとほと瓦とも見まがへつべし。さるを、みがきて玉となし、とぎて寶となしぬればつゞれの布にまとふとも、光りはおほはんよしもなく、皆人敬ひ尊ぶべし。瓦はこれと異なりて、いかに美しき、錦に包むとも、更に尊き色はなからん。この世に生れし人も、いときなきよりとぎみがき學びて道をゆく時は、光りまばゆき玉となり、怠り倦みてつとめずば瓦にも劣りぬべし。げにつとむべき事ならずや。

輕部謠子

年たけたれど、妾は、時計の針のたゆまなき程、心をはげまし。晝に夜をつぎ學びければ、兩親は、後の世の土産かと、笑ひ居れり。されど、妾が人の母となるまでには、光有る玉の如くにならんやと樂めど、もとより拙なき身の、學びのたらざる故か、如何しても瓦の如くにて、光りの少しもなきぞいと悲しきや。

目黒佐喜子

夫れ、玉は、其の様滑らかに、いひ知らぬ光さへありて、世に得難きものなり。されば、其形小しといへども、人皆愛で貴み、たまたま得れば、錦に包み、秘めて寶とすなり。これにひきかへ、瓦は何の見所もなくて、得る事も亦易し。されば、其の形大なりといへども、人是を顧ろ事な

し。故に、諺にも「瓦と成りて全からむよりは玉と成りて碎けよ」といへり、こは皆世の人の口にする所なり。されども、まつたく瓦と成るを厭ひて玉と成る者、世に幾人かある。いと覺束なし。

佐野幾代子

世の中にありとあらゆる物、何とて上下のけぢめあらん、まして、人の心にいたりては、譬へ身にはつゝれをまとふとも、其の心は光ある玉にも勝る物あらん、又身には錦をまとふとも、心はちりあくたにも劣るものあらん、かのにごりにしまぬはちすの如く、ゐさへ清くもたば、いや高き位にのぼらずとも、何かは世に恥づる事のあるべき、かゝるをこそ、玉と瓦とけぢめとこそいふならめ、

綿野りき子

玉をながめて、誰かめでぬ人あるべき。宜なり尊き三のたからの一つとして、柔和善順を總にたとへ慈悲の海と云ひ傚ふ。されど、始よりかゝる麗はしきものにてはあらざらん、あらかねの土にうづもれ、あるはわたつみのあやしきみなそこに打ちしづまり、其の形はもとより、光もわかぬものにてありしなるべし、嗚呼かんがみよ、我身今此まゝにして、學の道をうみたらんには、雨にうたれ風にふかるゝ、不幸なる瓦となりぬべし、傚へきく、せんだんは二葉よりかんばしとか、されど、瓦とて怠らずみがきたらんには、たとひ玉の如き光はそはぬとも、など美しくならぬ事のあるべき。「みがゝずば玉も鏡も何かせん、學びの道もかくこそありけれ」との大御心の程いとも〱かしこしや。

西豔子

照りはたく夏の終日、篠つく雨の夜もすがら、人の爲に高くあやふきをもいとはず、暑さ寒さを身に引き受けて、凌ぎさゝへくるゝ者は、彼の屋根に並み居る瓦なめり。あはれ、さばかり忠なるものを、なべての人の、勞はりもせで、いと情無く、よそに見過ぐすは、如何ぞや。さるにても、露恨める色もなく、能く己が職を守れるは、位ひくき武士にも譬へつべし、絹につゝまれ、箱に納められ、人てふ人に愛で貴まれて、其を求めんとては千金をさへなげうちて、更に惜しと思ふいろも無く、常に貴人の御裝ひをたすけまつりて、貧しき邊には近くだによらぬものは玉なりけり。されば、こはやんごとなき姬君達に、よそへ奉らんか。實に、身のほど〴〵に定まれる品位ほど、是非なきものはあらじ。世の爲人の爲いみじき功績は有りながら、身の賤しきをもて、よに著はれぬのみか、其の苦をだに知る人も無くて過ぎ行くは、如何に口惜しき事ならん。其れに比ぶれば玉の幸の多き事よ。是れとしも取り出でゝ云ふ程のいさをも無けれど、其の性清く、其の色艶やかなればとなきだに、人々の愛ではやすなるを、まして品位さへいと貴ければ。誰かは思ひすつべき。一つだに多く得てましとこそ、人皆の心はくだくなれ。さるを、いかなれば、善惡のいたく別め有るなば、直に玉と瓦とは、言ひ習はせけん。想ふに、善惡の別めにはあらで、品位の高下を譬へし諺にこそあらめ。さすれば功績高き瓦の方、遙に勝れりとせんか、何をもて、世をも人をもかざりてむ、あゝ思へば、玉も瓦も、貴きも賤きも、いづれか世の中の、寶ならざる。

福原茁子

そも玉と瓦とゝは、如何なる事をかいふ。平々凡々、碌々として、無用の人物となり、世に生き永らへんよりは、假令、玉の緒のいと短かゝろとも、世に有用の功を成して、國恩に報ずるこそ、人たるの本分ならめとの意ならんかし。古語にも「瓦となりて全からんよりは玉となりて碎け　と、宜なるかな。たとへば、袈裟御前の如きは、玉碎とこそいゝ　れ。又春天霞氏の二女の如き、生きて汚辱を受けんよりは、死　ゝとも、身に不潔を受け、父母を辱むるに忍びずと、岩に投じて身を終へし潔ぎよさ。あゝ、女德を具備せる、玲瓏温順なる日本女子、たれか、艱難事變にあふ事のありとも、節操を破りて、瓦全する、卑劣心あらんや。

長谷川はる子

世にたとしへなきもの、數多あるが中にも、いといと　いちじるきは、玉と瓦とになむありける。前なるは、其のみねまことに美にして、其の數さへ少しとて、物すきにめで貴ばれ、光を種々の裝飾に放てり。後なるは、其の質誠にあらくみにくゝして、如何に磨かんも、更に光

澤を見ることなし。されば、一旦其の用を失へば、徒に條を路畔の礫に交へ、行人も之を顧ることなし。嗚呼、玉よ汝の如く世にさち多きはあらじ。之を磨かば、益々其の光澤を増して、一きは美しく、人皆之をめでたふとむなり。瓦よ、汝あはれむべし。同じく世に出でながら、其の質の賤しきにより人にめで貴ばるゝこと更になし。されども、決して悲しむことなかれ。汝の未だ元の形を損せざる時は、常に我が頭上にありて、我等を庇保せり。其の功や大なりといふべし、人の此世におけるも、亦これに同じく、等しく人類中にて、或は玉の如く世人に貴ばるゝあり、又瓦の如くいやしめらるゝあり。これまたく、おのが心さまのよしあしにこそはよれるなれ。すなはちよく人たるの道を辨へ、おのが本分を盡し、勉め勵みてやまざらば、いつしか尊敬せらるゝに至り、又おのがなすべき務をも盡さで、只怠りてのみ日を送らんには。おのづと人に輕くいやしめらるゝに至るべし。さるを、又いかに、其のさが人に勝れて賢くとも、徒に之にほこりて、おのが本分を盡さざらば、遂には世にいやしめうとみせらるゝにいたるべし。すなはち、玉如何に貴くとも、之を磨かざらば、遂には其の光澤を失ひて、一つのめづべきところなきに至ると同じかるべし。されば、彼の瓦と何ぞ異らん。彼の瓦よ、汝如何にみがゝんも、惜いかな、遂に其の質を改むることを得ず、故に只おのが本分に安じて、其の職を全うせんことをつとめはげむべし。人は、いさゝか之と異りて、如何に其のさが惡しくとも、よく其の本心を改めなば、つひには貴く美しき彼の玉の如く、世にめで貴ばるゝに至るべし。嗚呼かんがみざるべけんや。

藤の戸女史

かしこくも「金剛石も磨かずは玉の光は添はざらん人も學ひて後にこそまことの德はあらはるれ」と宣ひしは、實にことわりの事と思ひはへりぬ、世の中にさまざまあれど。こゝに玉と瓦とは、いつれが世にめではやさるゝとおもへば、たれ人も、玉と云ふめれと、此玉は、もとはかはらとかはることなく、つやもなく光りもなくありしを、人のみかきあけつゝ、やうやくに光を出して、かざしの玉とめづるなり。夫に引きかへ、瓦はいくそたひ磨くとも、光もいてす、又あながちにみがく人もなく、みやひ人のめつることも、ゆめゆめなく、只々屋上にありて、あめかぜをふせぎ、もろ人のたすけとなしつゝあれど、玉の如くにほめはやさぬぞうたてき、世の中にもかゝる習ひはいと多くあれと、いさゝかあけつらひて、ものしめるになん。

佐々布鄰子

玉となりて身を全くせんよりも、瓦となりて身命をくだくは、大日本國の人の心おきてにて。海外萬國の男女の、かけても及ばぬ操なり。いかにとなれば、千早振神代より、萬世一系の天皇のみたてとなりて、草むすかばね、水つくかばね、のどにはしなじと言たてして、妾が家の歷代の祖の命のいましめおかれしことのごとく、誰しの人か、祖神の掟をまもらざる。あなめでた、あなたふと、地球上たぐひまれなる玉と瓦とを掟となす、をゝしき國からかも、かしこき心がけかも。

長洲餘野子

瓦はあしく玉はよしと、なべての人かならずいはん。瓦のあしき、何にかよれる。玉とくらへて、そのかたちのうつくしからず、そのたぐひおほく、寶となしたるためしなき故なり。玉をよしといふは何にかよる。玉はみがきて寶となし、くるまの前後十二乘をてらして、他しくにゝほこり、これをみがきて、やんごとなきかたぐ\のかざりとなしたるなど、うつくしげなるによりてなり。王と瓦と、見る上からは、其けぢめしるれど、その功は、いかで玉におとるべき。ふきて屋根をつくり、雨風をしのぎて、のどかにくらし、これをほこらず、かしこくも九重の大宮にいかめしくふかれ、その名譽は、とほき外國までかがやくべし。いかでか、車の前後十二のみならん、金剛石もみがゝずばとかしこき君のゝたまひしごとく、げにまことのいろはいでじかし、玉もしつれの石ならんに、いかでか世の人の貴ふべき、碌々の石とて、はかなき人にもたとふるものを、これもみがきてこそ、その光はいづめれ。その用多しといへども、多くはおごりの役にするのみ、いかで

瓦の類多く、なへての人に用ゐらるゝに及ふべき。人の世にある、多くの人に信じ用ゐらるゝ、これよりうれしきはなし。玉人に信なきにあらざれど、品すくなければ價高し。高ければかはんとおもへどくるしむ、かぎりなき世にかぎりある命ををしむにゝたり。命長からんを願ひてみかければ、その人かならず世をかこたん。玉もし得んとしてはさらば、その人定めてこれをうれひん。いかで瓦の効多く、價廉なるに若くべき。

泉　さい子

玉は是れ遠き神代のむかしより、皇國三種のみ寳の内にたゞへ、幾千年をふり來りし、天皇の稜威と共に、つたへかしこみ、今も御皇室に守護まします、いみしき御寳になんありける。瓦は賤の手業に作りことそきたる品にして、神のみむろの軒なとには、はふきもちうることなき品なり。されど、下さまの軒にならへ、雨露をしのくよすかとなりて、先おのれの本分はつくしゐらるゝものなり、しかれども、古人のいはゆる瓦となりて、全からんより、玉となりて、碎よとは、いにしへ武士を、戒めたることばにして、是をもて、かんがみるに、玉はその種類多しといへども、かしこきみたからを始とし、うるはしき光りをはなち、世にいみしく、たゝへらるゝ、いともめでたき姿なり、瓦は、おのれの本分はつくしゐらるゝも、たゝ、下さたの軒に、雨露をしのくよりの外用なく、まいて、その、功績もすくなく。たとへは、玉と、瓦となり、世の高下の差別にかぞへられ、尤いやしきうつはなり。人の操も、かくの如く、人義道德の理を、守らざれは、いみしき光りも、世にいつることなし。かの古しへ、海士の少女の契りし夫の命を、たすけんため、ちひろのそこより、かつき上けし玉は、此女子と共に、今も、世にひかりかゝやけり。かくてこそ、玉のひかりも、いよゝかしこけれ。人として、此あはれなる、瓦の如く、その功績のすくなきは、世に恥っはしき事ならずや。人は、道を守り、德をはげみ、世につくし、もて、此玉のごとく、後世に名をかゞやかさんこと、人たるものゝ、ねがはしき、ことになん。

佐久間　八重子

あゝ出でよ玉人よ、など出でぬ玉人よ、今の世には、果して玉人なきか、何とて玉を抱きて、なか〳〵に瓦礫と見やられて、削られ玉なくだかるゝもの多きことよ、昔しは卞和の玉は、削られて後に世にあらはれ、良き玉人の手に會ひてこそ光を出しゝなれ。生れいでしまゝにて、爭でかは連城の價を添ふべき。必ずや、瓦に等しく、砂礫に伍して過土に埋もれ、世にあらはるゝことはなかるべかりしならむ。瓦は其の光、素よりなく、又之をいかほどすり研きたりとて、いつかは光の出づべき。たとへばわらはの如き愚なる身に等しからむ。されば、永劫瓦は瓦、玉は玉ならむかし。去かはあれども、今の世には、まゝ玉を抱きて楚山の下に哭し、瓦を以て玉をてらひ、世を欺く輩も多しとかや。しかるに、日に月に開けゆく世に、いといぶかしきは、たゞに楚文の明、玉人の拔なきのみならで、なか〳〵にいといやしむべき瓦を以て玉となしつゝ、千金を擲ち、萬金に償ひ、眞の玉をば瓦と見なして、抱くものは削らるゝこと多しとなむ。いと口惜しきことにこそ。嗚呼出でよ玉人よ、など出でぬ玉人よ、今の世果して玉人なきか。

吉見　靜野子

同じ山川の土石にして、かく迄張なるものはあらじ、其の價甚だ貴く、やんごとなき高樓のかざりとし、あるは家の寶としてもてはやさるゝ玉、いやしき山人の住居の軒に、雨にさらされ日にこがるゝ瓦、其の幸不幸、如何ばかりなるらん。さはいへ、玉もはじめは谷間などの石にして、光りなく價なかりし物ならん、されど、人の其の性のよきを見始めて拾ひ上げ、朝夕手をつくしてみがきたて、彼のまばゆくかゞやく迄になしゝに外ならずして、其のつとめてみがきし功とは言へ、其の性のよき所なり、又瓦は、たゞ田沼などの土を、かためてなしゝものにて、其の光りなく、其の價ひなしとは言へ、山さとのあばらやをじめ、花の都の住居にも、家のむねには皆是をならへて、雪霜をふ
ゝ、其の功げに野山の土にてなしゝものとは思はれず。若し是なか
ば、遠き古への草ふき、近き世の煉瓦作りはいざしらず、大方の

家は、草木ならぬうつそみの人の、雨露にうるほひがちにて、其の苦しみ如何ばかりならん。あな瓦の如きものにて、其の爲すこと大なるものと言ふべし。されど、古へより瓦となりて殘らんより、玉となりつゝくだけよやなどゝなへて、げに貴きものは玉、賤しきものは瓦といつれど、こは全く其の性の異なるをしらで、唯その日になるゝさまを言ひしなり、あな嘆はしきは尊き石といやしき土とくらべ、其の質によりて功あるを知らざるにあり。

櫻木香芽子

玉と云へは、世の人のなへて上なく美しきものに愛て尊み、野邊の千草の葉末にすがる露をさへ、貴きとめし眞玉と見はやして、朝夕風にこぼるゝを惜む。瓦はあらがねの土にて作りたるにて、すゑしやうめなう、あるはいろ／＼の美くしきにくらべたらんには、何の價もなく、見劣りのせらるればか、世にもはかなきものゝ假へにのみ云ひおとしむるなり。人も其の心さま淸く美くしきをば、玉と愛で尊び、賞めたゝへられて、上なき榮を得れど、さもなき者は、たゞ土瓦のはかなきためしとなりて終るめり、哀れくちをしき事ならずや。」とは云へ、瓦も玉の甍とやらん世の貴人の住む屋の棟にふきならべて、照り渡る朝日夕日に輝くも美くしく、降りしきる雨をふせぐもめでたきを、強て無下に云ひくだすべきにはあらず。されば、現し世に有りて益なく能なき我身の如きには、また假ふるものも絕ゑて無きこそ淺間しけれ。

錦織幸子

玉といへばいづれの國にても、いと美はしきいと貴きものとし。また瓦としいへば、只だ美はしくもあらぬ貴くもあらぬものとぞすなる。さればにや、むかしより、貴きといやしきのたとへにも、玉と瓦とい ふ諺あるも、まことに宜なり。そはとまれ、この玉も、いかに美しければとて、其のはじめは、必ず奥山深くうつもれしか、はた海底深く沈みし奇鑛なりしならんを、何人かの、探りて、心をこらし思をつくして、練磨せしにより、美はしく世にめでらるゝ玉とはなりしなり、されば、人も悠々とし、碌々として何のなす事もなく、いたづらに可惜の月日を過すなどの事ありて、彼のいやしき瓦とたとへらるゝ樣の事は、ゆめ／＼あるまし只だ／＼朝にも夕にも、貴き美はしき玉にならひて、誠の道を辿りつゝ、已が心をあくまでも磨きにみがき、夜光の玉、金剛の玉にも、まさりたらん身の光りこそ、願はしけれ。

北原季子

玉と瓦としいへば、さながら錦とつゞれとかやうに、大方の人はおもふなるべし。しかいふ姿も、さることゝ思ひつれど、つく／＼考へ見れば、げに、世に瓦ほど甲斐なき物は非じか！。そも、瓦には、一の光もなく、たゞくすもれたる色をしてさも高き屋根の上にあげられ、日にさらされ、雨にうたれ、あるはやけ屋のあとに出ぐろをなすとても、つゆたふとしとも思ふ人なし。されど、これ瓦によりてこそ住家となるべきものなるを、古へは、玉はありても、玉てふものはなく、そが爲に、かやあしの伏屋に住ひし方々もありつるに、ゆたけき方々には、其の有樣をも思ばずに、ちよろづの黃金をつひやし、あるはかしらに、あるは指に、身は夜も光れかしと、浮世の果報を、たゞひとりに衒ひたまふ方々よ、あはれ世に、瓦となりて、甲斐なくもさけずまるゝ事をもかへり見給へや、玉もいかでかいやしからん、たふとかれども、瓦なくてはこのやまと民草はいかにかあらん、たゞ日にさらされ、雪にうてもれかるゝよりほかなき物を、たゞ姿は玉と瓦としいへば、さもたかしきやうに思はれど玉もたふとし、瓦もたふとしと思へばかくのべたつるになん。

堀いさむ子

およそ、世にけぢめあるもの、玉と瓦とばかり大なるは無からまし。玉は、古より夜光寶珠なとたゝへて、めではやされ、いろつやも、いと艷に、たぐふべくもあらずかし。又、瓦は、固より光もなく、けだかき品位もなくして、かの玉と較べなば孰れ勝れるかは、言はでも著かんめり、されど、玉に在りては、徒らにみやびを飾り、かざるのみにて、世に左程の用もなく、人の慰みに供へらるゝものなれど夫の瓦はしも、形こそ醜くけれ。天の下にありとある人家の屋根と爲りて。蒼生の爲めに、風雨の害を防ぐてふいとも貴き廣らかなるいさをあるよ。されば。古の聖も、みめより心を尊び、また良婦は美ならずと雖も、家を飾るに足るとかや。いでや、是より世に立つべき女子のともにありては、徒に我が美をのみ飾らず、瓦にあやかりて、益あることを勉むべし。又きはめて、心の淸き光をば、四方に輝すべく、益々玉と磨かまほしうなむ。

齋藤富子

世の人の最も尊べる黃金白銀は、深山の底より堀り出しゝ頃は、其の質のよしあしだに、見分くべくもあらず、そを選り分けて後、初めて人々

の尊める者となりぬなり。瓦は元より光なければ、玉人の手によりて磨くとも、其の性のあしき者なれば、その詮なし。玉も底深き千尋の中に埋れたらん時は、玉と石とを見わかざれど、いかで光をはなつべき。されど玉人の手にあへば、磨き〳〵て、遂に世人の愛する玉となるなり。「旃檀は二葉より香ばし」とか云ひつれども、幼打ち群れて戯るゝ頃は、賢き愚かのけぢめは、容易に分つべきにあらず、千代に八千代にかぎりなき譽をあぐるを得るなり。「人も治まれる代には、忠義の士も、不忠の人も、見分くべからざれども、麻の亂れたる世となり、初めて忠臣あらはるゝなり。

小出ゆき子

世にいとも尊べる黄金白金も、又夜光の玉といへども、深山の底にまじれるところ、掘り出しまゝにては、其の質のよしあしだに見分くべくもあらざれども、玉は玉人の手によりて磨くときは、益其の光を放ち、人の尊べるものとなりぬなり。瓦はもとより光なきものなれば、如何に手を盡くすとも、など光を放つべき。旃檀は二葉のうちより香ばしとかいひつれども、幼うち群れて戯るゝ頃は、賢しこき愚かのけぢめは、容易に分つべきにあらず、幼きときより、よき教をなさば、賢き人は、固より玉にひとしき譽を、幾年までもあぐることを得べし。されば、教へてふものゝ、如何によりて、可惜英雄も、空しく瓦礫と均しくて、朽ち果つるに至るべきなり。

有吉いく子

凡そ、世に美しとも貴しとも云はれつる夜光の珠も、深山の底より掘出したる頃は、瓦と石との質だに見分くべくもあらざるを、よき玉人の手によりて磨かれなば、その光の輝きて、えもいはれぬ珠となりぬべし。人も幼きとき、友どちと打ち群れて、學びの園に遊べる頃は、玉と瓦とのけぢめは知り得べくもあられど、人たる道をもて教へ導かれなば、やがては玉の如く、世にめでたき人となりて、千代に、八千代に、かぎりなき譽を擧ぐる人ともなるべし。されば人は常に眞心もて、勉めでやはあるべき。

久間春子

すべて、玉としいへば、世にめではやされ、やんごとなき御わたりをはじめ、家賑はゝしく榮ゑたる方には、こゝにめでかざられ、いみじき光を放つ物なれど、こもよく拵へ、よく磨かでは、いかでかよき光も出でん、いかでかめでかざられもせん。又よくこしらへ、よく磨きても、いさゝかにても、疵を生したらんには、なか〳〵に拵らへぬ磨かぬ尋常のあら玉にも劣りて、忽ち此のおぼえを失ふに到るなり。そは、かくうるはしき、光めでたき色をもたれど、必ず日用の器といふにはあらで、修飾のかぎりものなればなめり。さるに、瓦といふものは、いかにこしらへ、いかに磨くとも、よの常の玉の光にも、及ぶものにはあらざれど、家作り庭築などに、必ず用ゐられ、軒端近う敷きならべて、水はしらせなどせんには、これもしと用ゐられ、やんごとなき御わたりなどの御手にふれ、御覧しき御もてなしこそなけれ、いさゝかは欠けたりとも、又其用に供すべき事なしとせず。されば、よく光りて疵ある玉よりも、見る目はいやしくとも、事なき光こそ、世の必用とはいふべけれ。人もかくやあらん、まして女は三從の道を守り、家政の事、庭訓の業など、自らなる女徳を備ふる、やがて、彼の玉のよく拵へ、よくみがくにひとしかるべし。今や、女學日々に進み、何くれのをしへごとも多く、挿花、點茶、琴箏、唱歌の如き、なほ〳〵まで、つとめ習ふべき事とはなるに、舞踏とかいふ、異國の手ぶりまで、學び得んには、其の事しげさ、男子の業にも、なか〳〵おとらざる事なりかし。かく道々にゆゑつき、ざえかしこくなりたらんは、疵なき眞玉の世にもてはやさるゝ類ひのみにとゞまらで、あまた婦女子の鑑ともたゝへられ、こよなきめいぼくならんこと、いはんもさらなれど、大かた、よの人情の常として、おのれなしえたる事多かれば、或は思ひおごり、人をおとしめ、あなどる如き心より、生ずる疵なしとせず。又三從の道をはしめ、家政家庭の方には、おのづから、うと〳〵しくなりて、此の高尚なるみやびたる方にのみ心ひかれ、末終には、世をふくの思なしともすべからず。さあらんには、昨日のよき名は、けふのあたし名となりはてんに、見るめあしく光なき瓦の如く、人並ならでも、天賦の女徳を備へ、三從の道は、いはんも更なり、よく家政をとりて、夫をたて、子弟を養ふことに、こゝろざゝば、なか〳〵に、彼の疵ある玉に、疵なき瓦のまさるが如く、婦女子として生れたる、義務をも盡しゐたるものといはんか。かく思ふは、吾が身いまだ、廣く都會なとの手ぶりをしらず、時世のさまなと、只、人に聞き、物に見たるのみにて、かゝるゐなかにのみすみなれ、父のかたくなゝる、昔教草のみ、うけ守りたる、おろかこゝろゆゑにや。

國學院雜誌

第四卷
第八

六月
廿日發行

定價一冊金十五錢

贊成員募集

○贊成員には國史國文上の質問に應じ精確なる解義を與ふ○歌文を添削し撰拔の歌文を本誌に掲載す○雜誌を進呈す

目次

贊成員待遇規則

入用の者は郵券二錢を添へて申込まるべし

東京市麴町區飯田町五丁目
國學院

本町

裁縫女學校。女禮式生徒募集

本校こたみ先よりの教授法を改め進めて、更に女禮式の一科を設け、裁縫は女子の旨と習ふべき物なるに、是を教授する方法に付ては、物縫もて業とせる女に付て、又は仕立屋といふ者の教を受る等に止りて、何れも女子の風俗を賤しからしめ、高尚なる風俗を失ふに至らしむるを愛ひて設けたる本科裁縫、又英漢數習字茶道活花の諸科を共に是を教授し女子の美徳を養成せんと欲す。本科、別科、禮節科を治めんと欲せらるゝ女子の母君姉君たちとみに御申込有らんことを望む

本校規則摘要

一年齢十二歳以上の女子にして高等小學二學年の科程を修めたる者若くは之と同等の學力を有する者に限り入學を許し女子に須要なる左の課目につきて教授し、修業年限を十八ヶ月とす

（學課）裁縫。（每日午前九時より后後四時まで）○英學○漢學月木曜日中（午前八時より全九時まで）○數學。（日曜日午前八時より正午まで）

火金二曜日中（午前八時より全九時まで）○習字。（每日正午より一時迄 水土曜時日午前一時間）○毛筆書

○茶道。活花。（每日曜日午後一時より）

授業料

全科及補習科 每月金壹圓○裁縫科同金五拾錢○英漢數以下各金三拾五錢（但二科以上兼修者は一科每に金拾錢を減す）凡每月五日限り其月分を事務所に納むべし

但五日以後の入學者は其當日納むべし

又十六日以後の入學者は其月半額を減ず

本校は隔月一回諸科に付て名聲ある士に乞ひて、其道の心得になるべき談話會を開き生徒及其母姉及保證人の傍聽を許すべし

○補習科、試驗期、通學生心得、入學證書法等、別に規則書有れど本校につきて問合さるべし、規則書入用なれど（御申越次第送呈す二錢郵券御送之事）

寄宿生規則摘要○寄宿生は每月食費金四圓五十錢を前納すべし○寄宿生にして本校規定の學科中全部を欠くに非れど他校に通學するも妨なし○寄宿生は每日曜日の外保證人の申出あるに非れは猥りに外出を許さず○本校は寄宿通學を問はず躾方の一端として洒掃應對の勞を取らしめ寄宿生には特に料理の混立を各番に實習せしむ（くはしくは規則書にあり）

禮節科規則

（教師）故實、伊勢、小笠原、普通禮式教師有住常子先生を聘して左の二課目を教授す

（課目）一課目 起居、進退、物品取扱、（每火曜午前十時より十二時まで）

一課目 包物 結物（同 午後一時より五時迄）

（授業料）一課目ニ付每月金五拾錢、二課目、又ハ本科、別科と兼修の時は、定額より減ずべし

明治三十一年七月

東京市日本橋區本町一町目

本町 裁縫女學校

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

女子處世論　全

菊判美本

定價二十錢　郵稅四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）　國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵稅金四錢

恭て按ずるに先朝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尚湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**遺事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前の數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖德を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

文科大學敎授兼陸軍敎授從六位内藤恥叟先生序
文科大學敎授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

（定價金參拾五錢）

郵稅四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て嘗て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇内無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戸の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體してこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

東久世伯○勝伯○松方伯○品川子○野村子○渡邊子○富田○金子○平田○川田氏等諸大家題字及ひ序文

品川子校閲●平田東助○平塚定次郎○武内常太郎○湯川寛吉共譯

第三版

盧氏商工經濟論

全二册

定價 上編 一圓四十錢
下編 一圓二十錢

郵● 第四種 卅八錢

便小 十里迄 九錢

包 百里迄 十六錢

税 百里外 卅二錢

郵便爲替(拂渡局)新富町

今や我が經濟は亂調の極に達し恐慌來々々々の聲愈陰雲を重からしめんとす是れ專ら我邦人經濟的知識の幼稚なるに職由せずんばあらず今の時に於て之か大に救濟整理の道を講せずんば終に其歸する所を知らざるなり本社茲に本書の第三版を發行し江湖に紹介する所以豈偶然ならんや

本書記事精確にして理義明覈なる世已に定評あり誠に國民一日も欠く可からざる良書なり綜錯なる難問題も一讀瞭然一家の經營を完し國家經濟の基礎を確立して今日の急に應するに足るの長計大策を得る所以のもの獨り此書に在らむか

發行所 國光社

東京京橋區築地二丁目廿一番地 (電話番號本局八八)

大賣捌 ●東京○文海堂○嵩山房○東京堂●大坂○吉岡

肝付海軍大佐題辭　小笠原海軍大尉序文及作歌
伊東海軍中將手翰　木村海軍大尉校閲
●●西主一
●●野口衞佐美合著

訂正三版

新案海軍遊戲法

菊版美本

詳圖入

全一冊
定價金二十錢
郵税金四錢

本書は我海國男子を養成するに最も適切なる良書にして其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戲法を至極面白く簡易にしつ明瞭に解きたるものなり世の父兄たるもの宜しく一本を繙て以て家庭の資とすべき有益の書なり

●●●學校用としては殊に妙なり●●●

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）　國光社

稟　告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本可致候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割増に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らざれは返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らざれは往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納稅の來書は一切受取不申候

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號本局八八）　國光社

佐野常民君題字
子爵品川彌二郎君題字
子爵松平乘承君序文
華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩

定價一冊代金貳拾錢郵税四錢郵券代用一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有髯の男子を凌ぎ之が旗幟を飜すものは甚少し

瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の爲に國家の爲に粉骨碎身し以て**天下百世の龜鑑**を垂れしもの岩女を推して**當代の女傑**と爲し**慈善家**の**泰斗**となす豈過稱ならんや**本書**は其畢生を敍せし者なり**天下の人士**一度本書を讀まば貪婦も猶廉に懦夫も猶起つべし

讀め！本書を讀め！請ふ本書を讀め！

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 日本赤十字發行所

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年七月四日印刷
同年七月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木良雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 （電話番號本局八八） 國光社

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

●定價金三十錢　●郵稅金四錢　●郵券代用一割增　但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史嚢に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらる丶かを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技術を練らんかを述べらる益し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せさるな憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び丁嚀親切に說き論されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目錄

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）